
奇術師の予言

七夕夜想曲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇術師の予言

【Zコード】

Z5849C

【作者名】

七夕夜想曲

【あらすじ】

深夜、屋上で佇んでいた蘭の前にキッドが現れる。キッドの予言とは?新一の幼き日の記憶。その時の幼きマジシャンと十年越しに再会を果たす。APT-Xの真実。時を察した哀はその真相をコナンに語る。そして捜査の合間に見え隠れする謎の人物。「いつたい誰なんだ?」・・・様々な謎が渦巻く中、コナンは平次、快斗と共に組織壊滅に向けて動き出す。カツプリングは新蘭平和快青です。

プロローグ

深夜0時。

真夜中にもかかわらず、毛利探偵事務所の屋上には一人の少女が立つていた。

「月か・・・」

空を見上げてその少女はつぶやいた。

視線の先には、きれいな満月が出ている。

「・・・新一・・・」

少し前の彼との再会を思い出し、今度は俯いてつぶやいた。
片手には携帯電話が握られている。

その少女、毛利蘭は携帯電話を片時も離すことがない。

彼がいつ電話をしてきても、その声が聞けるようだ。

そしてこんな眠れない夜は、より一層彼の声が聞きたくなる。

(新一・・・)

気づいたときには涙を流していた。

「美しいお顔に涙は似合いませんよ。」

「・・・えつ？」

蘭は振り向いた。

「怪盗キッド・・・」

キッドは蘭に近づいてこう言つた。

「あなたにお似合いなのは、輝くような笑顔です。彼もきっとそれ
を望んでいますよ。」

ポンッ

軽い破裂音と共にキッドの手に薔薇が現れた。

「・・・うん、 そうだよね。」

涙を拭いて、薔薇を受け取りながら蘭は言った。

(なんでだろ?) の人は犯罪者のはずなのに憎む気がしない。・・・
むしろ信頼できる。・・・)

「仕事の帰り?」

「いえ、今から行くところですよ。」

「・・・予告状出してたっけ?」

「今日は、予告状が必要ない仕事です。」

キッズはどう言つと時計に目を落とした。

「では、またお会いいたしましたよ。それから・・・

マントがハンググライダーに変わる。

「彼が帰ってきますよ。」

「えっ!」

「一ヶ月以内にね。マジシャンの予言です。」

そつと飛び立つていった。

「・・・信じるよ。・・・」

そつとぶやくと、薔薇をもつて部屋に戻つていった。

「ほっとけねーんだよ。あの顔で泣かれると。」

しかし、帰つて来たのは『彼』一人だけではなかつた。・・・・・

プロローグ（後書き）

はじめまして。未熟者ですがよろしくお願いします。

第一話 幼き日の出会い

「新ちゃん、置いていくわよ。」

「ん？ あとすこし……。」

六歳になる息子を前に、母親である有希子は頭を抱えていた。
約束している時間より早くマジックショーの会場に着いた為に、
近くの本屋に入ったが最後、

息子の新一は推理小説を手に取り、ここで動かなくなってしまった。

「これで五回目よー。そのセリフ！」

「ショーカーの開演が午後三時で、今は一時半なんだからまだいいだろ？」

新一は時計を見ながら言った。

「言つたでしょ！ そのショーカーのマジシャンが、母さんの知り合いだから挨拶にいくのよ！」

「まあ、待て有希子。」

優作が横から会話を割り込んだ。

「新一、会場に一人で行けるか？」

「あたりまえだろ！ 横断歩道を何個か渡ればいいだけなんだから。なおも本に目を向けながら新一は言った。

「そういうことだ有希子。私たちだけで先に行こう。」

「で、でも優作……。」

「じゃあ新一、一時半は会場の入り口にいるんだぞ。」

「わかったよ……。」

両親二人は会場に向かった。

二人が会場に行って三十分ほど経ったとき……。

「これおめえのじゃねーか？」

新一は自分と同じ年齢の少年に話しかけられた。

「えっ？ あっ、ありがとう。」

そう言つて渡されたチケットを受け取った。

いつの間にかポケットから落ちてしまつたらしく。

「そのマジックショーめ見に行くのか？」

「うん、ただけど。」

そう答えた途端、新一はその少年に腕を引っ張られた。

「そのショーの前に俺がマジック見せてやるよ

新一は近くの公園に連れて来られた。

「ここで？」

マジックはステージでやるものと思つてゐる新一が聞いた。

「まあ見てろって。・・・ワン・ツー・スリー！」

そつと音だけでその小さなマジシャンはいろいろな物を出現させた。
ハト、花、紙吹雪・・・

そのほかにもカードやコインなど、いろいろなマジックを見せてく
れた。

間近で見るマジックに、新一は夢中になり、あつとこつ間に約束の
時間になつた。

「そろそろ行かない」と。

「やつか。これやるよ。」

ポンッと軽い破裂音と共に、小さなマジシャンの手に薔薇が現れた。
「きつとそのマジックショーめ、今の俺のマジックよりずっとすご
いよ。

でもこつか俺も舞台に立つて、そのマジックショーメつまつとい
いマジックをやるんだ！

「お前なら絶対できるよ。俺、工藤新一。おまえは？」

「俺のなまえは・・・

「……江戸川君起きなさい！」

「ふにゃ？」

コナンは目を覚ました。

「今は授業中です！分かりましたか！」

「は、はーい先生……」

しかしコナンはさつきの夢のことをまだ考えていた。
(そういうや昔あんなこともあつたな……あの時行つたのは確か、
黒羽盗一のマジックショーだつたよな……
あいつの名前……えーっとなんだっけ?)

「あれだけ派手に寝ておいて、まだ寝足りないの？」

帰り道、哀は欠伸をしているコナンに向かつて言つた。

「しゃーねーだろ昨日は本読んで、ほとんど徹夜なんだから……
あーくそつーどうしても思い出せねー」

「何を？」

コナンはさつき見た夢の話をした。

それが過去の実話だと言つことも。

「……それで、その小さなマジシャンの名前を聞く寸前で起しき
れたつて訳ね」

「ああ、どうしても思い出せねーんだよ……」

「……人間は死ぬ前にやたらと過去の夢を見るつていうわよ。」

「おい、おめーな、縁起でもねーこというなよ。」

哀はフツと笑うと前を歩いている三人に加わった。

第一話 幼稚園の出来事（後書き）

次回まで間が空くかもされませんが、よろしくお待ち下さい。
今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしくお願いいたします。

第一話 依頼人

「ふう・・・」

鍵の掛かつた毛利探偵事務所の前でため息をつく一人の少女がいた。

「あつ、蘭ねーちゃんお帰り！」

「えつ？」

その少女は驚いてコナンをまじまじと見た。

(蘭ねーちゃん？それにこの子どもいかで・・・あつ・・)

「坊や、江戸川コナン君でしょ？お父さんがいつも褒めてるよ。『

キッドキラー』って」

「えつ？」

今度はコナンが驚く番だった。

「私、中森青子。お父さんはキッド専任の警部の中森銀二だよ。」

「あ、中森警部の娘さん。」

(それにも蘭にそっくりだな・・・違うのは、セーラー服つて事と、髪型つてとこか?)

「それで青子ねーちゃん。小五郎のおじさんに用事？」

「うん。ちょっと探してもらいたい人がいるんだけど・・・

青子の笑顔が急に曇った。

「おじさんは出張で明日までいないよ。」

「えつ！？毛利探偵いないの？・・・どうしようつ・・・」

「あつ、コナン君おかえり。」

「蘭ねーちゃん、おかえり。お客様なんだよ。」

今度は本物の蘭が帰ってきた。

「・・・あなたどこかで見たような・・・」

蘭が青子を見ていった。

「うん。蘭さんだけ？だれかに似てるような・・・」

青子もそう言つたきり考え込んでしまった。

(ハハハ、二人共がお互いに似てんだよ・・・)

「・・・へえ、私と同じ年なんだ。『青子ちゃん』って読んでいい？」

「うん。青子も『蘭ちゃん』って読んでいい？」

場所は喫茶店ポアロ。

小五郎が事務所の鍵を持っていつてしまっていたので、やむを得ずそこで話することになった。

(・・・打ち解けるの早いな・・・)

横でアイスコーヒーを飲みながらコナンは思った。

思えば和葉の時も『平次の浮氣疑惑』が解けた途端、一人は意氣投合していた。

「それで青子ちゃん、お父さんに何の依頼？」

その話になつた途端、青子の笑顔が曇つた。

「・・・人探しをお願いしたいの・・・」

そう言つと一枚の写真を取りだした。

「名前は黒羽快斗。青子の幼なじみで、江古田高校二年生。」

「・・・・・・」

蘭は食い入るように写真を見つめている。

「蘭ちゃん、どうかした？」

「あつ、ごめん。私の幼なじみにそっくりだったから。」

蘭は慌てて笑顔を取り繕つた。

「いつから行方不明なの？」

「三日前の夜から。家にも誰もいないし、学校にも来てないの。」

蘭には青子の今の気持ちが良く分かつた。

自分でつて新一を待つている身なのだ。

青子の不安な気持ちはよく分かる。

「ねえ、この人ってマジックするんじゃない？」

「「えつ！」」

いつの間にかコナンが写真を持っていた。

「うん。快斗はマジックが得意だけど……どうしてわかったの？」

青子は驚いて聞いた。

「簡単だよ。この快斗って人が写真の中で手に持っているトランプは『バイスクル』っていうて、

世界中のマジシャンが使ってるトランプなんだ。このトランプは普通のトランプに比べて少し高いんだけど、その高いトランプが写真のテーブルに三個も積んであるってことは、この快斗って人もマジックするんじゃないかと思つて。」

コナンの知識に蘭も青子も唖然とした。

「さすが『キッドキラー』の小学生ね……」

「こういう所は新一にそつくりなんだから……」

（悪かつたな……それより……）

どこかで見たような気がするんだよな。

いや見ただけじゃない実際に会ったような気もある。

そして……

（なんで懐かしい気がするんだ？）

「……えつ！蘭ちゃんの幼なじみって、あの有名な高校生探偵の工藤新一なの？」

「うん。でも私に言わせれば推理小説のためなら、徹夜でもなんでもする『大馬鹿推理之助』だけね。」

「あー、青子も分かる。快斗もマジックのネタのためならなんでもする、『マジックおたく』だもん。」
すっかり打ち解けた二人は互いの幼なじみの愚痴をこぼしあつている。

(お前らなあ・・・)

「・・・その辺にしどけよ。」

「えつ！」

気が付くと三人のテーブルの傍に、一人の高校生が立っていた。

「か、快斗！」

青子が大声をあげた。

第一話 依頼人（後書き）

時間が分かりにくいですが、蘭がキッドに会つてから三日後、コナンの夢の直後の話です。

少々辛口でも構いませんのでご意見・ご感想をお寄せください。今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしくお願ひいたします。

第三話 マジックショー

「ここの、バ快斗……どに行つてたのよ！心配したんだから！」

再び青子の大声が店内に響き渡る。

それに圧倒されて、快斗は小さくなっている。

いや、青子が大きく見えるだけか。

「……つたく、うつせなー。言わなかつたか？岐阜の有名なマジシャンに会いに行くつて。」

「全つつつ然、聞いてないんですけど…」

「あーそーですか。まあ、お前はアホ子だから、聞こえてなくとも

しょうがねーけど。」

「なんですつて！」

たちまち夫婦漫才が始まった。

（なんか、大阪の二人組みみたいだな……）

コナンは、毎度のように夫婦漫才を繰り広げる平次と和葉を思い浮かべていた。

といつても、蘭と新一もしゃつぢゅう小競り合いをしていたのだが・

・

（ほんと新一にそっくりね……違うのは、学生服って事と髪型かな？）

けんかするほど仲が良い。

蘭の快斗に対する第一印象も、コナンの青子に対する第一印象も、似たり寄つたりだった。

「・・・まつたく、マジシャンに会うために岐阜まで飛んで行って、三日間も音沙汰なしなんてバッカみたい・・・」

「悪かつたつて、そんなにグズるなよ。」

「この『マジックおたく』・・・」

「ナン」と快斗が向かい合い、蘭と青子が向かい合いつ形で座っている。青子はまだ怒りがおさまらないのか、ぶつぶつ文句を言っている。

「ほら、土産やるから機嫌直せって。」

そう言つて快斗は、五百円玉よりひとまわりぐらい大きい、外国の銅貨を三枚取りだした。

「・・・なんで、岐阜のお土産が銅貨なのよ。」

「いいから、両手出せって。」

青子は両手をそろえて差し出した。

「ほりー!」

快斗が青子の手に銅貨を落とした途端、三枚の銅貨は直径五センチぐらいのせんべいに変わっていた。

「わあ!」

まさにマジック。

あれだけ不機嫌だった、青子の機嫌があつという間に元に戻った。

「三枚あるから、青子とボウズと一緒に一つと、名前なんだつけいい?」

快斗が蘭に、知らないふりをして聞いた。

「毛利蘭です。『快斗君』でいい?」

「かまわねーぜ。じゃあ俺も『蘭ちゃん』って呼ばせてもらつてもいい?」

こうしてお互いの呼称が決まった。

「ねえ、快斗兄ちゃんって黒羽盜一さんの親戚?」

「ナンが快斗に聞いた。

「親戚もなにも、俺の親父だぜ。それにしても、よく知ってるなボウズ。」

「ナンの正体を知つてこる快斗は、わざとらしく言った。

「そうだ！蘭ちゃん達に迷惑掛けたお詫びに、マジック見せてあげたら？」

青子が思い出したように言った。

「迷惑つていったって、お前が勝手に大騒ぎしたんじゃねーか。」

「その大騒ぎの原因はだれよ？」

「・・・しゃねーなあ・・・」

（名探偵には一回見せたネタだけビ・・・今これしか持つてねーんだよな・・・）

そう思いながらテーブルの横に立つた。

そう言つて懐からシャープペンシルを取りだした。

「・・・さあ？」

今度は複雑な表情をして言つた。

「風船は破裂するんだけど・・・」

パンッ！

風船が破裂し、その場所にトランプが一組現れた。

「・・・マジシャンはいつもこいつやってトランプを出すんです。」

そう言つてトランプを揃え、机に広げた。

「・・・・」

蘭は驚きのあまり言葉を失つている。

「・・・青子も今のマジック初めて見た・・・」

青子もかなり驚いたようだ。

片や、コナンはなんとも複雑な表情を浮かべてゐる。

「・・・ボウズどうかしたか？」

「なんでもないよ、快斗兄ちゃん。もっと見せてよ。」

「お、おーー！」

コナンは快斗の手を引いて、一階に上がつてこつた。

第三話 マジックショー（後書き）

私はマジックが趣味で、その方面には詳しいので快斗のマジックは実現可能な物にしてみました。

そして岐阜には実際に有名なマジシャンがいます。

私が最も尊敬するマジシャンの一人です。

感想や評価をどんどんお寄せ下さい。

今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしくお願ひいたします。

第四話 探偵と怪盗

「おじボウズ、どうこうひつもりだよ。いきなり上に行こうなんて…」

コナンの部屋に連れてこられた快斗は、不満そうに言った。

「まあ、いいから座つてよ。」

コナンはそう言って椅子を持ってきた。

「椅子よりテーブルの方がありがたいんだけどな。特にトランプマジックは…。」

「そんな物いらないよ。少し話がしたいだけだから。マジックは後でいいよ、快斗兄ちゃん…いや、怪盗キッド。」

コナンは子供の演技をかなぐり捨てて言った。

「さすがだな名探偵。怪盗キッド。本名は黒羽快斗だ。」

快斗もキッドの口調で言った。

「やけにあつせり認めたな。」

「まあな。本当にお前宛に予告状を出してからにするつもりだったけど…手間が省けたぜ。」

快斗はゆっくりと窓の傍まで歩いて歩いていった。

「…何のことだ?」

コナンは怪訝そうに叫んだ。

「話を聞いてくれるか?名探偵。」

コナンが頷くと快斗は話し始めた。

「話はここから始まる。なぜか親父が怪盗キッドになつた所から。その理由はまだ分かつてないが……」

コナンは黙つて聞いている。

「それが十八年前だ。そして、その十年後親父は死に、当然ながらキッドは姿を消した。

さらにそれから八年後の今、キッドは再び活動を再開した。ここまではいいな名探偵?」

快斗は、考えをまとめるために話を区切つた。

「キッドが復活した直後、俺は自分の部屋に隠し部屋を見つけた。それは親父が遺した物で、そこには怪盗キッドの衣装の一通りが揃つていた。」

「おい、ちょっと待てよ。キッドの一^{代目}はお前だろ?」

コナンは不審に思つて聞いた。

「すぐに分かるよ名探偵。俺は奴に会えば何かが分かると思つて、その服を身に着けてキッドの予告場所に行つた。

そのときに怪盗キッドやつていたのは、親父のかつての付き人、寺井黄之助だ。

俺は彼に、親父が事故死ではなくて殺された事、怪盗キッドだつた事を聞いた。
そして、親父を殺した奴らをおびき出すために、今度は俺が怪盗キッドになつた。

「・・・黒羽盜一は殺されたのか?」

「そうだ。続けるぞ。俺がキッドになつてしまらくして、ブルーバーステーを狙つた時、俺は親父を殺した奴らに出会つた。俺はそいつらの後をつけて、奴らの目的を聞き出した。」「それで、そいつらの目的は何なんだ?」
コナンはすっかり探偵モードになつていた。

快斗は、そんなコナンに苦笑いしながら続けた。

「古くからの言い伝えにこうある

『ボレー彗星近づく時、命の石を満月に捧げよ・・・すれば涙を
流さん』

そして、その涙をのんだ者は不老不死を得る。」

「・・・なるほど。その『命の石』つてのがビッグジュエルの内の
一つで、

奴らの野望を阻止するために、お前が怪盗キッドを続けてるってと
こか?」

「！」答。さすがは名探偵、察しがいいな。その命の石はパンドラ
とよばれている。」

「それにしても、その途上で小さくなつた工藤新一に会うなんてな
・・・」

「・・・そういうえばお前はどうここまで知つてるんだ?」

「えーっと。お前が、黒ずくめの組織に毒薬を飲まされて体が縮ん
だ事、眠りの小五郎並びに、眠りの園子嬢の正体、
工藤新一の正体を知つている人一覧、それから灰原哀の正体つてと
こか。」

「俺の正体にはいつ気付いた?」

ブラックスター

「漆黒の星の直後だな。幼い日の記憶のおかげで。」

快斗は微笑んだ。

「覚えてるか、新一?」

「ナンも懐かしそうに笑つた。

「ああ、今日の授業中の居眠りで夢に見たぜ。」

思い出した直後に再会だからな……改めてよろしくな快斗。」

「……捕まえないのか？」

「自白じや詮拠にならぬーからな……それに続きがあるんだろう？」

快斗はため息をついた。

「何で分かった？」

「岐阜に行くだけで、二口もこらねーだろ? ついでに何か岐阜に行つたこと自体が嘘だろ。」

「じゅあ二口間の冒険の話をすむか……」

第四話 探偵と怪盗（後書き）

誤字、脱字等あつまましたらお知らせ下さい。

ご意見・ご感想お待ちしています。

今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしくお願ひいたします。

第五話 潜入捜査と共闘

白いマジシャンは、とある建物の屋上に降り立つた。ドアに近づき鍵をこじ開ける。

不法侵入はお手の物だ。

(さてと、誰に変装するか・・・)

階段を下りると、曲がり角から人の足音が聞こえた。おそらく見回りだろう。

足音からすると相手は一人だ。

(ちようどいい・・・)

催眠スプレーを取りだし、標的目掛けて噴射した。ドサツ

(見回りにしては、ずいぶんラフな格好だな・・・)

眠ってしまった標的を見て思つた。

ボロボロの長ズボンに、白のTシャツ。

そして持ち物を調べた。

するとズボンのポケットから一枚の紙切れが出てきた。

死刑囚296番

罪状 作戦の失敗

血液型 A B

三日後に毒薬の実験に使うため別組織に搬送。
本組織内ならば、行動は自由とする。

(なるほど、死刑囚か・・・道理で薄着なわけだ。それにしても恐

ろしい奴らだな。三百人近く殺していやがる・・・)
父親を殺した組織が思つていたより大きいことを知り、武者震いが
走るのを感じた。

「おー、起きる。」

死刑囚はトロンとした手を開けた。

「殺しはしないから、質問に答える。お前の部屋はどうだ?」

「一階の・・・23号室・・・」

「よろしい。もう一回眠つてもいいわ。」

今度は、さつきより強いスプレーを嗅がせた。

「まあ、数日間ゆっくりしてな。」

そう言つて掃除道具入れの中に閉じこめた。

(この階の掃除は一週間後だから、見つかることはまずないな)
壁に貼つてある紙を見ながら考えた。

(21号室・・・22号室・・・ここだ! 23号室)

死刑囚に変装したキッドは扉を開けた。

そこについたのは、鉄製のベッドが一つと机が一つだけだった。
便所も備え付けである。

(こりや部屋つていうより、独房だな・・・まあ当然か)

考えてみれば死刑囚である。

良い待遇をされるわけがない。

(建物の回りの壁は帶電しているから、よじ登るのは無理。
ここから見えるたつた一つの出口も、絶えず見張りが居るから脱出
は不可能つてわけか)
ようやく疑問が解けた。

組織内といえども、行動が自由とこりのものはおかしいと思つていたの
だ。

(「いや、都合がいい。出入りする人間も観察できるし、行動は自由だ。

今日は無理としてもあと三日、しっかり嗅ぎ回ってやるか……）

「……お前も、たいへんだな」

話の途中でコナンが言った。

「あなた、めしに魚が出てくるし……」

快斗は、思い出すのもおぞましいこというふうに言った。

「魚はいいとして、それからどうなったんだ。」

「ああ、その後地図づくりで丸一日使つちまつたんだけど……」

（今日一田で、メインコンピューターのデータをコピーしてねと・・・）

さつき看守が来て移送は今日の午後三時だと言つた。

それまでにデータをコピーしなければならない。

急いでメインコンピューターのある場所へ向かつた。

ドアをピッキングでこじ開ける。

田の前にはとてつもなく大きなコンピューターがあった。

「ものすごいデータ量だ・・・時間がかかるぞ」

しかし、あきらめる訳にはいかない。

そつ自分に言い聞かせて作業を始めた。

データを取り終え、逃げる準備をしていると、外に車が止まる音がした。

(やべえ、もう来やがった)

荷物をまとめて部屋を飛び出し、逃走のため屋上へ向かっていった。

「・・・それで、その組織を潰すために、協力してくれってわけか？」

話が終わるとコナンが言った。

「バー口、最後まで聞けよ。この話にはおまけがあるんだ。お前に
ひとつはこっちの方が重要だぜ。」

快斗は続けた。

「そのデータのコピーをとるときに少し内容を見たんだけど、ほん

の一年前にある組織と同盟を結んだんだ。

同盟といつても形だけで実際は合併だけだ。俺が化けてた死刑囚は、そこに移送される予定だつたらしい。」

「ふーん、拡大したのか?」

「そちらしい。それで、その組織から引き取りに来た奴の名前がこうだつた。『コードネーム・ウォツカ』」

「奴らか!」

「ああ、だからお前に話しに来たんだ……どうだ名探偵? 手を組まないか。」

相手は探偵で、自分は怪盗。

快斗は、許されるはずのない提案をした。

「奇遇だな。俺も同じ事考えてたぜ。」

「それでそのデータは?」

「ナンが聞いた。

「俺の知り合いに預けてある。まさか今口話すとは思わなかつたらな。」

「……今日は予告状を届けた、後田話す予定だつたつてわけか」「やうやう」と。データに異常がないことを確認し次第もつてくるぜ。

それじゃあ、またな新一。あんまり蘭ちゃんを泣かすなよ。」

「うひせーな……」

こうして二人は別れた。

「・・・快斗・・・」

「ん? どうかしたか?」

快斗と青子は家路についていた。

「快斗つて・・・・・・」

第五話 潜入捜査と共闘（後書き）

先日、青子のお誕生日企画として、短編『本日快晴』を書きました。そんな暇があるんならこっちを更新しろ！といつ怒号が聞こえてきそうですが、勘弁してください。

うかうかしてると九月が終わりそうだったの。合併した二つの組織と、まだ明らかにされていない青子の両面。次回以降もどうぞお楽しみに！

尚どちらの作品も、『意見・』『感想お待ちしています。

今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしくお願ひいたします。

第六話 正体

(ちくしょー、情けないぜ・・・)

快斗が尋ねてきた次の日、コナンは風邪をひいてしまった。
蘭特製の卵粥が食べられるのはありがたいが、工藤邸ほど本がない
為、退屈でしかたがない。

高かった熱も、今は下がつてしまつたのでなおさらだ。

(らーん、早く帰つて来てくれよ・・・)

天井を眺めている内に、そのまま寝入つてしまつた。

「ただいまー」

意識が急速に現実に引き戻された。
蘭が帰つて來たようだ。

すると、まもなく部屋のドアが開けられた。

「コナン君、調子はどう?」

「うん、もう大丈夫だよ蘭ねーちゃん。」

だが、蘭は念のためか自分の額をコナンの額に当てる。
これも風邪の時の特権。

「・・・熱は下がつたみたいだけど、薬飲んでおいた方がいいわよ。」

「薬ねえ・・・」

コナンはなんとも嫌そうな顔をした。

「コナン君、薬苦手だつたつけ?」

「う、うん、ちょつとね。」

(トロピカルランドの時以来なんだけどな・・・)

あれ以来、どうも薬が苦手である。

唯一例外があるのだが・・・

「・・・解毒剤なら、飲みたいんじゃない？元の体に戻れるから・・・」

蘭は買い物袋を探りながら言った。

（そうそう。さすがは蘭、分かってるじゃねーか・・・・・・。
・えつ？）

聞き流しそうになつたが、慌ててその意味を把握した。

いまや蘭は買い物袋を探るのを止め、コナンを見つめている。

もう誤魔化すのはやめよいつよ・・・新一

「なつ、なに言つてんだよ、蘭ねー・・・」

いつものように反論しようとしたが、途中で言葉を止めてしまった。今までにバシかけたことは何度があるが、今回の蘭は明らかに様子が違う。

「・・・もう言ひ逃れさせないわよ。昨日の快斗君との会話、全部聞いてたんだから。」

「！」

迂闊だつた。

話に夢中になつていて、外に誰が居るかなんて気にする余裕が無かつたのだ。

まさか聞かれていたとは・・・

「なんで・・・なんで言つてくれなかつたのよー今まで何回問いつめても、いつもいつも誤魔化して・・・どうしてよー」

蘭はそれだけ言い終えると、それまで我慢していた涙を急に溢れさせた。

コナンは眼鏡を外した。

「・・・巻き込みたくなかつたんだ・・・組織の存在を知つたと、

奴らに知れたら容赦なく消される。

俺が勝手に首を突っ込んだ事件に、蘭を巻き込みたくなかつたんだ・

・・

しばし沈黙が訪れた。

「・・・バカだよな、俺つて・・・」

沈黙の後コナン、いや新一が言つた。

「勝手に事件に、首を突っ込んで、体を縮められて、蘭に心配ばつかかけて・・・」

だが、その言葉も途中で遮られた。

蘭が新一の小さな体を抱きしめたのだ。

「・・・蘭?」「

「ねえ、新一・・・約束して。もう絶対に隠し事はしないって・・・
その結果がどんなに危険でもいいから・・・
わたしを悲しませることになつても構わないから・・・新一と隠し
事だけはしたくないの・・・」

「蘭・・・」

新一は、今ほど自分の姿の無力さを感じたことはなかつた。
好きな女が泣いているのに、抱きしめてやることすらできないのだ・

「わたしは・・・わたしは新一が・・・」

だが、新一は蘭の口に人差し指を当てた。

「分かつてる。お前の気持ちは痛いほど分かつてるよ・・・でも返
事は待つてくれないか?元の姿に戻るまで・・・」

我が侭だと思いながらも新一は言つた。

「・・・うん、分かつた。わたし待つてるから・・・」

蘭はようやく新一を離し、横に座つた。

頬をほんのり染めながら・・・

その後、新一は蘭に、眠りの小五郎の正体や、灰原哀の正体などの補足的な説明をした。

一通り話し終えた後、新一は蘭から驚きの事実を告げられた。

「それからね、新一。和葉ちゃんも、コナン君が新一だつて知つてるから。」

「！？ なんでだよ・・・」

「快斗君と話してゐたあとね、どうすればいいか和葉ちゃんに相談したんだ。服部君は知つてるみたいだつたし。」

「・・・あの野郎、いつもいつも工藤つて呼びやがつて・・・」

「服部君も、いまいろ和葉ちゃんに問いつめられてるんじゃない？」

『コナン君つて、工藤君なん！？』 つて。

蘭はおかしそうに笑つた。

「・・・つてことは青子ちゃんも知つてるつて事か？」

ふと、思い当たつて新一が聞いた。

「うん。『詳しくは、快斗に後で直接聞く』 つて言つてたから昨日は大変だつたんじゃない？」

「服部はともかく、快斗の方は大変そうだな・・・」

自分の幼なじみが怪盗キッドなのだ。

現実を受け入れられるだろうか。

「でも、大丈夫だと思うわよ。『なにがあつても快斗のすべてを受け止めてみせる』 とも言つてたから。」

「それなら安心だな。」

ホツと一息ついた。

蘭に似ているせいが、何となくほつとけない。

今回正体を知った人のためにも、組織の犠牲になつた人のためにも、そして蘭のためにも、絶対に組織を潰さねばと、新一は誓つた。

「ちよつと、お父さんどうゆう事よ！」

ベロベロに酔っぱらつて出張から帰つてきた小五郎に、蘭が怒号を上げている。

「だーかーらあ、明日から三日間、ヒック、町内の人と旅行するつてえ、言つてんだよ～」

呂律がうまく回つてない。

「そういうことは、もつと早く言こなさいよ～」

家を一田間空けた直後、さらに三日間旅行する父親なんか、まず居ないだろ？

それを直前に言つとなればなおさらだ。

「そうゆつことだから、ヒック、朝六時に起こしてくれよ～～～

それだけ言つと、そのまま、机で眠り込んでしまつた。

「もおー、お父さんたら～！」

(蘭と三日間、一人きりか・・・組織の前に一波乱ありそうだな・・・)

新一はため息をついたのだった。
・

第六話 正体（後書き）

お楽しみ頂けたでしょうか？

蘭、和葉、青子に知られてしまったコナンの正体。
ご意見・ご感想お待ちしています。

今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしくお願ひいたします。

第七話 千客万来

(なんだ、もう八時じやねーか・・・)

蘭に正体がばれた翌日の事。

そして今日から三連休である。

朝起きて、いつものように眼鏡を掛けようとしたが、途中でその手を止めた。

(・・・今日から三日間は、掛けなくてもいいな・・・)

この屋根の下で、正体を誤魔化さなければならないのは、今や小五郎だけだが、その小五郎は留守である。

眼鏡を掛ける必要はない。

しかし、便利な探偵道具でもある眼鏡を手放すわけにもいかず、結局胸ポケットに収めた。

(蘭は・・・事務所の方か)

そして、朝食を食べるために下に降りていった。

事務所のドアを開ける。

「おはよう、蘭・・・」

と蘭に向かつて言つたが・・・

「よお、やつと起きたか工藤!」

「おはよひ、工藤君。」

蘭と一緒に居たのは、なんと大阪の一人組。

またしても、朝早くからの『ご訪問』だ。

「『やつと起きたか』じゃねーよ!・・・こんな朝っぱらから、しかもアポなしで来やがって・・・」

もつ演技をしなくてよいのは楽だと思ひながらも、しつかり文句を言つた。

「まあ、やう怒りとなや一藤。ちつとも長く居られる方がええやろ?」

平次は満面の笑顔で言つた。

「・・・・ひるせえだけなんだけどな・・・」

対して新一は白い目をしてくる。

「なんや、えらこじ立腹やな・・・」

「当たりめーだ! まだめしも食つてねーんだぞ!」

あまりにも自分勝手な平次に對して、ついに新一が怒鳴り声を上げた。

「あー、分かつた、分かつた。めし食いながら、例のキッドの話しうかせてもらうで。」

「『』めんな、蘭ちゃん。何も食べてへんからアタシらの分も頼むわ。」

「

「・・・世の中、広いよつで狭いなあ。」

朝食を取りながら新一に説明を聞いた後、平次が言つた。

「中森警部の娘の幼なじみが一代田怪盗キッドで、そいつと一藤は知り合いやつたんか。」

今は、四人でコーヒーを飲んでいる。

「まあな。一代田怪盗キッドは黒羽盗一で、母さんと知り合ひだし・

・・・

昨日西親に電話したときによ、そつ聞かされた。

「そんで。そのデータはどうなったん?」

今度は和葉が新一に聞いた。

「異常がないのを確認し次第、快斗が持つてくれるからけど・・・」

そのとき、新一の携帯にメールが入った。

今、青子と一緒に毛利探偵事務所のドアの前。

b y 快斗

「・・・は?」

ピンポン

「・・・ト、ト、ト、ねえ事してんじゃねえよ・・・」

新一はドアを開けにソファーを立つた。

「よお、新一。おつと、西の名探偵も居たのか。千客万来つてとかな?」

快斗が笑顔で言った。

(それはこっちの台詞だ・・・)

「蘭ちゃん、ごめんな。いきなり押しかけて。」

青子はすまなさそうに言った。

「ううん、大丈夫よ青子ちゃん。」

驚いたのは大阪の二人組だ。

「なんや、工藤、お前双子やつたんか？」

「蘭ちゃんがふたり！？」

確かに、何の予備知識もなければ、いつもなるだろ？

「・・・あんたが快斗か。ビックリしたー。工藤にそいつぢや。」

「めんな、青子ちゃん。アタシ遠山和葉。よろしく。」

平次と和葉が自己紹介をしている。

「貴方のことはよく存じ上げていますよ。西の名探偵。」

「中森青子です。よろしく和葉ちゃん。」

お互に自己紹介が終わると、新一が本題を切り出した。

「それより快斗、データはどうなったんだよ？」

「ああ、ここのリュックの中にあるぜ。」

そう言つと、快斗は荷を下ろそうとしたが、新一が制止をかけた。
「着いたばかりの一人には、悪いんだけど俺の家に行かないか。
ここじゃあ少し狭い。」

確かに、毛利探偵事務所は、六人で居るには狭すぎた。

「工藤君の家つて、すごいんやなあ・・・」

和葉が歎声を上げている。

「ほんと、豪邸みたい・・・」

青子も驚いている。

「いや、青子『みたい』じゃなくて、豪邸だろ。」

「あっ、そっか。」

そのやりとりにみんなが笑った。

「それじゃ、快斗。荷物を置き次第、博士の家に行くぞ。」

新一が快斗に言った。

「いや、ちょっと待て新一。 それはまずい・・・」

「なんでだよ！？」

快斗は何かを言おうとしたが、回りを見て止めた。

「・・・また後で・・・」

第七話 千客万来（後書き）

やつと平次と和葉が登場しました。

快斗と青子も出てきて、まさにタイトル通りです。
さて快斗は何を言おうとしたのでしょうか？

話は次回に続きます。

どうぞお楽しみに。

ご意見・ご感想・ご指摘等お待ちしています。

今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしくお願ひいたします。

第八話 青子の言葉

「あれつ、あの三人はどこに行つたの？」

三人で昼食を準備していた時、蘭が和葉と青子に聞いた。

「あの三人なら『絶対上がつて来んな』って釘さして、一階に行つたみたいやで。」

野菜を切りながら、和葉が答えた。

「うん。この前みたいに聞かれたくないからつて、快斗が言つてたよ。」

青子も和葉に続いて言つた。

「そういえば、青子ちゃん、あの後、快斗君になんて言つたの？」

蘭が鍋を火に掛けながら、青子に聞いた。

「あの後つて？」

青子が首を傾げた。

「新一と快斗君との話を聞いた後の事よ。」

すると、青子がなぜか顔を赤くした。

「・・・言わなくちゃいけない？」

青子が小さな声で言つた。

「ちょっと聞きたいなつて思つて。」

しばらく迷っていた青子だが、ゆっくりと話し始めた。

快斗つて、怪盗キッドなの？

快斗が一階で新一と平次に話している。

奇遇にも、男三人もその話をしていた。

「つと、こう言われたときは、心臓が止まるかと思つたぜ……」

快斗が続けた。

「天下の怪盗キッドも、青く美しい花の前には『形無し』って訳か
？」

新一がそう言つと、快斗は赤くなりながらも、やり返した。

「つるせえ！お前だつて『蘭』という名前の花には、敵わねーだろ
？」

ダイヤモンド・カット・ダイヤモンドの始まりである。

「・・・言つてくれるじゃねーか・・・」

新一も負け劣らず顔を赤くしている。

それを見て平次が、横槍を入れた。

「ほんま一人とも似たもの同士やな。隠事して、愛しの彼女を泣か
せたり、

同じ組織を追つかけたり、それから容姿もやな。」

「「うるせー！」

二人が同時に怒鳴つた後、快斗が咳払いをして話をもとに戻した。

「・・・まあその辺はいいとして、続けるぞ？」

「快斗って、怪盗キッドなの？」

唐突に告げられたその言葉。

快斗は言葉を失った。

青子は尚も続ける。

「さつき、「ナン君と……じゃなかつた、工藤君と話してゐの聞
いてたんだよ……」

青子が静かに言った。

「…」

誰よりも一番、知られたくないかった女。
しかし、彼女は知ってしまった。

「ねえ、答えて……快斗……」

沈黙が訪れた。

「…・ごめんな青子、ずっと黙つてて。」

しばらくして、快斗が言った。

それは肯定の言葉。

（俺はどうすればいい…）

犯罪者である以上、青子のもとから去るしかない。
だが、どうして最愛の女性のもとを、去ることができんだろうか。
考えが堂々巡りしていると、急に青子の手が快斗の背中に回された。

（離したくない・・・）

青子はそう思つていた。

自分が問いただせば、快斗はきつと姿を消してしまつ。

そんなことは分かつていて。

二度と会えなくなるかもしれない。

それも分かつていて。

しかし、青子は彼に問い合わせた。

彼と隠し事なんて、絶対にしたくない。

その一心で・・・

だが、行動と裏腹に彼と離れたくないと思つた。

彼の別の姿が犯罪者であろうと構わない。

快斗の替わりなんて絶対にいない。

ずっと一緒に居たい・・・

気が付いたら、彼を思いきり抱きしめていた。

「快斗・・・お願ひー!どこにも行かないで!ずっと青子の傍に居て・
・」

「青子・・・」

田の前の少女は涙を流しながら、ますます強く抱きしめてくる。
(どうして俺を・・・)
ずっと騙していたというのに。

自分は犯罪者であるといつのこと。

どうして青子は自分を必要としてくれるのだろうか。

「・・・本当にいいのか?俺なんかが傍にいて・・・
思つていた疑問を青子に尋ねた。

青子は頷いた。

「・・・本当に快斗、ずっと傍にいて、青子は・・・」

青子は快斗が好き・・・

「・・・今の俺が言えるのか分からねーけど、俺もだぜ青子。ずっと、ずっと青子が好きだった。」

夜も更けた街の中、二人は抱きしめ合つた。

そして快斗は、彼女だけは何があつても絶対に守ると誓つた。

「・・・へえ、青子ちゃん大胆ね。」

蘭が微笑ましそうに笑つて言った。

「ほんまや、アタシやつたら道端でそんなことできくんわ・・・」

和葉はため息を吐きながら言った。

いまや青子の顔は、名前とは反対に真つ赤に熟れたりんごのようだ。「ちょっと、やめてよ二人とも・・・それに、そろそろ火をとめなきや。」

見れば、たしかに鍋が沸騰している。

そのとき一階から新一、平次、快斗が降りてきた。

「蘭、ちょっと博士の家に行つて来るぜ。データを一通り確認したから。」

新一が台所の蘭に向かつて言った。

「もう少しでできるから、お皿ご飯、食べて行きなさいよ。冷める
とおいしくないしね。」

蘭が新一に言った。

「いや、ちょっと急ぐんだけど……」

しかし、和葉が新一に言った。

「工藤君、あかんで。ここまで騙しどりたんやから、そのぐらい聞
くんがあたりまえやろ？」

それに加えて横から平次が口を挟んだ。

「せやな、食つてからでも遅くないし、和葉の腕前にしつかり文句

言つたるか。」

「なんやで！」

平次の余計な一言から、いつもの夫婦漫才が始まった。
(おいおい、またかよ・・・)

そのおかげで昼食が予定より遅れたのであった。

第八話 青子の言葉（後書き）

更新が遅れています。

なかなか話が進みませんが、次回は少し進展がある予定です。

大阪弁のつっこみ・ご意見・ご感想などございましたら、ご遠慮なくお願いします。

今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしくお願いいたします。

第九話 とある研究所

「博士、じゅまるが。」

博士の家に上がりながら、新一が言った。

「おお、新一君に平次君、それから快斗君じやな？」

ニシテ、ミヒノガタナカニハ、アリ。

「パソコンを使うかね、新一君？」

新一から、話を聞いて立ち上げていたパソコンを指差して、博士が

卷之三

そう言つが早いが、持つてきていたノートパソコンを立ち上げ始めた。

「博士、俺達に何か隠してないか？」

「・・・何の事じや、新一。

しかし、新一はその問いに答えなかつた。

・・・あたかも、97年度の資料

「……どうだよ・・・」

1970年度名譽會員
阿笠博士

• • • • • • • •

「どうごいとだよ、博士。なんで博士が組織の一員だつたんだよ。

沈黙が訪れた。

「・・・分かつた。わしの知つてゐる全てを話そつ、新一、それからみんな。」

三十年前

「・・・ちょっと、阿笠博士、話しがあるんだが・・・」

研究所にある人が、訪ねてきた。

「どうしたんだ、富野博士。」

訪ねてきたのは、富野厚史博士。

薬学分野の天才で、昔の友人だ。

「私が今、所属している研究所に来ないか?」

「ああ、ある薬の研究をしている所なんだが、君に一役買って欲しくてな。」

ところが、阿笠は笑つて言つた。

「おいおい、私は工学分野だぞ。そんなところに行つても、足を引っ張るだけだよ。」

しかし、富野の方は話を続けた。

「まあ聞け、その研究所だが、今データの処理に困つていてな。それらを処理できるコンピューターを造つて欲しいんだ。どうだ、君に適任だろ?」

阿笠は少し考えて言つた。

「だが、ずっとそこには居れないぞ。こつちも今研究中の課題があるからな。」

富野は少しの間考えていたが

「よし、分かった。一年だけでいいから来てくれないか。」

その一年後

「・・・すじいぞ、阿笠博士、たつた一年でこれだけのものを造るとは。」

二人の目の前には、完成した巨大なコンピューターがあつた。阿笠も改めてそれを見て、とても満足そうだった。

「いや、ここのみんなの協力がなければ、ここまでできなかつた。こちらこそ、ありがとう。お礼を言うよ。」

二人は握手を交わした。

「君の名前はおそらく、名誉会員に名を連ねるぞ。私の方からも、上に言つておくよ。」

「・・・あの大きなコンピューターを、博士が造つたのか・・・」実際にそれを目の当たりにした、快斗が言つた。

しかしそれを遮るように、新一が言つた。

「そのときに怪しいと思わなかつたのかよ。それだけの大金がどこから出るのか不思議に思わなかつたのか？」

しかし、博士は首を振つた。

「怪しもうなんて、これっぽちも思わんかつたよ新一。確かにそのころから真っ黒な服装じゃつたが、

研究員に悪い雰囲気は全くなかつた。それにそのころは、犯罪なんかとは無縁の純粹な研究所じゃつたし、金の出資者も、創立者も富野博士が教えてくれた。」

「出資者と創立者やで？」

平次が聞いた。

「創立者は大黒蓮太郎、スポンサーは鳥丸蓮耶じゅよ。」

「なんやて！昔の日本のお偉いさんとあの大富豪か。」

他の一人も驚いていた。

「そうじや、その後大黒蓮太郎は初代の研究所所長に、大黒の死後は鳥丸蓮耶がトップに立つた。そして大黒は鳥丸の名にちなんで研究所に名前を付けた

『ブラック・バード』と。宮野博士が話してくれたのはここまでじや。」

しばらく皆が、それぞれの想いに耽っていた。

「その研究所が犯罪組織になつたと知つたのは、新一が小さくなつた時じやよ。」

博士が続けた。

「あの時新一が言つていた、真っ黒の服装と薬といつ言葉で、そのことが分かつた。これがわしの知つてゐるすべてじゅよ。」

「・・・・・」
「・・・・・」
「・・・・・」

三人は言葉を失つた。

「わしが発明した機械が犯罪に使われてゐると思うと、とても話すことができんかった。すまなかつた新一。」

博士が頭を下げた。

「・・・分かつたよ。博士も組織の解体に手を貸してくれればいい。それが償いになるだろ？」

「もちろんじゅよ。全力を頼べますよ。」

「そんで、小こじり姉ちゃんはどこなんや？」

平次が博士に聞いた。

「はて、ついさつき散歩に行つたが……」

博士は首を傾げた。

「変じやのう、もう一時間も経つぞ。」

三人の脳裏を嫌な予感がかすめる。

「博士！ 灰原はバッジを持つてたか？」

「ああ、確か持つていたと思うが……」

博士はまだ状況が読めないらしい。

「新一！ 追跡眼鏡だ！」

「……シェリーは捕まえたわよ。じゃあ待ち合わせ場所でね。」

「……OK、ベルモット。」

第九話 とある研究所（後書き）

伏線であつた快斗の台詞の処理です。

博士はボスではないが、何らかの関係があると考えているので、このような展開にしました。

ご意見・ご感想・ご指摘などありましたら遠慮なくお願いします。

次回以降もどうぞ期待ください。

今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしくお願ひいたします。

第十話 ベルモットと狙撃者

「博士、車を出してくれ！」

追跡眼鏡をポケットから取り出し、電源を入れながら新一が言った。

「よし、分かつた。」

博士はガレージに向かつた。

「それから・・・」

平次と快斗に向き直つた。

「二人はここにいてくれ。巻き込むわけにはいかない。」

しかし、一筋縄に事が運ぶわけがなかつた。

「アホ！今までにも、散々巻き込まれとるんやで！今更何を言づん

や！」

「おい、新一。そいつらは俺の敵でもあるんだぜ。」

「当然の」とく、二人は不満の声を上げた。

「いいから、聞け！」

新一が一人を制した。

「灰原を誘拐したのは、多分ベルモットだ。前回みたいに、俺相手なら多少手加減するかもしねないが、

おまえら二人はそうはいかない。特に快斗、もし仲間がいて、お前が『工藤新一』に間違えられてみる。

その場でお前はあの世行きだぞ！」

「・・・・・・」

「・・・・・・分かつた。俺達はデータの見直しをしとく・・・気を付けるよ、新一。」

新一は頷いて、ガレージに向かつた。

「・・・・哀君の現在位置はどこじや？」

博士が助手席の新一に聞いた。

「……ここから十キロの地点だな……その交差点を右に。」

それだけ言うと、新一は携帯電話のボタンを押した。

「……ジョディ先生、実は……」

(イイは？・・・・・)

意識が戻った。

どうやらここには、廃ビルの地下駐車場のようだ。

見知らぬ車の後ろの地面に、哀は寝かされていた。

(どうしてこんな所に？・・・)

疑問が『どこ』から『なぜ』に変わったところで、車から降りてきた人物が銃口が向けてきた。

「・・・ベルモット・・・」

記憶が一挙によみがえつて来る。

散歩中に後ろから声をかけられたこと。

そして、その次の瞬間、口に布を当てられたこと。

「裏切り者の処刑が始まるわよ・・・ショリー・・・」

そして一発の銃声が響き渡った。

『哀ちゃんが、誘拐された！？』

「多分犯人はベルモットだ。急がないとまずい・・・」

『分かったわ、FBIも動いてみる。』

「ありがとう先生。・・・現在、発信器の位置は天海ビルの地下駐車場。』

『OK！』

新一は携帯を切つた。

(間に合ってくれよ・・・)

「・・・くつ・・・」

腕から血が流れる。

ベルモットが撃つた最初の銃弾は、哀の右腕に当たっていた。
痛みに顔が歪む。

「・・・次は外さないわよ・・・」

ベルモットは引き金に指をかけた。

哀は思わず目を瞑つた。

ズキーン

再び銃声が響いた。

しかし、撃たれたのはベルモットの銃の方だった。
銃が腕を離れて飛んでいく。

「その子はあきらめる、ベルモット！」

銃弾の飛んできた物陰から声がした。

しかし、その声は・・・

「赤井秀一！？そんなばかな！」

先日、殺したはずの赤井秀一の声だった。

ベルモットは予備の小銃を取り出し、物陰に近寄った。

・・・そこには誰もおらず、代わりに小さな機械が落ちていた。

(・・・これは？)

だが、それを拾う間もなく。

一台の車が駐車場に入ってきた。

「動くな、ベルモット！」

新一が時計型麻酔銃を構えながら言つた。

「抵抗しても無駄だ。もうすぐFBIも来る。」

(じゃあ、さつきのはFBI？・・・どちらにしろ逃げるしかないわね・・・)

ベルモットは、新一が麻酔銃を撃つより先に車に乗り込んだ。
そして博士の車が来た方向とは、反対の出口から逃走していった。

「くそっ、逃がしたか・・・」

「新一君、わしは哀君を病院に運ぶぞ。」

「ああ、博士頼んだ。」

(・・・なんだ？)

新一はさつきの機械を拾つた。

(これは・・・変声機？・・・！)

「コナン君！大丈夫なの？」

ジョディが到着した。

「うん、でも灰原が撃たれて、今病院に運ばれてるよ。」

「・・・そう・・・何か手がかりは？」

「・・・何もないよ・・・」

新一は、変声機のことについては、なぜか何も言わなかつた。

「・・・私たちも病院に行きましょう。」

「・・・うん。」

「・・・作戦は失敗したわ、すぐに逃げなさい。それに赤井秀一のふりをして、

私たちを動搖させようとする人間がいるみたいよ・・・」

「博士、灰原の具合は？」

新一は処置室の前にいる博士に聞いた。

「おお、新一君にジョディ先生。詳しいことは分からんが、命に別状はないみたいじゃ。」

「そりが・・・良かつた。」

一時間後

「・・・終わりました・・・」

処置室から出てきた医者が言った。

「幸いにも、骨に異常は見られませんので、一週間ほど入院すれば大丈夫でしょう。」

どうやら筋肉の損傷だけですんだらしく。

三人は、哀が担架に乗せられて病棟に運ばれるのを見てから、しばらくして部屋に入った。

「調子はどうじゃな哀君?」

「今はいいわね、麻酔が効いてるからだとおもうナビ。」

哀は上半身を起こして言った。

「・・・哀ちゃん、急で悪いんだけど、事件の話し聞かせてくれないかしら?」

ジョディが聞いた。

「ええ、いいですよ。」

哀は散歩中に話しかけられたところから、話を始めた。

第十話 ベルモットと狙撃者（後書き）

灰原 哀の奪還劇。

お楽しみ頂けたでしょうか？

次回は謎のスナイパーの正体を巡って男三人の推理が冴えます。お楽しみに。

ちなみに『天海ビル』というのは日本を代表するマジシャンの一人である、石田天海氏の名前から拝借しました。

ご意見・ご感想・ご指摘などありましたらご遠慮なくお願いします。今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしくお願ひいたします。

第十一話 三人の推理

「……ということです。」

しばらくしてから哀が話し終えた。

「……その銃を撃つた人って誰だか分からないの？」

「分かりません。姿が見えなかつたから。」

「……そう……ありがとうございます、哀ちゃん。ジョイムズに報告しなくちゃいけないから……それじゃ、お大事にね。」

そう言つと、ジョディは部屋を出ていった。

「……まあ、無事で何よりだつたな。」

「あら、右腕のけがを無事と言つならの話しだけど、新一の言葉に、哀はツンとしたように返した。

「相変わらず可愛くねえな、おまえも……いつものやりとりである。

「……そういうえば……」

哀は続けた。

「今思い出したんだけど、その人の名前をベルモットが言つてたわ、確か……赤井なんとかつて。」

「……ひょつとして、赤井秀一じゃないか？」

新一が言つた。

「確かに、その名前だったと思うけど……」

哀がそう言つと、新一の顔に不敵な笑みが広がつた。

「……なるほどな……」

その頭の中では全てのことだが、一本につながつていた。

「・・・帰つたぜ。」

「おお、工藤、小っこい姉ちゃんは大丈夫なんか？」

博士の家に帰ってきた新一に、平次が聞いた。

哀の怪我が思つたより軽かつたので、新一はいつたん博士に家に戻つたのだった。

博士は哀に付き添つてゐる。

「ああ、一週間ぐらいで退院できるらしいぜ。データの方は？」

ソファーに座り一息ついたところで、新一が言つた。

「組織の活動内容の部分は全部暗号化されてて、あんまり読めなかつたけど、薬のデータだけは解読してやつたぜ。」

快斗はそう言つて一枚のフロッピーを渡した。

「サンキュー。明日、灰原に渡してとくよ。」

新一はフロッピーをポケットに収めた。

「それから、もう一個進展があつたぜ。『パンドラ側の組織』は四十年前までは、

『ブラックバード』と同一で、そこから分かれた支部的存在だつた。

・・・」の意味は分かるよな、新一？」

新一を含め三人は不敵な笑みを漏らしている。

仕事の時のその顔だ。

「ああ、『パンドラ側の組織』が『ブラックバード』から分かれたもので、その目的が不老不死なら、

もとの『ブラックバード』の目的も不老不死っていうことがほぼ確実つて事だ。

それから薬品研究つてことを考慮すると、奴らの目的はおそらく不老不死薬。

APTXはその過程で偶然造られた失敗作。そういうことだろ、快斗？」

「ああ、それからおまけに『パンドラ側の組織』の名前は『ブルーバード』……」

快斗が頭を振つてゐる。

「・・・どこが幸せの青い鳥なんだか・・・それとも大黒ばビートルズファンだつたのかな？」

その冗談に新一は乾いた笑い声を上げてゐる。

「なんやねん、ビートルズファンつて？」

意味が飲み込めない平次が一人に聞いた。

「ポール・マッカートニーの曲の中にあるんだよ。『BLACK IRD』つて曲と『BLUE BIRD』つて曲が。」

新一が、四十年近く前の洋楽の曲名を引き合いに出し説明した。平次は知らなかつたらしい。

「なるほど、西の高校生探偵は、家柄、西洋文化に弱いつてわけか。

「快斗が茶化すように言つた。

「やかましい！ど突いたろか、快斗！」

慌てて快斗が平次を落ち着かせにかかる。

「・・・まあ、ええとして。お前の方はなんか収穫あつたんか、工藤？」

「・・・まあな。」

新一は二人に、哀から聞いた話と、変声機を拾つた事を話した。
「そんで、その機械は？」
平次が聞いた。

新一はそれを丁寧に取りだした。

「・・・現場に落ちてたままの状態で持つてきた・・・」

平次はハンカチでそれを取り上げ、隅から隅まで、電源ボタンの周りの『N.O. 931615』という文字まで観察した。

快斗もそれに倣つた。

「・・・にしても変な奴もいるもんだな。わざわざ死んだ人のふりしなくてもいいのに・・・」

そう言つた快斗に対し平次が言つた。

「お前も人のこと言えんな快斗、お前の場合は探偵的な思考に弱いっちゅうわけか。」

「そりや、俺、怪盗だもん。」

平次と比べて快斗は呑気なものだ。

「この変声機、電源が入つてないんやで、工藤は現場からそのまま持つてきたんやから

そん時も電源は切れとつて、そいつは使つた後、電源を切つたつちゅうことや。変やと思わんか？」

快斗がしばらく考えてから言つた。

「・・・なるほど。そいつはすぐ逃げたはずだから、電源を切るのはおかしい。

つまり変声機は使われなかつたつてことか。でも変声機を使ってなつてことは、

誰が撃つたんだ？まさか幽霊が撃つたつて言つんじやないだろ？な。

「んなわけんねーだろ。赤井さん本人が撃つたんだよ。その可能性

しか残つてない。」

新一が言つた。

「なんや、赤井はんは生きとんか？」

「ああ、どうもそちらじいな・・・おそらく自分が生きている」とを隠しつつ、

奴らにフレッシャーを『えるために、わざと変声機を現場に残した

つてどこだらう。」

ふと新一が、時計を見ると九時を回っていた。

「そろそろ帰った方がいいな。蘭達も心配してるだろうし・・・」

「そうだな・・・そうだ、新一。俺達も泊めてもらつてもいいか?」

言うの忘れてたけど、そのつもりで來たんだ。」

突然の提案。

この突発ぶりは、大阪組にも引けを取らないだらう。

「・・・構わねーけど、もつと早く言えよ・・・」

深夜

哀は寝付けないでいた。

(部屋の外に誰か居る・・・)

あの気配を感じ取っていた。

組織の構成員独特のあの気配を・・・

癸卯朝

R R R R R R R R R R . . .

午前七時

新一は携帯電話の音で田中が覚めた

『新規も新規であります?』

電話からする声それは・・・

「・・・母さん? 起きてたじやねえよ、今まで起しきされたんだよ・・・

•

『ごめん、ごめん、それで今どこ？探偵事務所に電話しても出なかつたから、どこか行つてるんでしょ？』

「俺の家だけど、どうかしたか？」

「あ、そこの、い、あと一時間したら、そ、今は春くから」

てんだぞ！」

『あら、快斗君もいるの？丁度いいわ。それじゃあ、一時間後にね。

二二

新一の抗議もむなしく電話は切れていた。

—新—
、今
の誰から?「

巻之二

奥さんから……一時間後に来て下さい

その後、新一と蘭は急いでみんなを起こす羽目になつた。

第十一話 三人の推理（後書き）

補足

ビートルズ・・・THE BEATLES 1962年から1970年に渡つて活躍した、ジョン・レノン（John Lennon）ポール・マッカートニー（Paul McCartney）ジョージ・ハリスン（George Harrison）リング・スター（Ringo Starr）の四人によって結成されたロックグループ。

あとがき

ビートルズの『BLACKBIRD』は彼らの『THE BEATLES』というアルバムに、『BLUEBIRD』はポールがビートルズ解散後に結成した『Wings』の『Wings Over America』というアルバムに収録されています。どちらもとても良い曲です。

次回は優作と有希子が登場します。

どうぞ楽しみに。

ご意見・ご感想・ご指摘等をご遠慮なくお願ひします。

今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしくお願ひいたします。

第十一話 約束

「つたく、父さんも母さんも、帰つて来るんなら予め言つとけよな。
・
・」

両親を家に迎え入れてから新一が言った。

「あらっ、別にいいじゃない？私たちの家なんだから。」

（・・・まあ、そつなんだけど・・・）

有希子から電話がかかってきてからといつもの、蘭と一緒に他の四人を叩き起こしたり、

朝食を十分で済ませたり、何かと大変だつたのだ。

この慌ただしさは両親二人には分かるまい。

有希子はといふと、早々リビングに入つていつてしまつた。

残されたのは、新一と優作。

「それで新一、進展はあつたのか？」

優作は帽子を脱ぎながら、新一に尋ねた。

「ああ、快斗のおかげでかなり進展があつたよ。まあ後でゆっくり話そうぜ。」

（・・・影で人の役に立つ・・・彼は盜一さんそつくりだな・・・）

「快斗君？お久しぶりね、最後に会つたのは十年前かしら？
リビングに入るや否や有希子が快斗に話しかけた。
みんなの視線が快斗に注がれた。

「え？」

快斗はしばらく困惑していたが、思い出したように言った。

「そりいえば、親父の知り合いに日本の有名女優が居るって……」「そう。それが私。盗一さんには、アメリカで変装を教わったのよ。」

部屋の全員が一様に驚いている。

「それはどうも、父が生前、お世話になりまして……」「まあまあ、快斗君、そう堅くならずに……」

優作がリビングに入つて来た。

「実は、盗一さんから、預かっていた物があつてね。それを渡しに来たんだ。」

「・・・そうですか、親父が・・・」

といふが、そこに新一が口を挟んだ。

「まあ、父さんも母さんも、とりあえず荷物置いて来いよ。話はそれからだ。」

新一は、一人をいつたんリビングから遠ざけた。

なぜなら、有名人二人の登場に新一、蘭、快斗以外の全員が、がちがちに堅くなつてたからだ。

「・・・どうかされたのですか？ 怪盗キッドさん・・・いや、黒羽盗一さん」

気配を感じ取つた優作は原稿を書きながら、窓に向かつて聞いた。

「・・・さすがは世界屈指の推理小説家の工藤優作さんだ・・・見破られましたか・・・」

窓のカーテンの陰から白い怪盗が現れた。

「あなたがその格好でお見えになるとほめまいじこ・・・なにか事情でも？」

不意に、盗一は懐から箱を取りだした。

「これを預かってもらいたいのですよ・・・」

そう言って、その箱を優作に渡した。

「これは・・・」

「中身は言えません・・・八年後に快斗に渡して下せ・・・それでは・・・」

それだけ言うと彼は窓から去つていった。

そして、その数日後彼は・・・

「・・・作・・・優作！」

優作は思考を現実に引き戻された。

「どうしたの、盗一さんに預かった箱を握ったままボーッとして？」

「・・・これを預かつた時の事を思い出してね・・・ちゃんと約束を果たさないとな・・・」

そうつぶやくと下に降りていった。

「これが・・・」

説明を受けた後、箱を渡された快斗はそうつぶやいた。

リビングに全員が集まりそれを見ている。

「そうだよ、八年前に盗一さんが私に預けていた物だ。」

その箱はアルファベットのパスワードを入力しないと開かない仕組みになっていた。

パスワードのヒントが箱の側面に書かれている。

現代カードマジックの基盤を作った人物のセカンドネームを答えよ。

快斗はフッと微笑んだ。

（親父らしいな・・・）

「・・・さてと、探偵が一人も居ることだし聞いてみるとするか。

誰だと思う？」

聞かれた二人は考え込んでいる。

いくら知識が広範囲だといつても、頭の中からマジックの専門知識を引っ張り出すのは、容易ではないのだろう。

「・・・マジシャンですぐ思い浮かぶのはハリー・フリー・デイー二やけど、脱出専門やしな・・・」

平次は自分の考えを自分でうち消した。

「・・・ダイ・バーノンじゃないのか？プロフェッサーと呼ばれた男。綴りは確かD a i V e r n o n。」

新一が顔をしかめながら言つた。

「入力してみな・・・」

新一の顔を見て、快斗が笑みを浮かべながら言つた。

普段は自分を追いつめる探偵一人が、困惑しているのを見るのが面白いのだろう。

「どうだ・・・」

パスワードガチガイマス

「あーくそつ、分かるかそんな専門知識!」

液晶に表示された文字を見て、新一はさじを投げた。

「まあ、新一落ち着けよ。」

「・・・で? 答えは何なんだよ、快斗・・・」

「・・・多分この人だな・・・」

Hofzinser

・・・カイジヨシマス

力チャツ

箱のロックが外れる音がした。

「・・・ホフジンザー?」

新一の豊富な知識にもインプットされていないらしい。

「ヨハン・ネポマク・ホフジンザー（Johann Nepomak Hofzinser）十七世紀後半にかけて、

ウイーンで活動していたマジシャンだ。当時はステージマジックが主流だったから、功績が偉大にもかかわらず、彼のカードマジックは注目されなかつたらしいけどな。」
快斗が全員に説明した。

「親父がいつも言ってたよ。全く注目されないにもかかわらず、当時は地味とされていたカードマジックを大発展させ、その技術が今も尚、生きているのは、すばらしきってな。

影で大きな功績を残す人ほど偉大な人は居ないんだ。」

今は亡き父に、幼い頃仕込まれた知識を懐かしそうに話している。

「なんや工藤、音楽の知識と同じぐらいマジックの知識もございんやなあ。」

「・・・お前、人のこと言えんのかよ・・・」

「ねえ、箱の中身は何なの?」

青子が快斗に聞いた。

「え? ああ、そうだな・・・」

ようやく快斗が箱の蓋を開けた。

みんなの視線が注がれる。

「・・・これは・・・」

快斗が箱から取りだしたのは・・・宝石だった・・・

「快斗! もしかして・・・」

大きな青いルビーの中に、小さな赤い宝石が見て取れた。

「これは・・・・・・・パンドラー! ?」

第十一話 約束（後書き）

メッセージを下さった作者の皆さんありがとうございます。
しかし、申し訳ない事にパソコンの設定の関係で返信をすることが
できません。

しかも容量オーバーで新しいデータが入れられない有り様です。
申し訳有りませんm(—_—)m

ご意見・ご感想・ご指摘等ありましたらぜひお願いします。
今後も『奇術師の予言』をよろしくお願ひします。

第十二話 新たな謎

「・・・親父はどうして・・・」

新一と平次も同じ事を考えていた。

パンドラの事を知っていたのだろうか？

だがそうだとすれば、どうして隠し部屋を造り、快斗を危険に巻き込むようなことをしたのだろうか？

「・・・永遠に分からねえかもな・・・お前はどうするんだ快斗？」

「怪盗キッドのことか？もちろんやめるや、でもその前に・・・」

快斗の顔には決意の色が表れていた。

「絶対に組織を潰す！」

「・・・なるほど、これがその変声機かい？」

昼食後、男四人が新一の部屋で昨日の事件ことを話していたとき、優作が新一に聞いた。

「ああ、その変声機はフェイクで『誰かが赤井さんの振りをして撃つた』ように見せかけて、

赤井さんが撃つたってことだらう・・・」

その言葉を聞きながら、優作は変声機を観察していた。

新一はその様子を見ていたが・・・

「？」

ふと、首を傾げた。

優作がフツと笑みを漏らしたように見えたのだ。

「何か分かったのか？」

「・・・いや、その推理で概ね良いと思つぞ。」

（氣のせいいか・・・）

「それじゃあ、灰原の見舞いに行つて来るから、蘭にそつ言つといってくれ。」

疑問を抱えながらも階下に降り、靴を履いた。

米花総合病院

「灰原、入るぞ？」

ドアを開け新一が言った。

すると、なぜか哀は驚いたようにビクッとした。

「ぐ、工藤君、びっくりさせないでよー。」

「・・・何かあつたのか？」

「え？」

心を見透かされたように言われ、哀は焦った。

「病室のドアをいきなり開けたぐらいで、驚くようなお前じやねーだろ? どうかしたのか?」

新一はパイプ椅子を取りだし座った。

そうしてしばらく待つていると、哀が話し始めた。

「・・・昨日の夜、部屋の外に誰か居たのよ・・・一晩中・・・まるで私を見張っているかのよう」

「！」

「それにあの気配がしたわ・・・組織の構成員独特のあの気配が・・・」

新一は怯えている哀の肩に手を置き、落ち着かせた。

「・・・分かった、ジヨーデイ先生に連絡して張り込んでおらうよ、だから少し休め。な？」

その言葉に、哀は落ち着いたのか、ベッドに横になった。

新一はフロッピーを置いて部屋を出ていった。

一人の男が灰原の部屋を見張っていた。

部屋の向かいになつていてトイレの中からである。

壁に隠れて姿はよく見えないが、その鋭い眼光だけは認識できる。

「動かないでもらおうか・・・組織員さんよお」

その男の背後には、誰と対峙してもいいように眼鏡をかけ、麻酔銃

を構えている「ナン」がいた。

男は振り向き、ポケットから小銃を取りだし構えたが……

「おつと、ボウズか……」

「えつ？」

ビリッ

（えつ・・・・・・・・変装？）

その男が変装用のマスクを取ると、そこに素顔が現れた。

そして、その顔は……

「あ、赤井さん！？」

「・・・久しぶりだな、ボウズ。」

マスクをゴミ箱に放り込んだ。

「なんで、赤井さんが変装を？」

当然の質問だった。

盗一式の変装ができるのは、快斗、有希子、それにベルモットだけのはずである。

「ベルモットが以前、使用後に捨てた物を拾つてね……FBIの本部で分析して、同じ物を作り出したというわけだ。」

「なるほど……じゃあ昨日の夜にその病室を見張っていたのも赤井さん？」

「そうだ。あの子だけは絶対に死なせるわけには、いかないからな……おかげで三途の川を渡り損ねたという訳だ。」

不敵な笑みを浮かべながら赤井は言った。

哀が感じた組織の気配は、どうやら潜入捜査の名残だつたらしい。

「……じゃあ組織をうまく誤魔化せたんだね。」

「どうかな……奴らも疑っているかも知れないが、確証はないだろうな。」

そう言つと赤井は「ナン」の背後を見た。

「個室に隠れてたのか……よく分かつたな、ここから見張つたつて事が。」

「……見張り続けるには、看護婦に見つからないように時々隠れ

ないといけない。

この廊下で都合良く隠れられる所は、トイレ以外にないからね。だから人通りの多い昼間はここから見張つていると考えて、ここに居たつて訳さ。」

探偵の目をしてコナンが言つた。

「・・・なるほど・・・さすがだな。」

しばらく沈黙が辺りを支配した。

「今日は陰で大活躍だね、赤井さん。灰原をベルモットから助けたのも赤井さんでしょ？」

「・・・何のことだ？」

「えつ？」

無表情な赤井をコナンは見据えた。

「赤井さんじやないの！？ベルモットの銃を撃つて灰原を助けたのつて。

それで病室を見張つてたんじやないの？」

「病室を見張つていたのは、ボウズに会いに行く途中に偶然博士のビートルを見かけて、あの子が入院したのを知つたからだ・・・昨日の新聞の建物火災の記事を不審に思つてね。」

そう言うと赤井は、新聞の切り抜きを取りだした。

そこには、快斗が侵入したビルが燃えている写真があつた。コナンの目は写真を見ていたが、頭の方は別のことを考えていた。

「・・・そんな・・・赤井さんじやないならいつたい誰が・・・」

「・・・なんやで、小つこい姉ちゃんを助けたんは赤井さんとちやうんか？」

優作が部屋に籠もり原稿を仕上げているので、新一、平次、快斗の三人だけで話している。

「ああ、どうもそうらしい・・・」

新一も複雑な顔をしている。

そこに快斗が口を挟んだ。

「それより新一、いいのか？他のFBIの人に赤井さんが生きてるつて伝えなくとも。」

「ああ、しばらく死んだことにして、隠れて捜査するらしい。」

「・・・・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・」

沈黙を破るように快斗が口を開いた。

「・・・とりあえず、謎が一個増えたな・・・」

残りの一人も頷いた。

「・・・・・誰なんだ・・・・・・」

新一が呟いた。

(いつたい誰なんだ・・・)

第十二話 新たな謎（後書き）

一週間も間が空いてすみません。

最近若干スランプ気味です。

しかし、この小説を見捨てるつもりは全くありません。

最後までお付き合い願います。

どんどん「」感想・評価をお听せ下さい。

これからも『奇術師の予言』の「」愛読よろしくお願いいたします。

第十四話 やっぱり敵わない

「……快斗君？」

一階の客間の快斗の部屋を開け、蘭が室内に向かって言った。

「ああ、蘭ちゃん……」

快斗は練習の手を止めた。

「……いつかはありがとうね、快斗君……ううん、怪盗キッドさん。」

「……それはどういたしまして、お嬢さん。」

快斗は途端にキッドの気配を醸しだした。

しかし、その気配はすぐに消した。

「私、あの言葉を聞いて、すごく元気が出たよ。新一が頑張ってるんだから私も頑張らないと、って思い直せたし……」

確かに蘭の声には、落ち込みの色はない。

元気を出ようと頑張っているようだ。

「……あの時はああ言つたけど、どうしても我慢できなくなつたら、それを新一にぶつけてもいいと思つぜ……」

快斗は珍しく真剣な顔をしてしゃべつてくる。

普段考えない事を考へているからだろう。

「今までは、どこまつつき歩いてるか分からなかつたから、会いたくてもどうしようもなくで、

我慢してたんだろうけどさ……今は当の本人は目の前にいるだろ？だから寂しかつたなら、

それを本人と面と向かつて言つてみなよ……そりや、あいつは困るだらうよ。

でもな、それがあいつにひとつてはいい薬になるんだよ

蘭は黙つて聞いている。

「……俺もそうだつたからな……」

「……え？」

蘭は快斗の顔を見た。

「だいぶ前に、木から落ちて、意識不明の重体になつて青子を泣かせちまつてよ。

意識が戻つたら、あいつが『快斗のバカ、バカ、バカ』って泣きついてきたんだよ・・・」

快斗は思い出しながらゆづくりと語つた。

「まあ、俺もそれに懲りて、それからはできるだけあいつを泣かせないようにしてきたけどさ。

・・・俺が言うのもなんだけど、好きな女の涙は男にとつていい薬になるんだよ。」

そう言うと、あの夜と同じように薔薇を一輪、右手の中に出現させた。

「おつと、左手からはこんな物が・・・」

左手からはシルク取り出した。

「そして、このシルクをこうしてやると・・・」

シルクで右手を覆い、それを除けると純白の鳩が現れた。

「・・・すーーい・・・」

蘭は満面の笑みを浮かべている。

「・・・そうそう、そんな風に心から笑いなよ・・・」

快斗も笑顔になつている。

「無理して笑わざにさ。新一はそう思つてるよ。」

「・・・ありがとう、快斗君・・・快斗君も、青子ちゃんを心から笑わせないとダメだよ。」

蘭はそう言い残すと部屋を出ていった。

(・・・じつや、一本取られたかな・・・)
ハトや道具と共に部屋に残つた快斗はそう思つた。

「……そんなところになると、カゼひくよ……」

「……工藤君？」

二階のベランダで風に当たつていた和葉に新一が話しかけた。

「大阪より東京の夜は寒いから、早めに部屋に入った方がいいよ。捜査の雲行きを示唆するかのように空は雲に覆われている。」

「ありがとう……優しいんやね、工藤君。」

十七才の少女と七歳の少年が対等に話している。

しかも、年下が年上を気に掛けている。

妙な図^えである。

「最初はな、蘭ちゃん放つてまで事件追うなんて、どんな神経しとるんやろ？薄情な人間やなあて思つてたんよ。

でも、違つたんやね。

工藤君はいつも蘭ちゃんの傍で優しく見守つとつた。薄情なんかやなかつたんやね……」

「…………」

「せやけどな、工藤君。危険に巻き込まれよつて嘘を吐くんが『優しき』とは限らんのんよ。

今回やつて蘭ちゃん泣かせてしもたやう？工藤君の考えも分からんこともないんやけどな、

蘭ちゃんは工藤君のこと一番に考へとるんやから、絶対に隠し事なんかしたらあかんのよ。」

「・・・ああ、分かつてゐるよ、もう蘭を泣かせないし、あいつだけは絶対に俺が守る！」

蘭にすべてをうち明けたときにも誓つた事をあらためて誓つた。

それを聞いて和葉はフツと微笑んだ。

「よう言った。その宣言絶対に守つてもらひつからな・・・そや、それから・・・」

和葉は屋内に戻ろうとしたが、途中で振り返つた。

「京都の時はありがとな。」

それだけ言つと階段を下りて行つた。

（服部にも彼女を守るつて誓わせないとな・・・）

新一はそう思った。

そして、それができるのは平次だけだとも。

「ああ、和葉かいな・・・あいつは俺の子分みたいなもんやな・・・

「は?」

青子は目が点とこりつ感じだ。

「前に、和葉が他の男とひやうひやうじるの見て、えらいイライラしてもてな。

なんでやろつて思つて考えとつたら、『子分取られそうになつてイラついて』ちゅう結論になつたんや。」

相も変わらずの鈍感ぶりである。

「・・・服部君ってほんとに探偵?」

「あん?」

青子はやれやれという顔をしている。

「『子分を取られそうになつてイライラした』つて? そんな訳ないじゃない!」

服部君、絶対その男の人には嫉妬してたんだから。探偵ならそのぐらいい気付きなさいよ。」

「せやかで、中森のねーちゃん。なんで俺がそいつに嫉妬せなあかんねん?」

果たして、青子の真っ直ぐな意見が勝つのか、それとも平次の鈍感さが勝^{まさる}のか?

なかなか見物である。

「まだ分からないの? 服部君は和葉ちゃんが好きなのよ・・・」

(俺があの和葉をなあ・・・・・・・・・)

青子がキツチンに戻つた後、平次はずつとそのことを考えていた。

言われてみればその通りである。

こんな事を真正面から指摘されたのは初めてだつた。

快斗曰く、青子は少し子供っぽい。

だがそれは悪いことではないかもしない。

その性格のおかげでストレートな質問ができる、純粹であるがゆえに、今回のように入人の本質を見抜く事ができるのだろう。

(・・・工藤も回りくどい言い方しようつたなあ・・・)

平次の脳裏にあの言葉がよみがえる。

『服部、お前・・・・ガキだな・・・』

その言葉の意味が今やつと分かつた。

(和葉・・・愛してるで・・・けど、まだしばらく『子分』やから
な・・・)
『子分』が『恋人』になるのはいつだらうか?

それは神様にしか分からぬ。

「青子ちゃんの勝ちね・・・やっぱ、みんな女子には敵わない
のね・・・」

それの様子をいつも見ていた有希子は、やれしく微笑んだの
であった。

第十四話 やつぱり敵わない（後書き）

今回は新一と和葉の会話が書きたかったのですが、書き終わってみればその部分が一番短い始末（情けない・・・）それに加え、更新が遅れて誠に申し訳ありません。

小説に対する、『ご意見・』『感想などありましたら、下の感想欄からどんどんお願いします。こんな私の小説『奇術師の予言』ですが、今後も、どうかよろしくお願いします。

第十五話 ディナーショー

「あーくそつ、分からへん！」

工藤邸の食事用のテーブルにみんなが座り、快斗のクロースアップマジックショーが始まっていた。

平次が快斗の巧妙なテクニックに物の見事に騙され、悔しそうな声を上げている。

「だーかーら、平次、言つただろ？『Don't think just feel』」マジックは考えないでエンジョイして下さい。」

某有名マジシャンの口調と声をそつくりまねして快斗が言つた。そして、そう言いながらも平次の首の後ろ辺りから、直径五センチほどのコインを出現させた。

平次はまたしても悔しそうな顔をしている。

「・・・じゃあ、次は壁紙からハンバーガーでも出すつもりか？」

「いや、まさか・・・食べ物は後始末に困るからな・・・」

新一の質問に答えながら、快斗は少しテーブルから離れ、足下道具入れから風船を取り出した。

「まあ、出すとしたら、こんなもんだろ。」

懐からはさみを取り出し、風船を割ると、破裂音と共に中からワインがまるまる一本出てきた。

「じゃあ、これはお一人に・・・」

そう言つて有希子と優作に渡した。

有希子は不思議そうにそれを調べていたが、やがて優作と顔を見合わせた。

もつとも、優作は見抜いてしまった様であるが・・・

探偵一人は悩み、女性陣四人は例の言葉通り純粋に楽しんでいる。

「・・・父さん、分かったんなら教えてくれよ。」

東の名探偵はお手上げのようである。

「それはダメだな新一、お前も知っているだろ？サーストンの三原則を。」

優作がそう言い、快斗が後に続いた。

「1・これから何が起こるかを説明してはいけない
2・同じマジックを繰り返してはいけない

3・種明かしをしてはいけない。そうゆことだから種明かしは厳禁
つてわけ。」

「・・・・父さんはマジシャンじゃないだろ・・・」

亲一が嘆した

「まあそうだが、盗一さんのレクチャーを受けたことがあるからな。とにかく種明かしはできない!」

優作はそう話をまとめた。

シミーの再開である

「じゃあ、今回その第一項の線を少し越えて、風船がワインボトルに変わるマジックをお教えしましょう。

まずは上着を脱いでと・・・・・・・・・・・ん?袖の中に何かあるぞ・・・・「

快斗は燕尾服を脱ぎかけで

「これほんとうにジユースヘリのグ

「ちょっと待つて！こぼれるやろー！」

ちょうど田の前に置かれたグラスを見て和葉が叫んだ。

・・・では本題に入りましょう。まずは風船を用意して、次に・・・ナイフがいります。

「いやで風船を鬻るんですけど・・・・・・ね」と。

「一 もや～～～」

女 性 障 が り 悪 叫 が 一 が か

「いや、大丈夫、大丈夫。」

快斗はナイフを引き抜き、軽く腕をさすつている。
そして上着を着直した。

こんな調子でその夜はとても楽しい物となつた。

米花総合病院

(このデータは・・・)

哀は病室でアポトキシンのデータを見ていた。

(ひょっとしてこの成分を使えば・・・)

「哀君、まだ起きておつたのか・・・

博士が部屋に入ってきた。

「・・・博士、今から言つものができるだけはやく仕入れてくれな
い・・・」

第十五話 ティナーショー（後書き）

観客は七名と読者の皆様限りの快斗の「ティナーショー」お楽しみいただけたでしょうか？（笑）と、言つてもTVでやっていたネタですけど・・・

これからもこの三文小説をよろしくお願ひします。
ご意見・ご感想等ございましたら下の感想欄からどうづか。

第十六話　久しぶりに同じ目線で

「ほな、またな、みんな。」

一行は、平次と和葉の見送りに東京駅に来ていた。

「うん、またね和葉ちゃん」

女三人は別れ際のおしゃべりをしている。

「乗り込むときは連絡せえよ・・・」

平次が屈んで新一に言った。

「俺も手伝つたるからな・・・一人で格好つけようとすなよ、工藤。」

「へいへい・・・」

『カツコつけ』は余計だと思いながらも新一は素っ気なく返事をした。

素っ気なかつたが、心の奥では感謝していた。

「でもな、平次、問題はどうやって乗り込むかだろ?」

快斗が言い、みんなそれに賛同した。

あの後、データを一通り解読したのだが組織の活動内容は1980年代までしか記録されてなかつたのだ。
もちろん本部の位置など分からない。

「まあ、本部の位置はそのうちCIAの本堂さんが教えてくれるだろ・・・」

「・・・せやな・・・まあ、近いうちに連絡とりついや。ほな。」

そう言つて新幹線に乗つた。

「やつこえば、新一期のお父さんともゆれんせ？」

駅の階段を降りながら青子に聞かれ、新一は時計を見た。

現在時亥は午前九時である

「…多分、今頃、成田空港にいると思うよ。午前十時の『エールフランス』に乗るって言ってたから。」

「フランスに？」

「ああ、何か知らねーけどフランスの出版社に用があるんだってさ・
・それより、これからどうする?」

新一はみんなに聞いた。

一家に帰つて寝るよ。せよこと寝不足で……」

「お前、作田の逸、何してたんだ。」

「ああ、ちよつと腰子となね……あつー。」

そう言い終わつてから、しまつた、といつ顔をした。

確かに、青子ちゃんも眠そうだけど、何せうてたんだよ?」

あ
い
せ
仕
事
機
械
に
有

言い終わる否や、逃げるよう尼ヶ谷方面の地下鉄のホームに走つて

いつた。

「あー、うまいと決半……もつ……じやあ、またね、蘭ちゃん

「アリス」

青子も快斗の後を追いかけていった。

一つの屋根の下に、恋人になりたてのカツプル、その二人が揃つて
寝不足・・・

(まさか、あこづら・・・)

(叶ふやうのんじやねーか・・・羨ましこけど・・・)

昼中だとこゝのに、思考がとんでもない所に飛んでしまった。

「・・・どうしたの、新一？変な顔して・・・」

蘭が不思議そうに尋ねた。

「・・・いや、何でもねー・・・」

その状況を、ある奥手な二人組に置き換えて考えていたとは、さすがに言えるわけがなかつた。

「米花総合病院？今からか？」

蘭と新一は久しぶりに幼なじみとして、東京の街を歩いていた。完全に元通りとはいひかないが。

「うん、彼女のお見舞いに行つてないから・・・あつ、ちょっと待つて。」

そう言つと一軒の花屋に入つていつた。

(なるほどね・・・)

ユリを間違えて買つて来なけりやいいけど、などと思ひながら店の壁にもたれかかつた。

そうしてこゝとクラクションの音が聞こえ、黄色のビートルが止まつた。

「どうしたんじゃ、新一？」

博士が窓を開け助手席越しに聞いた。

「蘭を待ってるんだよ。灰原の見舞いに行くから花を買つて。
そつ言つているつりに、蘭が店から出でた。

「あ、博士。」

「やあ、蘭君。どうじゅー一人とも、乗つていいくかね?」

「じゃあ、遠慮なく。」

「博士も灰原の所に行くのか?」

新一は聞いた。

「ああ、着替えと、簡単な研究機材を持つていいくといひじゅよ。解

毒剤のヒントがつかめたらしくてのつ。」

「・・・あいつ、自分が患者だつてこと忘れてるんじゅねーか・・・

「

確かに、その調子ではどっちが医者だか分からぬ。

新一のその態度を見て蘭が口を挟んだ。

「そんなこと言つ前に、感謝ぐらいたり?新一のために頑張つてるんだから。」

「そりや、分かつてるけどよ、あいつ無茶しかねないから心配で・・・

・」

「・・・それ人に言える事?」

「・・・へイへイ・・・」

(・・・やつぱり蘭にはかなわねーな・・・)

肩を落とした新一とは裏腹に、車は米花通りを快調に走つていった。

病院の前でビートルはブレーキをかけた。

「じゃあ博士、先に行ってるぜ。」

新一と蘭は車を降り、病院に入つた。

「・・・ねえ、新一、彼女のことなんて呼べばいいと思ひつい。」

エレベーターを待ちながら蘭が聞いた。

「彼女つて、灰原のことか？」

新一は聞き返した。

「うん、彼女本当は十八才なんでしょう？今まで『哀ちゃん』って呼んでたけど、それだと変だし・・・でも『志保さん』って呼ぶのもなんか違和感あるし・・・「・・・本人に聞いてみたらいいんじゃないかな？・・・蘭、ちょっと先に行ってくれ。」

そう言つと新一は口ビーに向かつて走り出した。

「あつ、ちょっと新一！・・・もう・・・」

蘭は仕方なく、エレベータに乗つた。

「ジョディ先生！」

「ああ、コナン君。」

眼鏡を掛けジョディに近づいた。

「昨日の晩から哀ちゃんの病室を見張つてたけど、大丈夫みたい。彼女に近づく怪しい人物はいなかつたわ。」

「そう・・・」

それもそのはずだ。

FBIに見張つてもうつから、もう見張らなくともいいと赤井に言ったのだ。

そんなことを考えていると、やがてジョーデイが口を開いた。

「それより・・・」

ポケットからナイロン袋を取り出した。

「銃弾・・・」

ジョーデイは頷いた。

「そう、哀ちゃんを助けた人が使った物・・・」

コナンはそれを観察している。

「ライフルドスラッグ・・・その人が使ったのはショットガンか・・・

・
「どう? 何か分かる?」

ジョーデイは聞いた。

「いや、手がかりが少なすぎる・・・」

「・・・そう・・・じゃあ哀ちゃんが退院するまで見張りは続けるわね・・・」

「うん、ありがとう先生。」

コナンは哀の病室へ向かった。

第十六話 久しぶりに同じ田線で（後書き）

ライフルドスラッグ： 弾丸の一種。弾体側面の溝の空氣抵抗で回転しジヤイロ効果による射撃精度を向上させたもの。（Wikpediaより）

三田がぶりの更新です。

以後はこのくらいのペースで更新していきたいと思います。
感想・評価など頂けたら幸いです。
これからもこの小説をよろしくお願ひします。

第十七話 鮫と海豚

「ノンノン

キーボードを叩く音の中に、ノックの音が響く。

「どうぞ・・・」

病室のドアが開いた。

「ああ、蘭さん・・・」

「手の具合はどう? エーと・・・志保さん?」

戸惑いながらもやう呼んでみた。

「志保でいいわ。ありがとう、もう大分良くなつたから大丈夫よ。まだ、わずかにしびれの残る手で、蘭が手渡す花を受け取った。

それをベッドの横の机に置き、その手でパソコンを片付けた。

「・・・あなたには、謝らないといけないわ・・・」

志保は静かに言った。

「私の薬のせいであなたと工藤君は引き離されてしまった・・・」「めんなさい!」

そう言つて深く頭を下げた。

「誤らないで・・・」

蘭は言つた。

「確かに、新一がいなくなつて寂しかつたけどね、それでやつと気付いたの。

一緒にいるのが当然だと思つていたけど、それはとっても貴重で感謝しなきやいけないことなんだ、つて。

一緒にいた時間はとても大切だったんだ、つて。

だからね、そういう意味ではとっても感謝してる・・・ありがとう、志保

「・・・お姉ちゃん・・・」

蘭の姿が姉の姿に重なつた。

感謝・・・自分を肯定してくれる人がいるなんて・・・
さまざま思いが胸に溢れ、目頭が熱くなつた。

「・・・絶対に工藤君をあなたの所に帰すから・・・」
少しだけ溢れてしまつた涙を袖で拭いながら、志保は言つた。

「絶対に解毒剤を完成させてみせるから・・・」

「志保・・・」

「だから・・・一人で幸せになつて・・・」

再び涙を袖で拭つた。

その言葉を言うのにどれだけ勇気が必要だつたか・・・
初恋の人を諦める。

自分を納得させるのにどれだけ自問自答を繰り返したか・・・
志保は、次から次へと涙が溢れてくるのを止めることができなかつた。

「無理しないで、志保・・・」

蘭は志保の背中をさすりながら言つた。

「あなたも新一が好きだつたんでしょう・・・」

志保はしばらくしてうなずいた。

「・・・」

「・・・でも今は違うの・・・」

志保は言つた。

「眼鏡を掛けていらない工藤君と接して思つたの。」

私が好きなのは眼鏡を掛けている偽りの『江戸川コナン』なんだ、
つて。

でも、今の眼鏡を掛けていらない彼は『工藤新一』で私の好きな人じ
やない。

けど、彼はその姿を望んでいるんだ、つて

だから諦めよう、つてそう思つたの・・・」

「・・・」

「もう諦めた事だから、気にしなくていいのよ。」

「もう諦めた事だから、気にしなくていいのよ。」

蘭が複雑そうな顔をしていたので、そう言つた。

「今、私が一番望んでいることは、工藤君とあなたが幸せになる事。だから私もがんばれるの。」

「・・・ごめんな、志保・・・」

「いいのよ・・・その代わり・・・」

蘭に笑顔を向け手を差し出した。

「私を友達にしてくれる？こんな罪作りの女でよかつたら・・・」

「・・・何言つてるのよ・・・」

蘭が言つた。

「私たちはもう友達よ・・・」

差し出されたその手を握り締めた。

「じばりぐ、そつとしておいてやるかの・・・」

ドアの外にいる博士が新一に言つた。

「・・・そうだな・・・」

新一はそう言つと、今来た道を引き返した。

(悪いな灰原・・・でも、その気持ちはちゃんと受け取つたぜ・・・)

新一は少しの間だけ眼鏡を掛け、また外した。

「・・・・・何のつもりかしら、ジン。ノックもせずにレディーの部屋に入つてきて・・・」

カチャツ

ベルモットの頭に拳銃が突きつけられた。

「・・・三つの中から選べ、一昨日勝手な行動をとった裏切り者としてこのまま撃たれるか、

そのとき何をしていたかをこの場で吐くか、もしくは『の方』にそれを直接報告するか・・・」

ジンの冷酷な声が部屋に響き渡る。

「・・・じゃあ三つ田を選ぼうかしら・・・バイバイ・・・・

ベルモットは部屋を出ようとした。

「・・・待て・・・」

再びジンの声が響き渡る。

「なぜ、ここで話さない、同じことだろつ・・・それとも知られたらマズイことでもあるのか・・・」

ベルモットは振り返った。

「A secret makes a woman woman

何回言えばいいのかしら?」

「・・・何回聞いても反吐が出るぜ・・・」

第十七話 鮫と海豚（後書き）

「哀および新志ファンの方すみません。
『初恋は失恋に終わりぬ』といふことで許してください。
あつ、他のカップルはどうなる・・・
とにかく失礼します。

第十八話 折り鶴とフロッピー

翌日

「・・・灰原の見舞い？」

放課後、いつものように下校していた矢先の事だった。

「そう、みんなで一緒に行つてこれを渡そう、って言つてたの。」

歩美が手に持つている折り鶴を見せた。

「そりや、良いけど、病院内あんまり騒ぐんじゃねーぞ。」

「「ハイ！」

（・・・病人でもないのに、なんか毎日通つてるな・・・）
そう思いながらビラを配つている女の人の前を通りすぎた。

「・・・毎朝新聞号外でーす！」

米花総合病院

「・・・えつ？」

コナンは病室のドアを開けたが、中の様子にそのまま動きを止めてしまった。

「灰原・・・それは？・・・」

指差す方にはトランクが置かれ、本人は荷物をまとめている。

「見て分からない？今日で退院よ。」

哀は事も無げに答えた。

「おめー、大丈夫なのか?一週間入院の予定だつたんだろ?」

「大丈夫よ、子供の皮膚は再生能力が高いらしいから……せつか
く来てくれた吉田さんには悪いけど……」

そう言つてコナンの後ろの歩美を見た。

「……あれつ、元太と光彦はどうしたんだ?」

いつの間にか二人はいなくなり、そこには歩美が一人で立っていた。

「トイレに行つたみたい……はい、哀ちゃん!」

そう言つうと歩美は折り鶴を差し出した。

「ごめんね、こんな物しかなくて……」

「そんなことないわ、ありがとう。誰かさんの奇妙なお土産フロッピーより、
よっぽどましよ。」

哀はそう言いながら意味ありげな顔でコナンを見た。

(ハハハ・・・)

「奇妙つていつたら、今会つた人も変な人だつたぞ。」

ドアが開き、元太と光彦がやつてきた。

「何があつたの?」

哀が聞いた。

「さつきトイレから出てきたとき誰かにぶつかつてよ、こういわれ
たんだよ『お元気ですか?』って。」

「だから、それはその人が外国人だつたから間違えたんですよ。」

「外国人?」

コナンが間に入つて聞いた。

「ええ、帽子で顔はよく見えなかつたんですけど、金髪でしたし、
日本語のしゃべり方が少し変でしたから。」

光彦が答えた。

「……」

「『大丈夫ですか?』と『お元気ですか?』……確かにニユアン
スは似てるわね。」

哀はそう言いながらトランクを閉めた。

「みんな、お見舞いありがとう。私は大丈夫だから、もう帰った方がいいわよ。時間も遅いし……」

哀は時計を見ながら言った。

「じゃあ、またね明日ね、哀ちゃん。」「学校で会いましょう。」

「遅刻すんなよ。」

そう言って三人は帰つていった。

「…………」「藤君…………」

「ああ、分かってる、あとはどう接觸するかだな…………」

「…………あ、新一、お帰り。」「ああ、ただいま……おっちゃんは?」「旅行の写真をみんなに見せてくる、って出でていったわよ…………うせそれを口実に飲みに行くんだと思うけど…………」「ハ、相変わらずだな…………」

そう言いながらランドセルと一緒に眼鏡もテーブルに置いた。

「それで、どうだった、学校は?」

「…………おめー、からかつてんだろ…………」

新一がそう言うと蘭は悪戯っぽく笑つた。

「人生で二回目の小学校生活を満喫してるんじゃないかと思つて。」「あのなあ…………」

蘭は話しながら、キッチンで夕飯の支度をしている。

「・・・でも、良い」とも少しあつたよな・・・」
突然言つた。

「・・・例えば、蘭の手料理が毎日食えるとか・・・」
新一は無意識にそう言つてしまつてから、その意味に気づき、途端に顔を赤くした。

「えつ・・・・・・」

蘭も顔を真っ赤にして、お互にじばらく何も言えないでいた。

「・・・バカ・・・」

しばらくして蘭がポツリと呟いた。

とあるバー

「・・・待たせたな、ジン・・・」

「氣にするな、スネイク・・・」

一人の男がカウンター席に加わった。

「ところで例のことだが・・・」

「ああ、まかせろ、こっちには狙撃の名手が一人もいる・・・二匹の大きな青と黒の鳥の前では、さすがの気障な白い鳥でも敵わないだろうよ・・・」

第十八話 折り鶴とフロッピー（後書き）

三田おきに更新すると宣言しておきながら、遅れてしまつて申し訳ありません。

パソコンの故障によつて一週間も聞が空いてしまいました。
深くお詫び申し上げます。

尚、今後は予定通り三田おきに更新したいと思います。
申し訳ありませんでした。
重ねてお詫び申し上げます。

第十九話 脱出王

「…………えつ、お父さんが？…………はい…………分かりました、すぐ行きます。」

ピッ

「おっちゃんがどうしたって？」

夕飯を食べ終わり、テレビを見ていた新一が聞いた。
電話を切った蘭は、あきれた顔をしている。

「お父さんが行きつけの居酒屋で、酔いつぶれて寝ちゃったから迎
えに来てくれ、だつて……」

（ハ、あの親父……）

時計を見ると午後九時半である。
上着を羽織つて一人で外に出た。

「…………風が強いわね……」

「ああ、そうだな……」

強風に煽られ、いろいろな物が路上を転がっている。

落ち葉、空き缶、弁当殻、ビニール袋……

やがて、新一の足下に丸めた新聞紙が転がってきた。

「…………号外？」

新一が拾い上げた新聞を見て蘭が聞いた。

「ああ…………そういえば昼間に配つてたな……」

そう言いながら何気なく新聞紙を広げた。

「…………」

「あつ、ちょっと、新一！」

その一面を見るなり新一は、目の色を変えて元来た道を引き返し始
めた。

新一が投げ捨てた新聞が風に舞つた。

怪盗キッド突然の予告状！

（・・・このベッドで寝るのは何日ぶりかしら・・・）

哀は天井を眺めながらぼんやり考えていた。

実際には大した日数ではないのだが、異常に懐かしく感じる。

今の自分には大きすぎるベッドも、隣の博士が立てている大きなびきも・・・

（なんだか自分の故郷に帰った気分ね・・・）

以前から思っていた。

今居る博士の家は故郷のようだと。
眞の自分の居場所であると・・・

ガチャン

夜の静寂を破るように、一階でガラスが割れる音が響いた。

哀は布団をはねのけ、二階に上がった。

そして、そこに蹲っている白い怪盗を見つけた。

「・・・ハンググライダーの操作を誤りでもしたのかしら、気障な
怪盗さ・・・」

白いステージ衣装が赤い血に染まっているのを見た途端、哀は言葉
を失つた。

「黒羽君！大丈夫！」

哀は叫びながら駆け寄つた。

「・・・すまねーな、志保ちゃん・・・退院早々お邪魔して・・・」

そう言って快斗は氣を失つた。

「博士！手伝つて！」

午後九時 杯戸宝石展

「奴だ！確保しろ！」

杯戸宝石展の屋内にその声が響き渡る。標的である白い鳥は獲物を手中にし窓の傍に立つた。

「これで終わりだ、怪盗キッド！」

三方が壁に囲まれている窓際にキッドを追いつめ、中森銀二が叫んだ。

「残念ですが、そつはいきませんね警部。宝石を盗み出す程の怪盗なら、脱出王ハリー・フーディー二の解説書を盗む事など簡単にできるという事に、いいかげん気づいてもいい頃ですが・・・」

「何が言いたい！」

警官隊がさらに詰め寄った。

「三方が壁に囲まれた窓際・・・四方が鉄格子で囲まれた場所からの脱出より遙かに簡単だと思いませんか？」

「減らず口はたくさんだ！奴を確保しろ！」

バン！

爆発音と共に煙幕が広がり、視界を塞がれた。

「・・・ゲホツ、ゲホツ、奴は・・・
キッドの姿は消えていた。

「『彼を閉じこめておくにはどんなに厳重な牢獄を用意しても足りない』と謳われた男の脱出マジック・・・それに俺と親父が手を加えたんだから見抜けるわけねーよ・・・
屋上でそう囁き白い羽を広げた。

(・・・妙だな・・・)

着地を予定していたビルの屋上に近づいた時そう思った。

(いつもなら奴らは先回りして、俺から宝石を奪おうとするはずなのに・・・)

その場所には誰もいなかった。

(期待はずれだつたな・・・)

そう思い再びハンググライダーを広げたときだつた。

「ぐつ！・・・」

防弾チョッキ越しに銃弾が食い込むのを感じた。

(両隣のビルか・・・)

一つの人影を確認したとき、今度は銃弾が頬をかすめた。

「・・・やけに殺氣立つてゐるじゃねーか・・・」

平静を装い、銃弾を避けつつ、難を逃れるためハンググライダーで飛び立つた。

窓ガラスを割り、阿笠邸に乗り込む。

その途端、苦痛の余り床に蹲つてしまつた。

哀が寄つて来て何か言つてゐる。

しかし、他の場所にも銃弾を受け体力が限界だつた。

何と言つてゐるのか良く聞き取れない。

「・・・すまねーな、志保ちゃん・・・退院早々お邪魔して・・・」

とつあえずそれだけ言つたところで、意識が遠ざかるのを感じた・・・

(… 静か … あ、ね …)

第十九話 脱出王（後書き）

ようやく動きました、黒の組織。
快斗は大丈夫なんでしょうか？
それは次回のお楽しみです。

・・・何か忘れてるような・・・あつ、おっちゃんが寝たままだ！

これが本当の『眠りの小五郎』（笑）

先日は更新が遅れました事を重ねてお詫び申し上げます。
以後このような事がないように気を付けます。

今後も『奇術師の予言』をよろしくお願ひします。

第一十話 怪盗の休息

(・・・)は・・・そつか、博士の家か・・・)
快斗は寝かされていたベッドから体を起こした。

「いてつ・・・」

傷口が痛み、そこを手で庇つた。

そこでやつと、足下にずつといたその存在に気が付いた。

(・・・青子・・・)

ベッドの足下の方に体を預け、青子は眠っていた。

「青子ちゃんに感謝しろよ・・・」

「新一・・・」

快斗が居る部屋に、欠伸を噛み締めながら新一が入ってきた。

「おめーが撃たれたつて聞いて、真夜中にも関わらずに飛んできて、夜通し看病してたんだからな・・・」

「あ、ああ・・・」

新一はベッドの横の机に一人分の朝食を置き、その近くの椅子に座つた。

「・・・それで、何のつもりなんだよ?」

「ん?」

パンを囁りながらの尋問が始まった。

「『ん?』じゃねーよ!怪盗キッドは引退したんじゃなかつたのか、つて聞いてんだよ!」

新一の大声が部屋に響いた。

「あつ、バカ、大声出すんじゃねーよ、青子が起きちまつ・・・」

しかし、青子は相変わらず安らかな寝息を立てていた。

「こういう所も蘭に似ているのだろうか?」

「・・・んで?どういうつもりだよ・・・」

答える前に快斗は体の向きを変えて、青子に毛布を掛けてやつた。

「・・・お前と平次が言つてただろ?乗り込もうにも本部の場所が

分からねえ、つて

そう言つて、パンを大きく頬張つた。

それを飲み込み、「一ヒーを一口啜つてから後を続けた。

「だからこりちから攻めてやろうと思つたんだよ。怪盗キッドが動けば奴らも動かざるを得ない。それでその時に、
こいつをうまい具合に奴らのポケットに忍び込ませようとしたわけ。

」

快斗はハンガーに掛けたある上着から一枚のカードを取りだした。

「・・・ICチップ入りのトランプか・・・抵抗する振りをしながらこれをトランプ銃で撃つて、

奴らのポケットに忍ばせようとしたつて訳ね・・・

「そゆこと。」

そう言う間に快斗はトースト一枚平らげ、「おかわり」と言った。

「食欲は旺盛だな・・・・・・」

空になつた快斗の皿を見ながら新一は言った。

「まあ、銃弾を数発受けた程度だからな・・・そう言えばアルセヌは？」

「アルセーヌ？」

新一が怪訝に聞き返した。

「俺がいつも連れてるハトの名前・・・ビニにやつた?
上着のあらゆる所を探しながら快斗が聞いた。
「ビニの子の事かしら?」

哀が部屋に入ってきた。

「すっかり私にも懐いちゃつたみたいだけど・・・」

哀の肩に、ちょこんとハトが乗つてゐる。

「それに『その程度』ってものじやないわよ。防弾チョッキ越しの腹部に一発、頬をかすめたのが一発、

左肩を抉るように一発、それに右肩を直撃したのが一発・・・致命傷になり得る部分に銃弾が当たらなかつたのが不思議なぐらい
よ。」

そう言つて快斗に薬を渡した。

「はい、鎮痛剤。毎食後に一錠ずつ飲むこと。それから夕方には包帯を換えるから、

勝手に剥がしたりしたらダメよ……そんなどいろね……じゃあ大事に。」

水の入ったコップとハートを置いて地下室に戻つていった。

「……なあ、新一、志保ちゃんは薬剤師の免許も、開業医の免許も持つてるってことか？」

「……そりしこな……じゃあ、俺もそろそろ行くぜ。」

新一が椅子から立ち上がった。

「おつと、ちょっと、待つてくれ。」

そいつ言つと快斗は紙とペンを取りだし何かを書き始めた。

「…………ほり、これをアルセーヌの足に括り付けて飛ばしてくれ。」

紙を丸め、宝石が入った袋と共に差し出した。

「OK……じゃあいじゅつくじ。」

青子の方をちらりと見ながらそいつ言つて、部屋を出ていった。

「…………あの野郎…………」

だが、悪態を付く前に青子を隣のベッドに運ばなければならぬ。快斗は青子の体を抱えよつとした。

「…………ん…………快斗？…………」

青子が目を覚ました。

しばしの間、青子は焦点の合わない目で快斗を見ていたが、昨日の事を思い出した途端ハツとした。

「快斗！…………大丈夫なの？」

「…………ああ、大丈夫だぜ青子。」

そつ言つて、安心させるように青子を抱きしめた。

「…………もう…………心配したんだから…………」

青子は田にうつすら涙を浮かべていた。

「・・・『ごめんな・・・それから、ありがとな、一晩中看病してくれて

・・・今はゆっくり休めよ・・・」

「・・・・・うん・・・・・・・」

青子は安心して眠りについた。

その寝顔を見て、『おかげ』をもらい損ねしたことなど、頭から吹っ飛んでいた。

「・・・後で博士の家に来い?」

登校時間帯に、いつものように他の三人から離れ、コナンと喧は話していた。

「そりや、最初から快斗の見舞いに行くつもりだったけど、どうかしたのか?」

「・・・報告があるのよ・・・APT-Xの研究結果についてね・・・」

「

第一十話 怪盗の休息（後書き）

さて、次回はいよいよAPT-Xの秘密が明かされます。
次回もどうぞお楽しみに！

第一十一話 APTXの眞実

「・・・快斗ぼっちゃん・・・」

「おっ、寺井ちゃん、来てくれたのか?」

博士の家の『病室』で快斗と青子が話している時だった。

「ええ・・・傷は大丈夫なのですか?」

「ああ、すっかりな。志保ちゃんの治療技術は大したものだぜ。」

その言葉通り、手にはトランプが握られている。

新一が差し入れた『バイスクル』だ。

「それより寺井ちゃん・・・」

快斗が声を低くした。

「『パンドラ』の保管には気を付けてくれよ。世間に回ったら大変だし、

下手したら寺井ちゃんも狙われるかもしだねえからな・・・」

「分かりました、ぼっちゃん・・・」

「頼んだぜ・・・さてと、そろそろ包帯を取り替える時間だけど・・・

・

「呼んだかしら?」

入り口に哀が立っていた。

「包帯を替え終わったら上に来てくれるかしら?」

「なんで?」

快斗は尋ねた。

「オリエンテーションよ・・・APTXのね・・・」

「みんな集まつたみたいね・・・」
リビングには、快斗、新一、博士がいた。

「・・・解毒剤はできたのか?」

みんなを代表する形で新一が聞いた。

「ええ、できたわよ・・・前にも渡したと思うけど・・・」
そう言つて、カプセルの入つたケースをテーブルに置いた。

「・・・前にも渡したって・・・あれば試作品だろ?」

哀はそれには答えず、無言で焼けこげたMOを机に置いた。

「・・・・・まさか!」

「・・・・・う、このMOはピスコと遭遇した事件の時の物・・・前に試作品といつて渡した薬は

このデータに従つて作ったもの。そのデータは、今回、黒羽君が盗つてきたデータと一致するから間違いないわ。

この薬は完成品よ。」

沈黙が辺りを覆つた。

「そんな・・・じゃあ何で完全に元に戻らなかつたんだ?」

「それより前に、解毒剤と似た働きをする物を飲んだでしょ?」

「・・・・・・そうか、バイカル・・・」

「そう、バイカルのせいで免疫ができてしまつたのよ。それ以来研究していたのは、その免疫を破壊する薬。

もちろん他の体内組織に影響を与えない薬をね・・・偶然にも黒羽君が盗つてきたデータの中に

体の一部分にだけ作用させる薬があつたからそれを応用すればすぐできると思つけど。」

「どのくらいで?」

哀は口元に手を当てて考えた。

「そうね・・・・・・だいたい五日ぐらいかしらね。」

「そつか・・・

待ち遠しいが、哀の気持ちを考えると、素直に喜ぶわけにはいかない。

新一は複雑な顔をしていた。

「・・・なあ、灰原、もう一つ聞いて良いか?」

新一は言った。

「APT-Xは何のための物なんだ?俺とお前は幼児化して、他の投与された人間は死に至った。

でもお前は前に言つてたよな?『毒を作つているつもりはなかつた』つて。

俺はお前を信じてる。毒薬じゃないなら何のための薬なんだ?「哀は少し考えていた。

「・・・そうね・・・組織の目的とAPT-Xの目的は紙一重・・・

「じゃあ、不老不死?」

快斗が聞いた。

「そつ、それも目的の一つ・・・でも、それは最終目的の通過点。目的を達すれば自然とできあがる物・・・」

哀はパソコンを取りだした。

画面にはAPT-Xのデータが映し出されている。

「あなたたちの考えの前提には一つ間違つた所があるわ。それはAPT-Xが一つしかないということ。」

「「なんだつて!?」

新一と快斗が同時に声を上げた。

「これを見て。」

そつと黙つてパソコンの画面を指差した。

APT-X4869A

APT-X4869B

APTX4869C

「IJの中で完成されたものがAタイプ。目的は、有害、もしくは機能不全の細胞だけを破壊し、

初期状態に戻す薬。つまり前にも言った様に細胞を破壊する機能と細胞を再生する機能の両方を備えている。」

「・・・・・」

「前者の機能だけを取り出して造ったのが、あなたや私が飲んだ薬。APTXのCタイプ。」

これは研究中に偶然できた薬。全細胞が破壊され、何の痕跡も残さず死に至る史上最悪の毒薬。」

「・・・なんで俺達は死なかつたんだ？」

新一が聞いた。

「今の話は、成長の止まった成人に投与した場合の話し。それとは異なり私たちの体は第二次成長期の体。

つまり細胞の再生が活発な状態の体だったから、細胞が再生され、幼児化だけですんだってわけ。」

未だかつて見たこともない研究内容に、博士も驚愕している。

「でも、その反面、後者の機能だけを取り出せば、細胞は永遠に再生され続け、不老不死薬となる。」

これがAPTXのBタイプ。この内容だけは私も見たことがないわ。・・・

『我々は天使でもあり、悪魔でもある・・・』

新一はその意味がようやく分かった。

「私はCタイプができた時、そのデータのAタイプに必要な部分以外を何十ものプロテクトを掛けて封印したわ。理由は悪用された時に取り返しがつかなくなるから。」

そしてその成分を安全に扱う方法の考案中に組織から抜けたの。幸か不幸か私の手に残った、Cタイプを飲んでね・・・」

「なるほど・・・それで毒を作っているつもりはなかつたって言つ

たのか・・・」

「そう、でも情けないことにして、そのプロジェクトは解かれてたみたい
だけど・・・プログラマーを買収していたでしょう?」

他にも封印されていてる薬はあるから、そのプロジェクトも解こうとしているのかも知れないわ・・・」

哀は言つた。

「・・・でも、何でそんなに組織内が乱れてるんだ?もとはどういえば普通の研究所だったんだろ?」

「そう、それが分からぬのよ。私は薬品の研究ばかりしていたから・・・」

「Bタイプのデータを、志保ちゃんは見たことがないって言つたよな?」

快斗が哀に聞いた。

「ええ、パスワードが掛けられているの・・・Cタイプのパスワードは『出来損ないの名探偵』で『Sherlock Holmes』・

「なるほど、前段階の名探偵ってわけね・・・じゃあそこから考えると、Aタイプのパスワードは

『完成された名探偵』で『Sherlock Holmes』か?」

「

快斗は言った。

「正解よ・・・でもこれだけは分からないう・・・」

『改編された名探偵』

「これがBタイプのパスワードのヒント?」

「ええ、そうよ・・・」

快斗と哀が頭を抱えていたとき、横から新一の声がした。

「『ヘルロック・ショーム』綴りは『H e r l o c k S h o i m e s』だ。」

「えつ?」

「いいから、入れてみろ。」

哀は言われた通りにした。

「うそ、開いたわ・・・」

画面には薬の成分が表示されていた。

「『ヘルロック・ショルム』はアナグラム。『アルセーヌ・ルパン』の生みの親の『モーリス・ルブラン』が

『ルパン対ホームズ』を書こうとしたとき、ドイルに抗議されて、仕方なく変えた表記。

つまり『改編された名探偵』ってわけさ。」

「な、なるほど・・・」

快斗は新一の知識に脱帽していた。

「でも、どうやってMOを取りに行つたんだ?」

新一が聞いた。

「さあ、誰かは知らないけど、あの事件の翌日に地下の研究室に置

いてあつたわよ。

『時が来るまで口外しないよう』っていう手紙を添えてね・・・

「…お前、何でその事を俺に言わなかつたんだよ！ 館かも知れないんだぞ！？」

「大丈夫よ、たとえ館に掛けるときであつても組織の情報を外に漏らすはずがないわ。

だからこの顔も知らない人を信じてみようと思つたの・・・ひょつとしたら今回助けてくれた人かもしれないわね。」

(・・・まあ、いつか・・・)

「・・・・・さてと、蘭に電話していくるか・・・」

新一は椅子から立ち上がつた。

「おっ、早速報告か？』五日後にお前の恋人になるから待つてろー…』

とでも言つつもりか？』

「ああ、お前ら程『関係』が発展してないからな・・・・・・

「うつ・・・・言つじやねーか・・・・

新一は勝ち誇つた顔をして、電波の入りやすいベランダに出ていった。

その横で哀はデータを見ながら、一人のやりとりを聞いていた。
(・・・頑張りなさいよ、工藤君、私は、いつもお互いを思つてい
るあなた達一人のファンなんだから・・・)

第一十一話 APTXの眞実（後書き）

次話は訳あつて舞台が東京以外にに移ります。

その訳とは・・・

次回もよろしくお願ひします。

第二十一話 大阪にて

三田後
土曜日の早朝

「もしもし？」

「・・・工藤お・・・」

「おい、どうしたんだよ

いつもならそのハイテンション振りにあきれるところだが、今回は電話の主の元気の無さに驚いてしまった。

「…………な、なんだつて！？」

「・・・ったく、大阪の探偵坊主は、何で、こうもアポ無しのことが多いんだ!?」

一時間後、一行は大阪行きの新幹線の中にいた。

(よく書かれて、服部の『毛利小五郎の一セ物出現』についてこう話している)

「ナンはあきれ顔だ。」

「もうっ、文句ばっかり言わないでよ！旅費はあつち持ちなんだし・

眠気の余り、すでにへ口へ口になつてゐる小五郎に蘭が言った。

「それだけじゃねー、なんで博士の所のこの娘まで居るんだ・・・」

指差す先の座席には哀が座っていた。

「大阪の街を一回見てみたいんだって。ねつ、哀ちゃん?」

「ええ。」

しかし、その答えを聞き終わる前に小五郎は寝入っていた。

「・・・ねえ、本当なの服部君の話・・・」

蘭が声を低くして言った。

「ああ、本当らしい、だから、表向きは『毛利小五郎の一セ物出現』つて事にしてすぐ駆けつけてくれって言ってたぜ。」

そう言つた途端に、みんなの表情が真剣になつた。

「でも、良かつたわね、大阪に行く口実になる事件が偶然あつて。」

「ああ、それは俺も思つてるよ・・・神様に感謝だな・・・」

「・・・珍しいわね、あなたが神様なんて言葉を口にするなんて。」

「・・・神様に縋りたくもなるぜ・・・今回の事件だけはな・・・」

・・・

「おーい、おっさん、じつちやで!」

新大阪駅には平次と平蔵が迎えに来ていた。

「おっさんは親父の車に乗つて、残りの三人は俺に任せや。」

その言葉に小五郎と平蔵は意外な顔をした。

「珍しいなあ平次、お前が事件の捜査に参加せえへんとは・・・」

「あ、ああ、これはおっさんの事件やからな。俺は関わらん方がええやろ。」

「・・・こいや・・・」

人払いをした後、平次、新一、蘭、哀はあるホテルの前に来ていた。
中に入りエレベーターに乗り、目的の部屋に着く。

「・・・和葉、入るぞ・・・」

部屋のドアを開けた。

「か、和葉ちゃん！」

「・・・蘭ちゃん・・・」

そこには・・・・・子供の姿に縮んだ和葉が居た・・・

「ほな、行つて来るなあ。」

和葉は部活の朝練のために朝早く家を出た。

いつもの道を歩く。

だが、この朝はいつもと様子が違っていた。

(・・・なんや、あの人達・・・)

路上に、黒い服を来た見慣れない男が三人いた。

その内の一人がリーダーらしき人物に話しかけ、廃墟と化している倉庫に入つていった。

（・・・あそこは鉄筋が腐りかけとつて、危ないんやで・・・）
そつ思い和葉も倉庫に向かつていつた。

「金は持つてきたか？」

「ああ、ここにある。」

黒服の男と対峙している白コートの男が言つた。

そして、アタッシュケースを取りだし中を見せた。
(な、なんやの・・・)

中で行われていることを目の当たりにし、和葉は絶句した。

「そつちこそブツは持つてきたか？」

「ああ、ここにある・・・」

(なんや、あれ?)

アタッシュケースに対し、黒服の男が取りだした物は小さな薬品ケ

ースだつた。

「それで、誰にも見られなかつただろうな?」

「ああ・・・万一見られていたとしても、これだ・・・」

黒服の男は懐から拳銃を取りだした。

(逃げな・・・逃げなあかん・・・)

和葉はその男の言葉に突然恐怖を覚えた。

しかし、遅かつた。

「こいつ!」

「うつ・・・」

突然布を口に当てられた。

そして、和葉の意識は遠のいていつた。

「どうした?」

「この女!取引を見やがつた!・・・どうしますリーダー・・・」

「フン・・・これを使え・・・」

そう言つた男は一つのカプセルを取りだした。

「これは?」

「今日の取引の余りだ・・・」

カプセルを和葉の口に入れ水を流し込む。

「・・・何でしたっけ、この薬品名?」

「忘れたのか・・・ A P T X 4 8 6 9 C だ・・・」

男は去つていった。

その残酷な言葉を残して・・・・・

「蘭と灰原は和葉ちゃんを頼む・・・」

新一は時計のベルトを締め直し、平次は帽子をかぶり直した。

「よつしや、工藤! 行くで!」

探偵達は現場に赴いた。

「・・・・・どうした、傷だらけじゃないか・・・・・」
「ちょっと、やり合つたんですよ・・・正体不明のスナイパーと・・

第一十一話 大阪にて（後書き）

どうにか書き終えましたが大阪弁にいまいち自信がありません。
おかしな箇所などありましたら、ご指摘をお願いします。

ここから数話の大坂編から本格的に組織との対決が始まる予定です。
これからもこの小説をよろしくお願いします。

第一十三話 筒井筒

「おい、工藤！」

新一と平次は目撃証言を求めて、和葉の言つていた倉庫付近で聞き込みをしていた。

といたた 服部！

「あかん、朝が早かつたから、誰もそんな奴見てへんて……」「くそつ！早く毛手詰まりか！」

そのとき新一の携帯電話が鳴った。

「六」
アーヴィング

『189154!』

「よし、OK。どうした？快斗？」

電話は東京はいる複数な怪盗からかたが

けねーんだ?

快斗は電話の向こうで、不機嫌そうな声を出している。

『文選』卷之三

三日前に快斗と新一は、念のため合い言葉を決めていた。

新一が「ホーリー」と言ふは快idious 189154

ホーリーズが谷底に落ちて死んだと思われていた。・・・・・

「じゃあ、何がいいんだよ?」

ニシガハ

「そんな専門用語こそ、いた
るが、何を？」

「何たよ？」本題は何たよ？

話がついふんと外れてしまつた事に気付き、新一が話題を元に戻し

た。

『おつと、忘れるところだった。今から青子とそっちに行へから・・・』

しばしの沈黙・・・そして・・・

「ちょっと待てー・しばりへ[安静にしてろ、って灰原に言われただろ

! ?」

『その《灰原》の許可が下りたんだよ。間接に異常はないから』動
いて治せ』だとさ・・・じや、わゆことで・・・・・・』

「おい！」

叫んだが、時すでに遅し。

電話は切れていた。

(・・・つたぐ、いつちは和葉ちゃんが縮んで大騒動だつていうの
に・・・)

「・・・快斗なんやで?」

「ああ、あの怪我知らず。いつちに来・・・」

そう言いかけたところで、さつき切った携帯電話が再び鳴った。

(・・・・・非通知?・・・・・・)

「もしもし?」

『・・・・・生駒山だ・・・・・』

「えつ?」

『・・・・・生駒山に行け・・・・・』

「えつ、もしもし!」

・・・ツー、ツー、ツー・・・

その声も虚しく、電話からは無機質な音だけが響いていた。

フランス リヨン

「・・・ E t e s V o u s Y u s a k u K u d o ? ・・」

(工藤優作様ですか?)

「O u i , j e v o u d r a i s v o i r c e t h o m m
e ・・」

(はい、この人にお会いしたいのですが・・・)

優作は一枚の名刺を見せた。

「・・・ ! ・・ D , a c c o r d ・・
(・・・ ! ・・ 分かりました ・・)

そつ書きといふ付係は奥に入つていった。

【君があたり見つつをくらむ生駒山雲な隠して雨は降るとも】
【さとみ】

生駒山

「なあ、工藤、ホンマにあの電話信じてもええんか?」

平次は、バイクの後部座席に乗せた新一に聞いた。

「バー口一、信じるしかねえだろ。唯一の手掛かりなんだぞ・・・」

「罠やつたら、どないすんねん?」

尚も、平次は尋ねる。

「それは、ねーよ。奴らに電話番号が知られてるなら、こんな面倒なことするわけないし、

仮にそうだとしたら俺達はもう、とっくに殺されてるよ・・・」

「そやかて、こんな山登つても、何も・・・・・!?

」
言葉の途中で、平次はある物に気付き、急ブレーキを掛けた。

「これは・・・・・」

そこには、タイヤのパンクした一台の車が放置されていた。

驚いたことに、その車は和葉が言っていた車の外見と一致する。

「ボウズ、奇遇だな・・・・・」

その車の陰から一人の男が現れた。

「赤井さん!どうしてこんな所に・・・」

赤井秀一・・・もう一人の銀の弾丸シルバー ブレットがそこにいた

「変声機で声を変えて『生駒山に行け』と電話して来た奴がいてな・

・それで来てみたらコイツがあつたって訳だ。」

コンコンと音をさせ、車を叩きながら言った。

「赤井さんの所にも電話が・・・・・

「・・・・するとボウズの所にもか?」

「うん、赤井さんが電話してきたのかとも思ったけど・・・・・・

」
「その様子やと違うみたいやな・・・」

新一は、車を調べようと屈み平次もそれに倣つた。

「前輪がパンク・・・急ブレーキの跡に・・・」

「ドアの傷・・・」いら、銃痕やで・・・

「・・・・・と言つことは・・・・・

今度は地面に這い蹲つた。

「…………あつたぜ、服部！」

新一はナイフを取り出した。

そして、それを使って地面を掘り始めた。

(……………！……………これは……………)

「こいつもあつたでー空の薬品ケースに、金の詰まつたスーツケー
スや！……………工藤？」

返事がないので振り返ると、新一は手を口元にあて何やら考え込んでいた。

「その弾丸がどうかしたんか？」

「…………いや、何でも…………」

その時、またしても新一の携帯電話が鳴つた。

(……………！……………)

「もしもしー！」

『…………倉吉に行け…………』

「ちょっと待つて下さい！あなたはいつたい…………

・…ツー、ツー、ツー…………

新一は、電話が切れるや否や、ある番号に電話を掛け始めた。

「…………もしもしージョーテイ先生！…………」

第一二三話 簡井筒（後書き）

余計かも知れませんが、優作とある男性の台詞の部分はフランス語です。

辞書を引っ張り出して書きました。

第一十四話 明日に備えて

新大阪駅

「おーい、快斗、こつちやで・・・」

生駒山からの帰り道、二人は新大阪駅に快斗と青子を迎えていた。

「・・・・で、傷は大丈夫なのか?」

「ああ、ぱっちりな・・・」

快斗は怪我をした方の肩を回して見せた。

「・・・それで、和葉ちゃんは?」

青子が聞いた。

「幸いにも、まだ抗体ができてない状態の体だから、すぐ元には戻れるとは思つけど・・・ただ・・・」

「ただ?」

「奴らにこの事を知られたら、また狙われかねないから、あまり出歩かせるわけにはいかない。」

明後日から冬休みだから、さし当たりは大丈夫だけど、困ったことにそれ以降は誤魔化しが効かない・・・

「なるほど、一週間以内に組織を潰さないといけないって訳か・・・

「ああ、それがベストだな・・・」

四人は北風の吹く中をホテルへ歩いていった。

「あ、快斗君と青子ちゃん……」

部屋の入り口で蘭が四人を出迎えた。

「…………こりゃ大したもんだな、志保ちゃん……」

快斗の目線の先には哀が居た。

試験管やフラスコ、薬品瓶や注射器と共に。

当の本人は検査結果を書いたメモとにらめっこをしていた。

「…………動く実験室 ジヨン・ソーンダイクだな……」

「何でも、推理物に結びつけないでくれるかしら?」

新一に喩えに、哀の冷ややかなこえが響く。

「…………んで、新一、さつそく収穫を効かせてくれよ。」

「まだ何も言えねえよ、確証がねえんだ。」

「そんなこと言わずにさ、教えろよ。」

「そや、工藤、勿体振らんと、はよ言えや。」

「だから……」

だが最後まで言い終わらなかつた。

「…………ひるさいわね!!」

哀の怒鳴り声が響いた。

男性陣一同がしんとなる。

「…………和葉さんに解毒剤を飲ませるから……」

「あ、そう……」

新一達は上の空である。

「解毒剤を飲ませるって言つてるでしょ……」

再び哀が言った。

(どうかしたのか?)

「出てきなさい!!」

哀の声に威圧され、言われるままに三人は外に飛び出した。

「…………やつが、服を着替へさせないといけないもんな・・・
・・・」

数分後

「平次、元に戻つたで！」

部屋には元の姿に戻つた和葉がいた。

「それにして、苦しかつたわ・・・」藤君、よつ三回も耐えられたなあ・・・」

そう言つて、感心したよつな顔をしている。

(・・・あの苦しさは、実際に体験しないと分からねえんだよな・・・
・まあそれはさておき・・・)
「・・・・・みんな、明日に備えて休もうぜ・・・」

第一十四話 明日に備えて（後書き）

こんばんは。

Mr・マリックがサーストンの三原則を三つが三つ皆破ったので、
相当頭に来ている七夕夜想曲です。

これを破つて良いのは演出の上だけなんですが・・。
少しは師匠を見習つて欲しいものです（ちなみに彼の師匠は本文中
にも出てきた岐阜のマジシャンです。）

と、それはさておき、一十四話が短くしてみません。
これ以上続けると中途半端になるので、ここで切らせていただきま
す。

次回にご期待ください。

では、この辺で失礼します。

第一一十五話 銀の弾丸還る

翌日

「Hi! cool kid!」

ジョームズの車の中からジョディーが呼び掛けた。

「ジョディ先生！例の物は？」

「これよ。」

ジョディーは一枚の封筒を渡した。

新一は受け取るや否や、封筒の中身を取りだし、持っていた別の写真と見比べている。

「…………やっぱり…………」

（…………でも、いったい誰が…………）

「…………彈の型が一致したやと……」

「バカヤロウ！声がでけえよ！」

快斗と青子が泊まっているホテルの部屋で新一、平次、快斗、ジョディー、ジョームズが捜査会議をしていた。

「ホンマなんか？」

「ああ、本當だよ…………」

新一は一枚のポリ袋を机に置いた。

「・・・これが灰原を助けた人が撃つた弾・・・」

その内の一枚を平次に差し出した。

「・・・こっちが生駒山で見つけた弾・・・見てみろ両方『ライフ
ルドスラッグ』だ・・・」

「・・・ショットガンか?」

快斗が聞いた。

「ああ、それだけじゃねえ・・・」

新一はそう言つて、一枚の封筒を机に置き中身を取りだした。

「それぞれの旋条痕の写真だ・・・・・・・ぴったり一致する。」

「・・・・・ちゅうことはや・・・・・・・」

「ああ、電話を掛けてきた人がこの弾の持ち主だとすると、その人は灰原を助けた例の謎の人物つて事だ。」

沈黙が訪れた。

「それで、その人が次に行けつて言つたところが・・・・・・・」

「倉吉です。」

ジエイムズが聞き新一が答えた。

「・・・・・でも、倉吉に何があるの?」

「そら、行つてみると分からんのとちゃうか、先生?」

平次は帽子を被り直し、上着を着込んだ。

新一も時計のベルトを締め直し、快斗もトランプ銃を懷に収めた。

「行くつて、こんな少人数で! ? 何があるか分からぬのに・・・・

「人員の心配なら無用だぞジョディ・・・・」

部屋のドアが開いた。

「・・・・・あなたはいつたい?」

「・・・・私だよ・・・・」

その男 赤井秀一は変装を説いた。

「秀一・・・・・生きてたの! ?」

「ああ、FBIのトップシークレットだがな・・・・」

「でも、どうやって？」

赤井は新一に目をやり、なぜか快斗にも目を向けて了。

「……マジックが得意な怪盗さんには、いろいろ分かるだろ？・

ハリー・フーディーーの時刻当てマジック・・・」

「……なるほど、仕込みのサクラですか・・・・・・・・」

快斗が頷いた。

「どういうことだね？赤井君・・・」

ジェイムズが聞いた。

「簡単なことですよ。始めに楠田の死体を車に乗せておく・・・次に彼女に空砲で撃たせ、同時に袋に仕込んだ血糊を潰す・・・あたかも撃たれたように見せかけてね・・・彼女が去った後、車からこつそり抜け出せば脱出マジックの完了・・・そうすれば、中から見つかった楠田の死体が私だと、みんな錯覚してしまうというわけですよ。」

「じゃあ、あのときコナン君の携帯に触ったのは・・・」

「そう、この計画の下準備・・・ジョディが指紋を頼りに死体の身元確認をするのを見越してね・・・」

「でも、秀一どうやってそこから移動したの？」

「仕込みのサクラ・・・本部から来たFBI調査員に警官振りをしてもらつて現場に来させたのさ・・・客が自由に呑ませた懐中時計の時刻を当てるという現象を、サクラを使って実現させた、

マジシャンの代名詞的存在『ハリー・フーディーー』の様にな・・・

「

「・・・なるほど・・・警察が来れば奴らもその場に留まるはずがないし、

まさか警官が仕込みだとは夢にも思わない・・・フーディーーもびっくりの見事なマジックですよ、赤井さん・・・」

快斗はそう言った。

怪盗キッドをうならせるのだから相当のマジックなのだろう。
「でも、しばらく死んだことにして捜査するんだつたんじや……
・・・」

新一が言った。

「そろそろ潮時だと思つてな・・・」いつも表だって捜査ができるな
いと不便だし、それに・・・」

そう言いながらドアに近づいた。

「・・・あの子を守らないといけないしな・・・」

「あの子って?」

「彼女だよ、ジョディ・・・今もこのドアの外にある木の植わった
鉢植の陰で聞き耳を立てている・・・」

ドアを開けた。

「なんだって、どうこうことだよー。」

「詳しいことは車で話すわ・・・」

「・・・・・といふことだ、ジョディ。行くぞ、俺を『殺した』

奴らの研究所とやらにな・・・FBI捜査官を何人か呼んである。

人員には困らないだろう・・・それから・・・

銀の弾丸は男三人の方を見た。

「何人かに、君たちの彼女を警護させよう・・・・・これで安心

だろう?」

そう言って階下に降りていった。

第一十五話 銀の弾丸還る（後書き）

こんばんは、七夕夜想曲です。

バカな『赤井の帰還トリック』に付き合つていただきありがとうございます。

この程度のものしか作れない私の頭を許してください。

さて、伏線を残す形となりましたが次回で消化されます。

第一一十六話 時を止めて

FBIの調査員と新一達を乗せた車は高速道路を走っていた。

「…………お前のお母さんは死んだって、そう言つてたよな？」
哀に新一は聞いた。

「ええ、そう聞かされていたし、そう思つていたわ……例のカセツトテープの声を聞くまではね……」

「カセツトテープ？ああ、宮野博士の知り合いの家にお前の姉さんが隠したあのテープか……」

「そう、あのテープの中でお母さんが言つてたのよ……」

『お母さんね……本当は死んでないの。でも死んでるのとあまり変わらないかな……』

人工冬眠で倉吉の研究所に保管される予定なの。

理由は今、開発中の薬が完成すればお母さんの病気が治るから……』

』

「…………人工冬眠やと？」

「ええ、人間の体温を十七度以下に冷やして、丁度冬眠の様な状態にする事……」

「じゃあ、その開発中の薬つて言つのが……」

「そう『完成された名探偵』APT-X4869Aタイプよ……」

皆が沈黙した。

「でも、二十年前にそんな技術が……」

「奴らの組織は、元首相が設立した組織。最新の技術は真っ先に入ってくるでしょうね……」

でも二十年前だから、最新設備と言つてもかなり大きい物のはずだ

けど・・・

大がかりな人工冬眠装置。

皆は一様に、大きなカプセル状の機械を思い浮かべた。

「・・・・・ そうだとすると下手には踏み込めねーな・・・・・

」
それまで黙つて聞いていた新一が言った。

「人工冬眠させてある人間を運び出すのは一苦労だし、機械が大きければ尚更だ。

下手に俺達が踏み込むと、中に灰原の母さんが居るにも関わらず、証拠隠滅の為に施設を爆破しかねない・・・・・

「なるほど・・・ そうね・・・

新一の言葉を聞き、ジョディが言った。

「・・・・・・・・・ じゃあ、そこで俺の出番だな!」

みんなの目が一斉に快斗に注がれた。

「こつそり侵入するのはお手の物。様子を見てから侵入すればいい。

「・・・・・・まあ、今の所、それがベストだらうな・・・・・

「・・・・・工藤君・・・・・」

「ん?」

哀は畳んだ薬包紙を差し出し、それを広げた。

「これは・・・」

「そう、解毒剤の前段階。バイカルによつてできた免疫を壊す薬・・

・

「もうできたのか?」

「ええ、予定より一日早くね・・・」

そう言つと、どこから持つてきたのか、水の入つたコップも差し出した。

「……………どうから持つてきただよ……………」

「おおやあ、おおやあ！」

「・・・あ、そう・・・」

マジシャンの癖なのか、それとも緊張を和らげるためにしているの

か
い
す
れ
に
し
ら
見
舞
な
手
別
き
だ
り
た
れ
ば

「早く飲んだ方がいいわよ、完全に作用するまでに一時間は掛かる

「… その様子だと、お前は飲んだみたハだな…」

「ええ、一時間と言つ時間は臨床実験の結果よ。倉吉に着くまで後一時間。

解毒剤の方は黒羽君の情報如何で飲むかどうか決めればいいわ。
」

倉吉

「・・・どうだ、快斗？」

無線で新一が快斗に呼び掛けた。

・・・・・新一か？状況はあまり思わしくないな・・・・・

「何があつたのか?」

『いや、文字通り何もねえ……『もぬけの空』だ……』

「設備も何もないのか！？」

『ああ・・・それに、外にはタイヤの跡がある・・・この大きさは十トントラックだな・・・』

「なるほど、すでに機材は運び出されたってわけか・・・くそつ！その時ジョディの携帯が鳴った。

「もしもし・・・・・・なんですって！」

第一一十七話 セナなら

「……三人共どこまで行っちゃつたんだろうね？」

青子がポツリと呟いた。

「ホンマや、書き置きも残さんと何してんやろ？」

飲みかけのミルクティーのカップをテーブルに置きながら和葉も言った。

「……でも、あの三人の事だからきっと……」

蘭が言い、そして三人が三人同時にため息を吐いた。

時刻は夜八時。

どこに行つたのか？

何をしているのか？

疑問の形に成つてはいるものの、答えは分かり切つている。

あの三人のことだ。

持ち前の好奇心に駆られて、現場で捜査に必死になつてているのは明白である。

タイミングを謀つたかのように、蘭の携帯が鳴つた。

「新一！今どこにいるのよ……は？」

岡山駅？」

その意外な言葉に、あとの一人が一斉に蘭を見た。

「今から東京に帰る！？……だから最終の東行きのぞみに乗れ！？」

・・・・・和葉ちゃんと青子ちゃんにもそつ伝えてくれつて、いつたいどうしたのよ？・・・・・えつ！？」

それまで呆れた様な顔をしていた蘭だが、急にその表情が変わった。

「……うん、分かつた、そう伝えとくね。」

そう言って電話を切つた。

「じゃあ、みんな明日の夜にね・・・」

岡山駅で新一平次、快斗を降ろし、ジョディは車を出させた。FBIの捜査員は車で東京に戻るらしい。

「いよいよ、明日やな工藤、快斗・・・決戦や・・・」

ジョディが受けた、部下からの電話の内容はこうであった。

『CIAの彼女から電話がありました。奴らの本拠地を叩く準備が整つたそうです。

なのでFBIにも協力をしてもらいたいとの事です。』

「・・・・・服部、お前いいのか、こんな危険な事に関わって?

元はと言えばお前はこの件とは

何の関係もないんだぜ・・・

「・・・アホ、なにゆうてんねん・・・」

平次は言った。

「探偵やのに、親友がでっかい組織潰すの指銃くわえて見とけゆうんか

? 探偵の性が許さんわ。

それに前にもゆうたやう、ここまで来て傍観してく訳にはいかんの
や・・・

そう言いながら買った切符を新一に渡した。

会話の内容の割にアンバランスだが、子供用の切符である。

「一人で何でも抱え込むなや、少しあは俺らを頼れ。お前の悪い癖や
で・・・・・それに万一、お前が死んだら、
悔いに悔いれんからなあ・・・・・」

「・・・・・バーロー、死んでたまるかよ・・・・・」

新幹線がホームに滑り込んでくる音をバックに聞きながら、愛しい
女の顔を思い浮かべていた。

三時間後 東京 阿笠邸

「・・・しかし、よくこんな遅い時間になつても帰ろつと思つたの

う・・・

「まあ、仕方がねーよ。」いつでもしねえと決戦に間に合わねえんだ。

眼鏡を外し、ブカブカの高校生の服を着ながら新一は言った。
蘭と快斗と青子はそれぞれの自宅に、平次と和葉は工藤邸に今は居る。

「それにしても、急な話しじゃのう・・・

「ああ、CIAの本堂さんも連絡を取るタイミングが難しいんだろう・・・」

そう言って、腕時計のベルトを緩めていた時、解毒剤を持った哀が地下から上がってきた。

「工藤君、この解毒剤には少量の睡眠薬が含まれているから、眠つてる間に作用するわ・・・そうね・・・」

そう言って哀は腕時計を見た。

「今から飲めば、丁度七時に田が覚めるわね。その時にはもう元の体よ。」「

「サンキュー・・・お前も飲むんだろう?」

新一はゴップを受け取りながら尋ねた。

「ええ、あなたの後にそつするつもりよ・・・」

「そりか・・・それじゃあ、さよならだな・・・」

「え?」

「『灰原哀』としてのお前に、『さよなら』だな・・・・・・・・・・・・

それから『じめんな』思いに答えてやれなくて・・・

「・・・・・病院での話し、聞いてたのね・・・・・・・

「あ・・・お前には悪いと思つたんだけじよ・・・・・・

『コナン』は思わず下を向いてしまった。

だが、哀は笑っていた。

珍しい事ではあるが・・・

「いいのよ、私はあなた達一人のラブコメのファンなんだから・・・

「お、お前なあ・・・・・」

その顔は真っ赤である。

「・・・・・・・・それじゃあ・・・・・・・・・・・・・・

そいつ言って、解毒剤と水を口に流し込んだ。

(・・・・・・・・よなら・・・・そしてありがとう・・・・・・・・江戸
川口ナン・・・・・・)

第一一十七話 さよなら（後書き）

さて、皆さんお待たせしました。

次回から組織との対決、そして新一の復活です。

と、言いましても帰省のため次回更新は一月五日です。

申し訳有りません。

失礼します。

第二十八話 突入

頭上で自分の名を呼ぶ声がし、意識が戻つていいく。

そして、ゆっくりと目を開けた

「・・・・・蘭・・・・・」

「新一！」

愛しい女の顔ひとがそこにはあった。

そして、昨日の事を思い出し、ハッとしたように自分の両手を眺めた。

「・・・・・大丈夫、元に戻つてゐよ・・・・・」

「・・・・・・・そうか・・・・・・・」

そう言って、体を起こす。

すると、蘭の顔が自分の目の高さに来た。

「・・・・・・どうやら、本当に戻つたみてーだな・・・・・」

そう呟きながら蘭が持つてきた食事に手を伸ばした。

「・・・・・行くんでしょ？」

「・・・・・・・ああ・・・・・・・」

蘭の問い合わせに新一が答えた。

数時間もすればいよいよ決戦である。

「・・・・・・ねえ、新一・・・・私も付いて行つちゃダメかな・・・・・」

・・・・・

しばらく迷つた後蘭が言った。

「！そ、そんな事・・・・・・・・・・・」

できるわけないだろーと言いかけて口を噤つくんだ。

（・・・・・今までそんな言い訳で、結局俺から遠ざけてきた
んだよな・・・・・・・）

新一は今までのことと思い返していた。

危険だ。

その理由で自分の正体をひた隠しにしてきた。

それだけで、蘭を自分から遠ざけてきた。

だが、それが元で何度も蘭を泣かせただらり・・・・・

『・・・・・今回やつて蘭ちゃん泣かせてしもたやう?』

いつかの和葉の言葉が蘇る。

続けざまに、蘭の言葉が頭を過ぎよつた。

『・・・・・・・どんなに危険でもいいから・・・わたしを悲しませることになつても構わないから・・・・・』

その時の蘭の顔が、目の前の蘭の顔と重なつた。

(・・・・・これ以上俺から遠ざける訳にはいかないよな・・・・)

そう判断した。

また、自分も蘭を傍に居させたかつた。

「・・・・分かつた・・・・だけど、みんなの傍から離れんなよ・・・・」

『・・・・・・・こちら赤井、A地点から報告。潜入成功。これより水無諜報員との接触を試みる。以上』

「本部了解」

『・・・・・こちら、黒羽、B地点からの侵入に成功。これより内情を探りに掛かります』

「了解・・・・・・・・・氣を付けろよ快斗・・・・・・・

『心配すんな新一、不法侵入はお手の物さ……』

通信は一旦途絶えた。

「順調みたいね、シンイチ……」

「ええ・・・上手くいってますよ・・・・・・」

一行は街外れに建つあるビルを目前にしていた。

作戦本部 FBIの車だが、ビルから死角となる場所に置かれていた。

「CIAの本堂英海諜報員といつでも連絡を取れるように、本拠地に侵入し彼女に小型マイクを手渡すこと。」

ジェイムズは言った。

「そうすれば突入時の経路を指示してもらひ事ができるし、その効率がいいからだ・・・そして・・・」

ここで全員の顔を見渡した。

「もう一人潜入してもらひ。目的は内情を把握することだ・・・そ

うすれば臨機応変かつ迅速な対応が可能になる・・・」

これが数時間前に告げられた、CIAとの共同作戦の下準備の内容である。

潜入という役目なので、変装ができる赤井と快斗が選ばれたというわけだ。

無線に通信が入る。

『黒羽です。全三十階の内30、29、28階が司令部、27、2

6、25階が黒、24、23、21階が青、その他は倉庫及びデータ記録庫のようです。以上。』

「本部了解」

黒、青は各組織の略称である。

『一ひうちら、赤井。彼女との接触に成功。すぐに彼女が連絡するそつだ。』

「OK秀一、そのまま彼女の警護に付いて。』

『了解』

しばしの沈黙・・・

『水無です。早速ですが進入経路を説明します。まず入ってすぐの所にエレベーターがありますが、

奴らが抵抗の際に電源を落とす場合が考えられますので使用は避けるべきでしょう。

入り口に入つてすぐの廊下を真っ直ぐ行つて一番目の角に階段があります。

そこから突入してください。尚、出入口及び一階から十階はCIAが固めますので、

FBIはそれより上の階をお願いします。』

「了解」

『こちら黒羽、ちょっと良いですかジョーティ先生? 突入後、新一と志保ちゃんは

別行動で最上階に上がるよう言つてください。特に志保ちゃんには・・・』

「・・・構わないけど、どうして?」

『・・・理由はまだ言えません・・・志保ちゃん個人の問題だからです。』

「・・・分かつたわ」

『・・・建物の左に別の階段が有ります。そこを使えば作戦に支障もないと思います。』

「了解・・・みんな行くわよ・・・」

対決の火蓋は切つて落とされた

後方の車の中で三人の少女がその様子を見ていた。
最愛の人の無事を祈りながら・・・・・・・・・・・・

また戦場にいる男達も誓つた。
絶対に彼女の元に帰ると・・・・・・・・

第二十八話 突入（後書き）

新年と共にスタートしました当小説の組織編。この小説は組織物だと言つのに突入までに三ヶ月もかかつてしましました。

すみません。

話しあは変わりますが、これまた新年と共にユニーク（重複をのぞいた）アクセス数が一万件を突破しました。読者の皆様方、誠にありがとうございます。また、以後もよろしくお願ひいたします。

ではこの辺で、失礼いたします

第一十九話 最上階には

(・・・・・ 快斗の奴いつたいぢうじうつもりなんだ・・・・・)

新一と志保は快斗が言つた通りに、最上階へ向かっていた。

「・・・・・・・・・ 何だと思つ？」

新一の考えを見透かしたように志保が言つ。

「・・・・・・・・・ さあな・・・・・・・」

「あ、兄貴・・・じうしやす・・・」

ウォッカが流れ込む機動隊を見て顔色を変えている。

「・・・・・・ キールだ・・・・・・」

「へ？」

「キールはどうだと聞いているんだ！」

「あいつなら、用があるとか言って外に・・・・・・

「フン・・・・・・」

音を立ててドアを開け、ジンは外に出でいった。

バン！

新一の顔すれすれの所を弾丸が通つていつた。

それが飛んできた方を見る

卷之三

その姿を研究すると志保を庇つた

日本一回猶か一因酒さへいがんれ

すると、その趙を細凶としたかの如く、銃を構えた組織員が現れ

ざつと十人はいる。

「やつちまいな！」「

一斉に銃口を一人に向ける。引き金に指をかけた。

ホン ホン ホン ホン

が複数回響き渡り、本采聞における錦戸の交響曲はどこかで聞いたことがある印象

その音の数だけ向けられていた銃が吹き飛んだ。

アソシエイション

すると今度は、組織員達が足首を押されて呻き始めた。

「…………つたく、実弾がトランプに負けるとは、黒い鳥達も

「快斗！」

上から快斗が降りてきた。

その手には、やはり例の鉢が握られていた。

く立てねえよ・・・

「・・・・・サンキュー快斗・・・・・」

「礼はいいから、早く行け！お前と志保ちゃんの担当は最上階だ。

卷之三

「ノルマニヤ」の書評

そう言って、快斗は下に、新一と志保は上に向かつて行つた。

だが、誰もこのときは気づかなかつた。

苗を舞ふた鉢の中の一にはあやか美弾が食し込んでしまふと

最上階

مکاری

志保の第一声がそれだつた。

見る渡す限り廊下が続いているだけで、ドアも何もない・・・・・

新一は黙って鉄の壁の一部に近寄り手で押した

それこあつたのよ諷し罪だつた

卷之三

• • • • • • • • • •

「・・・・・
行くぞ
・・・・・

そして中へと進んだ。

コツ、コツ、コツ、コツ・・・・・

二人の足音だけが響く。

コツ、コツ、コツ、コツ・・・・・ピタッ

その足音が止まった。

二人の前には椅子に腰掛けた一人の男が背を向けて座っていた。
生憎と、肝心の人物は影になつて見えないが・・・・・・・

「・・・・・工藤新一君・・・それに、志保だね・・・・・」

その男が言った。

「・・・・・！・・・どうして、私の名前を・・・・・・

志保がそう言いかけたところで、新一に手で制された。

「なるほど・・・あなたでしたか、十八年前に事故死したと言わ
れている人物・・・・・」

そこで志保はハッとした。

「・・・・・そして、学会から追放されたマッドサイエンティス
トであり、組織のトップでもある・・・・・・

男はゆっくりとした動きで振り返った。

「・・・・・富野厚史さん・・・・・」

第三十話 怒りと眞実

「…………お父さん…………？」

志保は力無く声を発した。

「ああ、その通りだよ、志保…………」

男の声が響く。

どこかで聞いたような声だ。

掴み所のない記憶を辿つて行く……

だが、それが明確になることはなかつた。

「…………しかし、あなたは死んだことになつてゐるのでは……

「確かに、表向きはそくなつてゐる…………」

その男が言つた。

「だが、裏では…………」

「…………詳細不明、実体は悪に身を染めた、犯罪組織のトッ

プ…………」

男の声を遮り、志保の声が響いた。

「その組織のやり方は、数々の人間と接触、利用して、最後には口

封じに殺すという、極悪非道な物…………」

死んだはずの父親を目の当たりにし、混乱していた患者が、回復してきたりしい。

志保は、現実を受け止めるに怒りが込み上げてきた。

「…………その方針の下、数々の人間を殺してきた…………」

「お、おい、富野…………」

新一が止めに入るが無駄だつた。

「挙げ句の果てには、実の娘である私のお姉ちゃんまで殺した！」
怒りと悲しみに顔を歪めながら、志保は叫んだ。
その声が木靈する。

• • • • • • • • • •

返す言葉がないのか、椅子に座っている男は沈黙している。

「何とか言つたらどうなのよ！死んだ振りして犯罪組織のトップになり、殺人を重ね、娘まで殺した！」

「……」と、ここでそんなことをしたのよ！」

二人はゆづくりと頷いた。

「・・・・・六十年前の話しだ。当時、日本の首相だつた大黒蓮太郎が秘密裏に進めていた計画があつた。

新一が言った。

・・・・・ そうか、君の仲間がテータを盗んだんだってたな

記録は一九八十年を境に途絶えてしまふ。
「なぜか」と思ふ。

それを見たときの落胆振りを思い出す。

「そう、その年を境にこの組織は大きく変わってしまった……それがまでは普通の研究所だったのに……」

「何があつたんです?」

「その年に、ジンが組織に入ってきた。そして、私にある研究データー

夕を渡した・・・・・

「それはいつたい？」

「最新の細胞研究のデータだった。その時私は喜んだよ。これでエレーナの危機を

回避できるかもしぬないとね・・・・・

「お母さんの危機？」

「ああ、まだ言つていなかつたな・・・・・エレーナはその数年前の事故で大量の放射線を浴びていた・・・・・

その直後は何ともなかつたが安心はできない。

なぜなら放射線を浴びてから数年後に突然、放射線障害の症状が出ることがあるからだ。

広島や長崎の被爆者が、原爆投下から六十年以上経つた今でも苦しんでいるのを知つてゐるだらう?」

二人は頷いた。

「その時のためにも私は研究を重ねていたから、ジンがデータを持つてきたことは吉報に思えた・・・・・そのデータをどこから持つてきただかるまでは・・・・・・・・・・・

「どういうこと?」

志保が聞いた。

厚史は苦々しげに顔を歪めながらいつ書つた。

「そのデータはCIAから盗み出した物だった・・・・・

第三十一話 古傷

「「CIAからデータを盗んだ！？」

「ああ、その通り。諜報員も驚いただろうな……」

厚史は言った。

「つまり、我々は犯罪に手を染めてしまった訳だ。その時からだよ、記録の保管方法が変わったのは……今話している事の殆どは私がトップに立つてから知ったことだが、それまではコンピューターに保管していた。だが犯罪に関する記録をそこに保存するわけにはいかない……ハッキングを受けたらお終いだ。」

厚史はここで一旦話を切った。

「そこで、記録方法をアナログに切り替えた。つまり手書きだ。手書き？」

余りにも原始的な方法に、二人は呆気にとられた。

「そして、その紙を倉庫に保管し、部屋に鍵を掛け、見張りを付ける。

相手の盲点を突いた確実な方法だ。

致命傷にならない、薬品に関するデータはこれまで通りコンピューターに保存していくがな……」

確かに、そんな原始的な方法を選ぶとは思わないだろう。

そんなことを考えていた新一だったが、ふと、あることに思い当たつた。

「すると、CIAのデータもそこに……」

「その通り。多分それが最初のアナログデータだらう……」

「じゃあ、CIAの目的はひょっとして……」

「多分君の考えている通りだ。奪われたデータの奪還……」

「なるほど……一階から十階をCIAが制圧すると言つた理由は、それだったのか……」

「名推理だ、初期のデータほどの階に保管されている……」

「

「こちら本堂、状況は?」

『「こちらA班、データが保管されていると思われる三階までは完全に制圧。これよりB班がデータ奪還に取り掛かります』

「了解。」

『そちらに何か変化は?』

「・・・・・たった今、構成員の一部が五階と十二階に向かいました。その階の援護に掛かるようですね。」

『了解・・・・・FB-Iにも伝えるよしこと・・・上からの指示です』

「了解」

無線の周波数を切り替える。

「こちら水無、応答願います。」

『こちら、ジエイムズ、用件は?』

「構成員の一部が十三階に向かいました。注意するよしこと伝えてください。」

『了解』

無線のスイッチを切つた。

その後・・・・・

力チャリ

周りが騒がしいにも関わらず、その小さな音だけはやたらと耳に届

いた。

頭に銃口が突きつけられる。

「・・・・・やはり、お前だつたかキール・・・・・ CIAの
回し者は・・・・・」

「・・・・・ ハレーナが事故にあつて六年後、私は組織のトップ
に立つた。」

厚史は再び話し始めた。

「そこで初めて知つたよ、ジンが犯罪に手を染めており、例の細胞
研究データが盗まれた物だと。

そこで私はジンを説得しに行つた『これ以上罪を重ねるな』と・・・
・・・・・

その時のこと思い出したのか顔を曇らせた。

「だが、無駄だつた・・・・・いや、むしろ逆効果だつた。

ジンは私の意志に反して組織内に犯罪班を作り、これまで以上に罪
を犯すようになった。」

「・・・・・・・なぜですか？」

新一が聞いた。

「ジンはただの組織の構成員。それなりの立場はあつたかもしけま
せんが、

組織のトップ意志に反抗してまでそんなことをするとは思えません。
的を射た質問だった。
いつたいどうしてだらうか？

その問い合わせに答えるかのよう、厚史はゆっくりと体を動かした。
そして、今まで机の下にあつた腕を持ち上げた。

「 「 」 」

二人は同時に息を飲んだ。

・・・・・ その腕には手首から先が無かつた。

第三十一話 ジンの肩書き

「…………いつたい、何があつたんです……」

新一はその腕を見て言った。

「十九年前に事故で無くした……忘れもしない……」

「

厚史は言った。

顔中に苦渋の色を浮かべながら。

「薬品を調合していたら、爆発を起こしてね……一命は取り留めたものの両手の手首から先を失った……」「そう言ひと、両腕を元あつた場所に戻した。

「これが運の尽きだつた。薬品研究は不可能と見なされ、司令部に配属された。

その三年後に組織のトップに立ち、そこで……」「ジンの犯罪を知った……」「

志保が言葉を継いだ。

「その通り……」

「でも、どうして、手を無くした事がジンの行動を止められなかつた原因なの?」「

志保は尋ねた。

「分かんねーか、富野?」

新一が言った。

「犯罪に走つたつてことは、ジンはおそらく組織内の過激派だったはずだ。

そんな奴らの観念からしてみると、両腕がない事は実力がないということに等しい。

そんな人がボスだったんなら、奴らがボスの命令に従うはずがない。自分が思つままに行動するだろ?よ……」「形だけの統率者。

それゆえに規範を失つた組織。

志保は、組織内が乱れている理由をようやく悟った。

「その通りだよ、工藤君・・・・・だが、『奴ら』ではない。

これ知つてゐる過激派の構成員は一人だけ。

私が直接会つて話をしたジンだけだ・・・・・手を見せてしまつたが為に

こんな事になるとは思わなかつたがね・・・・・その他に知つてゐるのはベルモットだけだよ・・・・・

「ベルモット！？」

志保が驚きの声を上げた。

「そうだ、私が手首を失つてからとまつもの、身の回りの世話は彼女がしてくれた・・・・・

エレーナに無理をさせるわけにはいかにからな・・・・・

新一もその言葉を聞いていた。

だが、それよりも前に言つたことの方が引っかかっていた。

「・・・・・組織の統率者と全く反対の意見を持つジンに、誰一人反対することなく従つたんですか？」

「その通り」

「そんなバカな・・・・・どうしてですか？」

構成員全員が事故のことを知つてゐるのなら、誰一人反対せずに過激派に寝返るのも頷ける。

両手首を失つた統率者の命令など、誰も聞かないだろう。

だが、それを明かさずして皆を従わせることが果たして可能なのか？

その疑問に答えるかのように、厚史が口を開いた。

「工藤君、なぜ組織のカラーがブラックなのか分かるかね？」

否定のしぐさ。

「ある人物を連想させるためだよ・・・・・」

そう言って、新一に答えを促した。

だが、答えたのは志保だった。

「創立者にして初代統率者の大黒蓮太郎・・・・・」

「そ、うだ……」

「…………じゃあ、メールアドレスが『七つの子』なのは、ひとつとして……」

「そり出資者の馬鹿連取を連想せしめたつまり・・・・・」

構成員は、組織の結成に貢献した人物を崇拜することを、「余儀ない」と思ふ。」

「じゃあ、まさか……？」
「ああ、姫の髪が大体の内定料金だから……」

おお、君の考えは才媛の血を引いてるんだね。一曰く言葉を句切り、こう言った。

「ジンは大黒蓮太郎の息子なのだよ・・・・・・それ故に皆はジンに逆らう事をしなかつた」

階下では構成員と諜報員の睨み合いが続いていた。^{スパイ}

・・・・・いつ気付いたの？私がCIAだつて・・・・・

拳銃を目前に、CIA諜報員は果敢にも言つてのけた。

日本工の連中とは何でも何一ヶなし集団が一階から三階は集中的に突入するのを見たときだ。

あそこには俺が盗んだデータがある。そして是が非でもそこに行く必要があるのはCIAしかいない。

そう考へたときに思い出した、お前がCIAの常套句を語っていた

ことをな・・・・・

銃がさらに頭に押しつけられる。

「なるほど、でも私は殺さない方がいいんじゃなくて？裁判官の心証が悪くなるだけよ」

「フン、そんなことはどうでもいい。お前を殺すのは、裏切り者は始末するという俺のやり方に従つからだ・・・・・・

バンッ！

銃声が響く。

だが、それはジンのものではなかつた。

「また会えたな・・・・・・・・・愛しの、愛しの恋人さん？」

「ジンは狡賢い奴ずるがしだつた。私の弱点を公表して皆を従わせるのではなく、

私があいつに逆らえなくなつたことを利用し、私の名前を騙かたることで皆を従わせた。

その時に『大黒蓮太郎の息子』という彼の肩書きが役に立つたのは言つまでもないがね・・・・・・

何も疑うことなく皆はジンに従つた。

『あの方の命令』という嘘を疑うことはしなかつた・・・・・・ただ一人を除いては・・・・・・

「ただ一人？」

「そう、その人物はジンに従う振りをしながら、私の意志に従い組

織解体の機会を窺つていた・・・・・・

「誰ですか？」

新一は聞いた。

聞いてみたものの、答えは何となく分かっていた。

その時、厚史の背後から足音が聞こえてきた。

「丁度、来たみたいだな・・・・・彼女だよ・・・・・」

その女が姿を現した。

新一は自分の予想が当たった事を知った。

「・・・・・ベルモット・・・・・」

第三十二話 黒い散弾

ベルモットは部屋に入つてくるなり、厚史の机のそばに歩み寄つた。
「…………一旦、敵意はお預けにしましょう。」
「…………」

強張った顔をしている新一に言った。

そう言つて、持つていた銃を放つて寄こした。

「…………取り敢えずはな…………」

その銃を床に置いた。

取り敢えずの和解が成立し、厚史が口を開いた。

「どこまで話したかな…………」

「ベルモットが過激派を見張る内偵だという所までです。」

「やうだつたな…………それから…………」

そう言いかけたとき、志保が口を開いた。

「じゃあ、じつこう」と？

そう尋ねる。

「ジン達が言つていた『あの方』については架空に近い存在だった。

その言葉を出すことで、自分の独断であるにも関わらず、あたかも組織のリーダーから指示を受けたように振る舞いみんなを従わせた。

つまりお父さんが直接指示をだしていたわけじゃない…………

「そうだ…………だが責任は私にある。事情がどうであれ、私は組織の統率者だ。それに変わりはない…………」

それを聞いて、志保は肩の荷が降りたような安心感を覚えた。

自分の父親が、姉を殺したわけじゃない。

妙な言い逃れもせずに自分で罪を認めている…………

志保は少しだけ厚史に近づいた。

厚史は続きを話し始めた。

「そこからは、もう組織内は泥沼状態だった。丁度烏丸の残した資金が尽きた頃だった為に資金を入手しようと、奴らはあらゆる犯罪に手を染めた。そして、その資金入手計画の一環が有能なプログラマーやシステムエンジニアとの接触だった。

「…………どうこいつ」と？

志保が聞く。

「あるプログラムを作らせた……彼らに接触したのは決して志保が掛けたプロテクトを解くためではなかつたのだよ……」

・

「いつたい何を作らせたんですか？」

「そのプログラムの名前はあなたの方が聞き覚えがあるはずよ」

○ 1 ցցց ՞ ՞ ՞ ՞ ՞ ՞

ベルモットがそう言った。

「・・・・・！・・・まさか・・・・・」

新一もようやく気付いたようだ。

「・・・・そう、完全無欠のコンピューターウィルス『闇の男爵』使い方如何によつては大企業相手に大金を騙し取ることができる……

・・・これもジンの発案だけね・・・・・」

この時点での今まで抱えていた大体の謎は解けてた。
だが・・・・・

「こちらからもいくつか質問してもいいですか？」
新一が言つ。

「どうぞ、工藤君」

厚史は許可した。

「・・・・・赤井秀一を恐れる理由は何なんですか？いくら『あの方』を騙つていたと言つても、ジン自身が恐れていたのなら、その理由が判明しているはずです。でも実際はそうではない。つまり、あなた自身が彼を恐れており、その恐れているという事だけを何か

の拍子にそれをジンに漏らしたと推測できます。その為、ジンはなぜあなたが彼を恐れるのかを知らない……」途端に厚史の顔が曇つた。

「…………それはだな、工藤君…………」

「厚史はその理由を新一に話した。

- ・ だが、その真相に息を飲んだのは新一ではなく志保だった……

ジンは銃声のした方を向き、銃を構えている一人の男を認識した。

「…………貴様は、まさか…………」

「お察しの通り…………」

その男はそう言つと CIA 謀報員の代わりに前に出た。そして、変装を解く。

「…………赤井秀一…………」

黒い大砲の散弾と銀の弾丸…………

ダイヤモンド・カット・ダイヤモンド…………

どの言葉を用いても足りないぐらいの威圧感が、そこにはあつた。

「フン、銀の弾丸は使い切つたと思っていたが、フェイクだつたようだな…………」

「そいつは違うな…………我々の銀の弾丸は使用すると、心臓を射抜くまでは地面に落ちない特殊な弾なのさ…………」

「そう言つて赤井は銃を放つた。

ジンが崩れ落ちる。

弾は両足首を貫通し、見事にアキレス腱を破損させていた。

「…………それで、まず歩けないだろう…………まあ、そこで精々捕まるのをまつてるとんだな…………」

そう言って、立ち去りうとした。

「…………じゃあ、最後に一つだけ教えてくれ…………」

ジンは蹲うずくまつたまま言った。

「なぜ『あの方』はお前を恐れています?」

赤井秀一は立ち止まった。

「…………その様子だとお前は、俺の大切な人を一人も殺した

事に、気付いてないみたいだな…………」

いつもの冷静さとはほど遠く、その言葉は怒りに満ちていた。

「…………二人だと!?」

しばしの沈黙

そして…………

「…………フン、俺達の田を盗んでアイツとそんなことまでしていやがったのか…………」

ジンが言った。

まずは自分たちの不備を悔いるかのよう!

そして半ば蔑なかむような口調で…………

「ああ、お前達の『あの方』とやらは、子供を殺された親の怒りを恐れていたのさ…………」

「…………明美は俺の子を授たすかっていたんだ…………」

第三十四話 P · S · I LOVE YOU

「お姉ちゃんが妊娠してた・・・・・・」

「そうだ・・・・・・」

重苦しそうに口を開いた。

「明美が殺された後に知ったことだ。不本意ながら、この組織の名前を出して司法解剖の結果を聞き出した・・・・・・父親が誰かはすぐに分かった。ベルモットから報告を受けていたからな・・・・・・」

「なるほど・・・・・・あなたは我が子を殺された父親の怒りに怯えていた・・・・・・」

「その通り・・・・・・」

沈黙が訪れた。

「・・・・・・もつ一つ聞きたいんですが・・・・・・」

新一が言った。

そして、厚史の横にいるの方を見た。

「これはアンタにだ、ベルモット」

そして、こう言った。

「・・・・・・ジョディ先生に代わって聞く・・・・・・どうして歳をとらないんだ?」

「ジョディ、そっちはどうだ?」

『50パーセントは制圧したわ・・・・そっちは?』

「順調だ、それから二十一階に大きな獲物が寝ころんでるぜ・・・誰かに確保させてくれ、俺は上に行かないと行けないからな・・・」

・・・

『OK！ヘイジに行かせるわ』
「了解」

通信が終わると携帯のメールを開いた。

愛しい人が自分に最後に送ったメールを・・・・

P . S .

普通の生活を望んでいます。貴方の子供と一緒にいるような・
・・・・・愛しています

「・・・・・・どこから話せばいいのかしらね・・・・・・」

ベルモットはしばらく考えていた。

「簡単に言つてしまえば、薬の人体実験の結果こうなったのよ・・・

・・・

「・・・・・・人体実験・・・・・・」

「十一年前のことだ・・・・・・」

厚史が言つた。

「薬品研究は私が抜けてからは、格段に効率が落ちていた。私が発見した理論を下地にした研究で、当の本人が抜けたんだから当然の結果だろうな・・・・・そんな中、長い年月を掛けてある薬が出来上がつた。そして、それをベルモットに投与した。」

「その薬はまさか・・・・・・」

「ああ、不老不死薬APT-X4869Bだ・・・・だが、完全で

はなかつた。なぜなら・・・・・

「不老ではあるけど、不死ではないから・・・・・」

厚史の後をベルモットが継いだ。

「その薬は、細胞を永遠に再生するという目的は達成できていたわ。でも制作側も思いも寄らない欠点があった・・・・・それは、体内の免疫が徐々に壊れていくというもの・・・・・」

ベルモットはそう言った。

「その結果が今の私に状態・・・・・確かに年は取らないけど、いつ免疫に限界が来て死ぬか知れない、いわば免疫不全状態・・・・・」

・・・

「原因は不明だつた。対処方法もない。少なくとも私の頭ではどうにもできなかつた・・・・・」

厚史はそう言った。

「・・・・・それで、アンタは容貌が変わらないという事を世間に気付かれない為に、一人一役で『シャロン』と『クリス』を演じ分け『クリス』の存在を世間に定着させた。そして、頃合いを見て『シャロン』を死んだことにし『クリス』として生きることにした・・・・・」

新一はそう言つてさらに続けた。

「そして、アンタは自分をこんな体にした研究とそれを引き継いだ富野を憎んでいた。それで、港で当時の灰原を殺そうとした・・・・・」

・・・

それを聞いたベルモットはどういう訳か、少し口元を緩めた。

「さすがは東の高校生探偵なだけあるわねcool guy。でも最後の一行だけは間違いよ、確かに研究の続行には反対していたし、憎んでもいたわ。それでも彼女を殺したいとまでは思わなかつたわ・・・・・・」

「・・・・・・・どういふことだ?」

新一は眉を吊り上げた。

「相手に銃を向けておきながら、殺意はなかつた?ふざけるのもい

い加減に・・・・・

言い終わる前にベルモットが二つ目の銃を放つて寄こした。

「その時に使おうとした銃よ・・・・・」

新一は仕方なくその銃を調べた。

だが、そうしている内に顔色が変わつていった。

「・・・・・なんてこつた・・・・・」

銃から取りだした弾丸を手にし、しげしげと眺めている。

「・・・・・麻酔針が埋め込まれてる・・・・・」

「えつ？」

そう言つて志保もそれを見た。

「それだけじゃねえ・・・・・」

そういうとその麻酔針を引き出した。

「・・・・・博士が作ったやつにそっくりだ・・・・・」

第三十四話 P · S · I LOVE YOU（後書き）

いつも、七夕夜想曲です
話がひたすら伏線処理なので集中力を切らしている読者の皆様も多いと思いますが、もう少し続きます。
お付き合い願います。

また当小説を気に入られましたら・・・

『安い席の方は手をパチパチ鳴らしてください、
高い席の方は宝石をチャラチャラ鳴らしてください』（B Y J O
h n L e n n o n ）

・・・・・と、いうのは冗談です。
サブタイトルをビートルズの曲から取ったので悪乗りしてみました。
ぜひ、下の欄から感想をお願いします。
では、またお会いしましょう

第三十五話 針は語る

「大きさと言い、形と言い……これと比べてみる、そつくりだ・・・・・」

新一は、自分が持っている時計型麻酔銃の針を取り出し、志保に差し出した。

「当然だよ、阿笠博士の発明品を参考にしたからな・・・・・」「え？」

二人の視線が厚史に注がれる。

「三十年前にこれを見せてもらつてな。彼は動物用に麻酔銃を作つた・・・・・確かに首輪型だつたかな・・・・・そして、その針を応用して人間にも作用するようにした物がそれだ。」

「そんな、まさか・・・・・」

志保は信じられないと言ひ顔をしている。

今にも針を取り落としそうだ。

「・・・・・いや、多分本当の事だ・・・・・」

新一が思いだした様に言った。

「博士が前に言つてたんだ。学会で富野博士に知り合つて、自分の発明品も気に入つてもらえたみたいだつてな・・・・・それが麻酔銃の原型だつたんだ・・・・・」

そう言つて、再び小銃を手に取つた。

「良くできる・・・・・心臓目掛けで撃てば普通の拳銃と何ら変わらない。だが、相手の皮膚をかすらせる様に撃てば麻酔針が作用する・・・・・目眩ましには打つて付けだ・・・・・」

新一は弾を元に戻し、ベルモットに投げ返した。

「・・・・・じゃあ、あの時は、私を殺そうとして撃つたんじやなくて、私を眠らせようとして撃つた・・・・・」

そういうことになる。

思い返してみれば、五メートル程の距離にある的を外す方が不自然

だ。

「そうよ、あなたとは研究所でゆっくり話がしたかったから……」

・・・

つまり、いつこうことだ。

ベルモットは宮野博士からつたわる薬品研究を恨んでいるという事を動機に、志保を殺そうとした。

しかし、本当の目的は志保の保護で、その動機は行動を起こす為の隠れ蓑に過ぎなかつた。

そして、ジン達に対しボロが出にくくするために実際に傷を負わせる方法を探つた。

「志保を連れて帰るようになに言つたのは私だ」

厚史が言つた。

「そうすれば、ベルモットが飲んだ APTX 4869 B の解毒剤ができるかもしないし、できるだけ私の傍にいさせたかつた・・・・・エレーナの生命維持装置が切られた今となつては、唯一の肉親だからな・・・・・」

「じゃあ、お母さんは・・・・・

志保が聞いた。

これまでにない程、真剣な顔をして。

「ああ・・・・・ジンが生命維持装置を切つた・・・・・

そう言って、視線を部屋の隅に移した。視線の先には、三段程の棚があつた。

その上に、女の人の写真と木箱が置いてあるのが確認できる。

「・・・・・そう・・・・・

志保が状況の割に冷静な声を出した。

だが、それは一番下手な『振り』だつたのかもしれない。

新一は、地面に目を落とした志保の頬に涙が伝うのを見た様な気がした。

「そのことを証言してくれますか？」

新一が聞いた。

「もちろんだ・・・・・」

厚史は立ち上がりつた。

「行こう、ベルモット・・・・・我々の最後の使命だ・・・・・」

「・・・・・富野は先に降りてくれ、俺はもう少しここに残る・・・・・」

厚史とベルモットが部屋を出た後、新一が行った。

「どうして？」

志保が聞く。

「隅から隅まで捜査する・・・・・組織の犠牲になつた人のため

にな・・・・・

そう言って、白い手袋を取り出した。

「お前は親父さんの傍にいてやれ、後は任せろ・・・・・」

志保は領き部屋を出ていった。

第三十五話 針は語る（後書き）

こんばんは、七夕夜想曲です。

すみません、昨日一日風邪で倒れていきましたので、更新が遅れました。

今回は更新が遅れましたが、次回更新は予定通り一月一日です。

それでは、失礼します。

第三十六話 本拠地での終焉

「手を挙げなさい！」

一階の出入り口から出てきたベルモットにジョーディは叫んだ。

「・・・・・・・・・・」

ベルモットは一度後ろを振り返るような仕草を見せたが、頷き、黙つて手を挙げた。

その従順さには、逆にFBIのメンツが面を食らった様だ。彼女の腕に手錠が掛けられた。

その後ろから、厚史と志保がやつてきた。

「志保チャン・・・・・・・その人は？」

二人は一瞬、目くわばせをした。

しかし、次の瞬間には頷き、

「・・・・・・・富野厚史、この人が組織の統率者です・・・・・・・・」
はっきりとそう言った。

今度こそ皆が面を食らった。

『富野』という名字を聞いた途端、すべてを理解したようだ。

「・・・・・・・そう、じゃあ手錠を・・・・・・・・」

そう言いかけたジョーディに向かつて、厚史は手首から先のない腕を見せた。

ジョーディは再び驚いたようだ。

「えー・・・・・・・じゃあ・・・・・・・・」

「私が付き添います」

志保がきつぱりと言つた。

「・・・・・・・OK、それでいいわ・・・・・・・・」

そして、二人はベルモットが乗せられた車に乗つた。

「・・・・・・・制圧完了か・・・・・・・・」

ジェイムズがポツリと言つた。

目の前では組織の構成員が次々と車に乗せられている。

「ええ、後はヘイジがジンを連れてきて、シンイチが帰ってきたら作戦完了よ……」

その時、ジョイムズを呼ぶ声がした。

「チーフ！」

「キヤメル君か？」

キヤメル捜査員が一人の男を抱えてきた。

「こいつなんですが……」

「何か問題があつたのかね？」

それを聞くと、キヤメルはその男の袖口を捲った。

「……盲管銃創か、日本警察の前に病院だな」

「それは、そうなんですが……」

「…………何だ？」

「こいつは二十一階にいた奴なんです」

「…………そんなんばかな、快斗君に実弾を持たせた覚えはないぞ」

二十一階は、快斗が担当した階である。

予めそこに配備されていた五人の構成員はトランプ銃で片付け、後から来た援軍は全員、自前の催眠ガスで眠らせたらしい。

もちろん実弾なんかは使っていない。

「いつたい誰が撃つたというんだね？」

「…………分かりません…………」

当然、人の気配は皆無である・・・・・・様に思つたが、階段を一人の男が上がってきた。

壁に縋りながら、一步、また一步と足を進める。とある箇所で立ち止まつた。

そこの壁を軽く押す。

・・・・・隠し扉だ。

壁が内側に折れ、部屋への入り口が見えている。男はその中に入つていつた。

その部屋の中である機械の操作をしている。

突然、男の口元が緩んだ。
操作が完了したらしい。

機械とは反対側の壁際に寄り、そこに埋まつてゐるボタンを押した。

・・・・・またしても隠し扉だ。
だが、今度は部屋ではなく、大人一人は楽に入れる大きさのパイプ
管があつた。

それは滑り台のように 実際そのように使うのだろう 下に延びて
いた。

案の定、男はそこを滑り降りていつた。

『先生か?』

「ヘイジ、そつちはどう?』

『それが、変なんや……ホンマで合ひつひるんか
?』

「合ひてるはずよ。どうかした?」

『・・・・・ジンがおらん、いつたい・・・・・
いつたいどに?』

そう聞こりとしたが、その声は爆発音に飲み込まれた。

平次は窓から上の階を見た。
詳細は分からない。

分からぬが、二十五階が炎上しているのが見えた。

『ヘイジ! 急いで逃げて!』

無線から声が響いた。

「そんなことゆうても・・・・・」

爆発の衝撃で階段に瓦礫の屑が落ち、階段が塞がっている。
退路を断たれた。

どうにもできず右往左往していた時、窓ガラスが割れる音がした。

「平次! 捣まれ!」

快斗が怪盗キッドの格好をして飛び込んできて、手を差し出した。

平次は一瞬で理解したようだ。

頷き、快斗の手を摑む。

それを確認した快斗は、窓の外に飛び出した。

次の瞬間・・・・・・

バサッ!

ハンググライダーの開く音がした。

「平次！」

「快斗！」

平次と快斗が着陸した瞬間、和葉と青子の声がした。

二人とも爆発音を聞いて車の中から駆けつけていたのだ。

快斗はハンググライダーを置み、建物の方を振り返った。

「・・・・・いつたい誰が・・・・・」

今や建物の一部が焼け崩れている。

「・・・・・ねえ、新一は？」

「「えつ！？」」

皆が一斉に、その声がした方を見た。

蘭が心配そうな顔をして立っている。

「そういえば・・・・・」

快斗が辺りを見回した。

どこにもいない・・・・・

「まだ、建物の中！最上階よ！」

横から、慌てたように叫ぶ声がした。

その声の主を見る。

志保だった。

「くそっ、仕掛けたつたな！もう火が回って来やがった…………」

・

右側にも炎。
左側にも炎。

完全に、新一は退路を断たれていた。

そして、これも仕込んであつたのだろうか？

尋常ではない速さで煙が充満してきた。

（…………このまま死ぬのか…………）

息が苦しくなつてくる。

思わず蹲つた。

（…………？…………）

最後の時が来たのだろうか。

どこから差し伸べられるのか、不思議な手の幻を見たような気がした。

蘭は今にも建物に向かって駆け出しそうとしている。

「落ち着いて！」

「でも、新一が・・・・・・」

「貴方まで死ぬつもり！」

蘭も必死だったが、志保も必死だった。

「新一！」

蘭が叫んだ。

しかし、その叫びも虚しく建物の一部がさらに焼け落つた。

ガラガラと言づ音も同時にした。

「新一――――――！」

第三十七話 彼は何処へ

「…………どうやった、園子ちゃん」

「だめ、返事もしてくれない…………」

「やつぱり、アタシらが励ます事なんか無理なんかなあ…………」

・・・

和葉と園子は、探偵事務所の椅子に座り、暗い顔をした。

組織の本拠地から帰つて来て、はや三日。
蘭は自室に閉じ籠つてしまつている。

無理もない。

自分の幼なじみ、いやそれ以上の存在であつた人間を失つたのだ。

「…………ねえ、新一君はどうなつたんだろ？」

青子がそう言いながら三人分の「一ヒー」を炒れて戻つて来た。

三人はそれに口を付ける。

全員の目元には涙の跡が残つていた。

あの後、事の次第を知つた日本警察によつて崩れた建物が捜査された。

田畠警部らの奮闘にも関わらず、新一の遺体は発見されなかつた。
警察の見解は二つに別れた。

一つは業火によつて、骨まで灰にされてしまつたという説。

あの火災は証拠隠滅の為に使われる物であつた可能性が高い。

それ相応の火力ならば、そうなつても当然だという悲観的な見解である。

もう一つは死んだ様に見せかけ、どこかで生きているという説。
名探偵である彼の事だ。

あの状況から脱出しても不思議ではない、といつ希望的な見解である。

しかし、事件から既に三日が経過している。

仮に生きているとすれば、彼から何らかのコンタクトがあるはずだ。

そのような理由から、警察の見解は前者に傾いていた。

「分かんない・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・」

目の前の現実はどうしようもなかつた。

外は雨。

まるで、少女達の涙であるかの様に降り続いている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「快斗か・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

平次が、FBIが捜査のために借りておる部屋で待機しているところに快斗が入つて來た。「ほんで、どうやつた裏からの情報入手は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

快斗が苦々しそうに言つ。

「だが、新一の生存を裏付ける様な有力な情報は手に入らなかつた・

・・・・・・・・・・

二人は暫く押し黙つていたが、やがて快斗が口を開いた。

「なあ、平次、お前は今回の事件に納得できるか？」

「いや・・・・・・・工藤の生死如何に関わらずに、推理的に見て納得がいがん・・・・・・・それに事件はまだ終わつてへんはずや」

・・・・・ そう言つと思つたぜ

悦シはそへ言ひと立せ上がり備え付けの黒板に向かつた

卷之三

快斗がチヨークを手にしたのを見て平次が言った。

その横井はレバと手次の方を見て頷いた。

「アーティスト」の言葉が、この本には登場しません。

快斗は黒板に『なぜジンがいなくなつたのか?』と書いた。

腱を断裂させたそうや。そないな事になつたら、まず人は立てん。仮に百歩譲つて立てたとしてもや、そつからどうやって逃亡したんか、その経路が分からん。出入口はFBIとCIAが固めとつたし

「それは何歳?」

平次が発する疑問を大まか三つに分けて箇条書きにし、先を促した。

仮に生きていたりしたら向で俺らと連絡を取らへんのか

再び長めの疑問だったのです。今度は二つに分けて箇条書きにした

量後は、検査の時間は見事隙れ立てる話の人物

そう言って、黒板にそのことを書いた。

立派な書く表れる。はしていかがやがて口を開いた

人物なんか?そこの用約は可なんや?そへかう、組織約は物なんや?

か、単数なんか・・・・・これに関する疑問は未知数や・・・・

•

快斗はそれらを書き終え、チョークを置いた。

そして、平次の方に顔を向ける。

「そして、本当に事件が終わっているなら・・・・・・

「こんな疑問は残らんはずや・・・・・・」

「

蘭はベッドの端に腰かけていた。

・・・・・泣いている・・・・・

確かに、白い怪盗が以前に予言した様に彼は帰つて來た。
だが、再び居なくなつて、もう会えないかもしけない。
でも・・・・・まだ彼の『返事』を聞いていない。
このままなんて絶対に嫌だ！

「・・・・・帰つて来てよ、新一・・・・・・」

第三十八話 最後の雨天

「APT-X4869Bの改良版？」

志保は思わず身を乗り出していた。

「いつも、物の喰えでガラスより向こうに『届く筈がない。つまり、状況はといふと、志保は厚司のいる留置所に面会に来ているところだつた。

本来なら志保も組織関係者として留置されているはずなのだが、組織の行なつた犯罪行為に直接の関連がなかつた事と、組織壊滅に協力した事が考慮され、一時釈放となつたのだ。

「そんな物があるの？」

「ああ、ベルモット 組織が壊滅した今となつてはシャロンだな、シャロンがジンから入手出来た唯一の情報だ。」

穴空きのガラス越しに厚司が言つた。

「いつたいどんな物？」

「ある意味完成品より質が悪い。未完成品に即効性を加え、その成分を塗り薬に作り替え物だ。なぜそんな事をしたかというと、塗り薬にする事で免疫が徐々に壊れていくという欠点を解消できるからだ。そして、欠点が解消されたその薬を銃創などの外傷に使用したそうだ。即効性があるため、どんな傷も五分で完治する・・・・・・」

「・・・・・それは、確かにの？」

志保はそう聞いた。

「おそらく、確かだ。それに、そう仮定すると説明できる事柄が一つある。」

「・・・・・ジンの失踪ね・・・・・・」

「そうだ。人間はアキレス腱を切られたらまず立てないし、歩けない。当然、逃亡なんかできない。だが、傷を五分で治す事ができれ

ば話は別だ。薬を患部に塗つて、五分待てば歩ける様になる。逃亡

二十九

まるで即席麺ね

志保が軽い笑いを上げた

…・…・…・でも、逃走経路は？正面の入口はFBIとCIAが

「それについても、回答ができる。おそれへ隠し通路を使つたんだ。

L

歩味が驚いて聞き返す。

「ああ、一十五階にあつて……そうだな……パイ

「お前の辺り台の様はないでしょ、そこを辺り除くと地圖は出てそこからモーターボートで逃走できる。」

たしそこ天掛かりな仕掛けた

アメリカのある人形劇にも出ておてもおかしくない。

「じゃあ、ジンはそこから逃走した可能性が高いって事？」

間違しないたゞれば、……」

「・・・・・秀一！大丈夫なの？」

「心配ない。少し寝不足なだけだ。」

微かなデジャブを感じているところに、ジェイムズがやつて来た。

「赤井君、少し休んだらどうだね？」

「それでは、何が？」

そう言いながら、田をジエイムズに向ける。

その目には、いつもポーカーフェイスの彼にしては珍しく、ある強い感情が宿っていた。

それ有何と呼ぶのかは分からぬ。

喻えるならば、獲物を追う狼のような、といったところだろうか。「無いよ、赤井君。さっきのメールの内容の『ジンの逃走経路が分かった』というのが最後だ。」

「そうですか……まあ、いいでしょ。少なくとも奴が生きている事は分かりましたからね……」

そう言うと、ジョディの炒めたコーヒーを一気に飲み干し、再び捜査に向かった。

「…………今でも彼女の事を思つてゐるのね…………」

開け放しのドアを眺めながら、ジョディは言つた。

「多分な…………ジンを捕まえない限り、彼は気が休まらないんだろう…………」

そのようなことを話しながら、一人は部屋を出た。

「そういうえば、ヘイジとカイトは?」

「ああ、あの二人も、さつきあの部屋から出て行つたよ。」

ジョディは何の気無しにその部屋に入つていた。

「…………秀一も同じ様な事を言つてたわね…………」

連日の捜査で疲れている顔をして、小さくそう言つた。

ジョディの目の先には、快斗が、平次の言う疑問を書いた黒板があつた。

外では、相も変わらず雨が降り続けている。だが、明け方には止むようだ。

翌日、事態は急展開を見せた。

第三十九話 夜勤明け

午後五時

夜を徹しての捜査で疲れた体を休めるべく自宅のベッドで寝ていた快斗だが、突然意識を現実に引き戻された。

寝惚けた頭で、なぜこうも突然目が覚めたのかと辺りを見回す。すると、携帯がけたましい音を立てて鳴っている事にようやく気付いた。

快斗は不機嫌そうな顔をして安眠を妨げた元凶を手に取る。だが、電話越しの人間の方が遙かに不機嫌だった。

「コラア！ 快斗お！ お前いつたい、どうゆうつもりや！？」

電話に出るや否や、開口一番怒鳴り散らされた。

大声の関西弁を聞きながらベッドを後にする。

「なんだよ平次、えらく不機嫌じやんか。そういう時は、牛乳を一リットル程飲んでだなあ・・・・・・」

「アホな事ほざいとらんと質問に答えろ！ いつたい、どうゆうつもりや！」

「何の事だよ？」

そう言い終わる頃には階下に着き、平皿に被せてあるラップを外してパンを手に取った。

「誤魔化す氣か！？ 新聞を見てみい！」

「新聞？」

予め母親が作っていたパンをかじりながら、テーブルの上に置いてあつた朝刊を拡げる。

いかにも億劫だと言つている様な、ゆっくりとした動作である。だが、一面に踊っている文字を見た途端、快斗は絶句した。

怪盗キッド宣戦布告！－

狙いは本日来日のビッグジュエル『ブルー・サンシャイン』

警視庁捜査二課

「全員出動だ！－！」

中森警部の声が響く。

「警部気合い入つてますねえ先輩・・・・・」

「まあ、前回は白煙を食らつたからな・・・・・」

「ブツブツ言わずに、さつと出動せんか！－」

「は、はい！」

毛利探偵事務所

「・・・・・するとか、予告状を出したんはお前やのうて別人ち

ゆう訳か？

「ああ。俺じゃないのは確かだ。」

快斗はホッと一息付いた。

そして、

「…………こじてもよ、平次。電話に伝わるや否や怒鳴りつける事もないだろ？」

快斗がしかめつ面をして言つた。

「しゃあないやろ。ここソフアード寝とつたら、和葉に起つられて、新聞見たら一面にデカデカとあの文字やで。考えるより前に、体が動いとつたわ」

「…………毛利探偵が居なくてよかつたな」

携帯片手に怒鳴り散らしている平次の姿が脳裏に浮かぶ。ありありと想像出来てしまふのが恐ろしい。

ちなみに小五郎は警視庁からの依頼で今日一日留守だった。

「まあ、事件の全てを日本警察に言わなくて正解だったな」

快斗が言つた。

実を言つと、FBIとCIAが今回の事件に関して日本警察に提供した情報は『ある犯罪結社を壊滅に追い込んだ』という部分だけである。

日本警察は当然詳細を求めたがそれには応じなかつた。

なぜならCIAが回収した組織の記録の中に海外に支部があるということが示唆されており、つまりそこから、まだ事件は終わっておらず、下手に情報を公開するのは危険だと判断されたからだ。

「せやな、これで事件はまだ終わつてない事がはつきりしたからなあ」

平次はニヤリとしながら快斗の質問に応じた。

「今回の予告状はお前が出したもんやない。そうなるとまず、考えられるのは『キッド』に罪を着せようとしたる模倣犯や、その顔は既に探偵の顔だ。

「けど、模倣犯だとすればもつと手近な物を標的にするはずだ。『

ビッグジュエルの法則』は一般には知られてないからな。わざわざそれを盗む機会を待つ必要もない。よつて模倣犯の線はなしだ」「そうすると、残りの線は、何かをしでかそうとする人物がいて、『怪盗キッド』をかたる必要があるという線。ここで注目されるのが、標的をわざわざビッグジュエルにしてあるという事。さつきも言つたように俺の標的がビッグジュエルだった事はほとんど知られてない。知つているのは数人だ」

「そうや。そして、その二つの条件に当てはまる人物、それは・・・

・・・

二人は頷き合つた。

「「工藤新一」」

「そうや、あいつは生きとつたんや」

平次が言つた。

「ああ、そしてジンを捕まえる作戦を立てた」

「それがこの予告状や。これでジンを誘い出して罠に掛けようかう作戦や」

しばしの沈黙。

そして、

「さてと、現場に行きますか・・・・・」

快斗がそう言い、二人は立ち上がつた。

その時・・・・・

ガタツ！

ドアの外で物音がした。

「誰だ？」

快斗がドアを開ける。

その人物の後ろ姿が一瞬だけ見えたが、次の瞬間、階段の角を曲がり見えなくなつた。

階段を降りていった人物。
見間違うはずもない。

それは蘭だった。

第三十九話 夜勤明け（後書き）

こんばんは、七夕夜想曲です。

ここ数日、携帯から投稿していたのですが、本日 いや既に昨日ですね 投稿しようと思ったらまさかの編集トラブル。状況を把握するため、慌てて画面の易いパソコンを立ち上げて編集し直したものの、気付けば0時10分。更新が遅れてしまつてすみません。

次回の更新は、当初の予定通り、昨日から三日後、つまり、今日から一日後の2月14日です。

では、失礼します。

第四十話 協力者

「…………まざいな…………」「ああ、あのねーちゃんの事や。工藤を探して無茶しかねん。危険や…………」

蘭の新一に対する想いは既に証明済みだ。

どんな事をしても新一に会おうとするだろ？

「早いこと、見つけなきやいけないんだけど…………」

快斗は腕時計に目を落とした。

「予告一時間前…………じつする？」

「アホ、ねーちゃんの方が優先に決まつとるや。下手にこんな話しどつた俺らの責任もあるんやで」

平次は帽子をかぶりなおして走り出しだが、振り返ってこう言った。「それから、和葉と中森のねーちゃんと鈴木のねーちゃんも呼んでくれ。俺らよりねーちゃんの行動が分かるはずや」

「分かった

快斗はそう言い、携帯片手に平次とは反対の方向に走り出した。

米花美術館

『A班は美術館の周りを取り囲む様に固める。B班は入口付近の警備に付け。

C班は館内に何らかの仕掛けがないか徹底的にチェックしろ。今度こそ奴を捕まえるんだ！』

無線から中森警部の声が響いた。

指示通りに警官が動く。

「警部」

「何だ?」

刑事の一人が携帯電話を片手に持っている。

「お電話です」

それを受け取る。

「はい、中森…………何だ日暮か?何の用だ?…………そんな物いらん、断る…………なに?白馬警視総監からの指示だと…………しようがない、連れて来い」

携帯電話の電源を切り『…………』と呟くと弦く。

「何だったんですか、警部?」

「捜査の応援だとよ。『息子の替わりに』と書いて白馬警視総監殿から直々にな

「…………そつちはどうだ、平次?」

『アカン、まだ見つからん』

「そうか…………なあ、平次、今思つたんだけども…………」

「

『何や?』

暫く沈黙があつた。

「新一はキツドの恰好で今回の作戦をやるのかなあ?」

『…………多分そうや。そうやないと誘い出すのは困難やううじ…………』

とあるビルの屋上

「首尾良く運べば今夜で決着か・・・・・・」

白服に身を纏つた男が呟いた。

容貌は少年のようである。

腕時計に目を落とす。

予告三十分前

「わろそろだな・・・・・・」

そう言つて、イヤホンに全神経を集中させた。

「中森警部」

日暮警部が一人の男を伴つてこつちに向かつて来る。

「やつと来たか、日暮の狸め・・・・・で、隣の男が捜査協力をしてくれる人物か?」

そう言つて、そちらに目をやる。

「ああ、紹介しよう。今回、捜査協力をしてくれる・・・・・・

「工藤優作です、どうぞよろしくお願ひします」

そう言つて、右手を差し出す。

中森警部は、いやになるくらい似合つている欧米風挨拶に戸惑つた様だが、やがて、やや強めに手を握り返した。

「それじゃあ、私はこれで」

日暮警部はそう言つて帰つて行つた。

「中森警部、早速ですが警備体制の説明をお願いします」

「え? あ、ああ、美術館の周囲に警官を三十人、出入口に二十人、

そして・・・・・

優作は、この説明の間中ずっと、手をポケットに入れていた。

しかし、この時は誰も気付かなかつた。

そのポケットの中で盗聴幾のスイッチが入れられた事に・・・・・

第四十一話 一礼と違和感

“…………”

そんな疑問が頭を駆け巡る

『工藤新一、アイツは生きとつたんや』

ドア越しに聞いた声がリフレインする

その声の意味を理解した次の瞬間、体が動いていた

まだ糸は切れていない…………

角を一つ、また一つと曲がる

その度に彼がそこにいるような気がした

そして、その度に期待は裏切られた

だが、諦めない

もう一つ角を曲がる

すると、そこは大通りだった

またしてもハズレ…………

車道沿いの歩道に立つて辺りを見渡す

「…………あれば…………」

米花美術館

「予告五分前、配電室異常は無いか?」

『今のところ異常はありません』

「注意を怠るな!暗闇に紛れるのが、奴の常套手段だ!」

「以前の様に光に紛れる可能性もありますが、それに関しては?」

優作が聞いた。

「え?あー…………そうですね。」

中森警部は収めた無線を再び取り出した。

「C班、異常は無いか?」

『ありません』

「逃走目的ではない装置もか?例えば以前の光に紛れるような物だ

が」

『それも見当たりません』

「分かった、引き続き警戒を怠るな」

中森警部は無線を切った。

「どうやら、大丈夫のようですね」

優作が言つ。

「ええ。とりあえず、これで灯かりが消える事も日が眩む事も無い
でしょ?」

中森警部が少し誇りしそうに言つた。

「しかし、油断は禁物ですよ。何せ相手は怪盗キッドです。下手を

すれば『優越』が『憂鬱』になりかねませんからね？
その優作の言葉に、中森警部は再び苦い表情を作った。

「警部、予告一分前です」

「よーし、全員配置に付け！」

警官達が慌ただしく動く。

「三十秒前・・・・・二十秒前・・・・・五、四、三、二、一・
・・・・・」

パリン！

ガラスが割れる様な音がしたかと思えば、次の瞬間灯かりが消えていた。

それと同時に『ガシャン！』という大きな音もした。
視界が塞がれる。

だが、月明かりのお陰で、一秒程で目が慣れた。

「そ、そんな馬鹿な！」

窓辺にキッドが立っていた。

それだけなら、何も驚かない。

注目すべきはキッドが握っている物だ。

それは、間違ようもなく・・・・・

「ブルー・サンシャイン！？」

それは、間違いなく寸前までショーケースの中にあった。
その方を見る。

そこには蓋の開けられたショーケースがあるだけだった。

つまり、目が眩んだ一秒の間にショーケースを開け、更に窓辺まで移動したというのか？

だが、今は方法などはどうでもいい。

「待て、キッド！」

中森警部がその方に駆け出す。

すると、キッドは一礼した。

(ん?)

なぜか突然、違和感を覚えた。

だが、そんな事を詳しく考える隙は無い。

今は目の前の標的に集中すべきだ。

しかし、その刹那、キッドはハンググライダーで飛び立つた。

『怪盗キッドは現在北西に向かつて飛行中。指示を
だが、応答が無い。

「警部!」

中森警部はハツとしたようだった。

「こちら中森、全員全力でキッドを追え!」

やつと指示が出る。

それと同時に、美術館の外でサイレンが鳴り、パトカーが一斉に走
り出した。

「どうかしたんですか警部?」

中森警部は何やら考へているよつだつた。「…………霧囲気が
違つたんだ……」

「は?」

「さつきのキッドはいつものキッドと雰囲気が違つたんだ……
・お前は何も思わなかつたか?」
「ええ、氣のせいじゃないんですか? キッドの真似ができる人間が
居るとは思えませんし」

「そつか……そついえば工藤氏はどうだ?」

「……あれ? さつきまでここに居たんですけど……」

とあるビルの屋上

一人の男がスナイパーのスコープで米花美術館の方を見ている。

丁度、白い鳥がエサを捉えたところだ。

その顔を見る。

・・・・・間違いない、この鳥は自分が追う標的だ

黒い鳥の爪を一度もすり抜けた若く賢さかしい鳥。

だが、その鳥も今は仮の姿だ・・・・・

「・・・・・ゲームセットだ・・・・・・」

男は引き金に指を掛けた。

だが

「それ以上動くなジン、動いたら撃つぞ」

第四十一話 風向あわせ

「貴様・・・・・・・・ビリして！？」

ジンは、かなり意表を突かれたようだった。
その人物は影になつていてよく見えない。

それにも関わらず、それが誰であるかはすぐに分かった。
とすれば疑問はただ一つ。

なぜ、さつきまでスナイパーの標準越しに見ていた人物が目の前にいる？

「お前が、さつきまで狙っていたのはダニーさ・・・・・・・・残念だ
つたな」

まるで心を読んだかのような言葉が響いた。
その声の主は銃を向けたまま一歩踏み出す。

そして、ジンをしつかりと見据え、こう言った。

「・・・・・・・その様子だと、まだ何か言い足りないみたいだな・・
・・・・・」の際だ、聞いてやつても良いぜ？」

一方のジンは自嘲的な笑みを浮かべた。

「・・・・・・それじゃあ、聞かせてもらおうじやねえか・・・・・・
・」工藤新一 よお

まるで、その言葉がスイッチであつたかのように、暗闇の中に新一の姿がはつきりと浮かび上がった。

「ハンググライダーが飛ぶには、適度な逆風が必要の筈・・・・・・
だとすれば・・・・・・・」

まだ、遠くに見えるビルに向かって走り出した。

「まず一つ田だ。なぜこの場所が分かった？」ジンが言つ。

「まず、ハンググライダーが飛ぶには適度な逆風が必要だ。夜には陸から海に向かつて風が吹くから、ハンググライダーの進行方向は、その逆の海から陸だ。

さらに、米花美術館から見て海は南東にある。それらの事を踏まえて逃走経路を予測すると、米花美術館から北西方向に逃走すると考えられる。また、誤差が考慮に入れると、高い建物から狙撃するのがベストだ。お前はそう考えるだろうと俺たちは予測したのさ。そして、米花美術館から見て北西方向にある高いビルは、この天海ビルただ一つ。だから俺はここで張つていたといつわけさ。」

「フン、なかなかの推理だ。この間までガキの姿だったにも関わらず、全く衰えてないな・・・・・」

「『なかなかの推理』か。その言葉、そつくりそのまま返すぜ。『江戸川コナン』のからくりをよく調べたもんだ」

お互に軽口を叩いているが、その間には形容しがたい威圧感が漂つていた。

「だが、俺がお前を殺そとしなかつたら、どうするつもりだつたんだ？もしくは、今回の怪盗キッドの正体に俺が気付かなかつたら

？」

「お前程の切れ者なら、百パーセント見破れると思つたし、どうやつても俺を殺そうとする筈を・・・・・」

？」

そして、じつ続けた。

「敵は必ず始末するのが、お前達のやり方だからな」

階段を上がって来る音が聞こえる。

「さてと、お喋りタイムはここまでだ。俺の仲間が来たみたいだからな。足音が聞こえるだろ?」

ドアが開く。

だが

新一は目を見開いた。

現状が理解できない。

なぜコイツがここに来たんだ?

「蘭!？」

「し、新一……」

だがその時、一発の銃声が響いた。

弾丸が蘭の足を掠める。

ジンがライフルを放っていた。

さうして、一発目を撃とうとしている。

それが横田に止まつた時、新一は考えるより先に体が動いていた。

警視庁捜査一課

「・・・・・・銃声が聞こえたですって！？」

電話を取つた高木刑事が声を上げた。

他の刑事達も一斉にその方を見る。

「場所は？・・・天海ビルですね、分かりました」

電話を置き指示を仰ぐ。

佐藤刑事がそれに応えた。

「行くわよ！高木君！」

「はい！」

「くつ！・・・・」

新一は腹を庇つて蹲つた。

すぐ後ろにいる蘭を守る事はできたが、弾丸は新一の左腹部を貫通していた。

「新一！」

「う、動くな蘭・・・・」

形勢が逆転していた。

ジンがライフルを構えて近づいてくる。

「自分の身を挺してまで守るとは、余程大切な存在らしいな」
ライフルが新一の頭に突き付けられた。

「安心しろ。彼女の死に様を見なくて済むように、真っ先に逝かせてやる・・・・・アバよ、名探偵・・・・・」

引き金に指が掛かる。

しかし、別の人物が先に引き金を引いた。

パシュー！パシュー！パシュー！

サイレンサーの音が四回響いた。ジンが崩れ落ちる。

両肩と両足を撃ち抜かれていた。

「彼女を連れて、早く逃げろ！」

「あ、赤井さん・・・・・」

ジンを撃つたのは赤井秀一だった。

銃で威嚇しながらジンに近寄る。

「ここは任せて早く行け！」

新一は頷いた。

「蘭、その足じゃ立てないだろ。俺に掴まれ」

「でも、新一の方が・・・・・」

確かに、新一の方が重症だ。

そんな体で支えられるのだろうか？

「バーコ。たとえ、腹を撃たれようが胸を撃たれようが、両足が立つ限りお前だけは支えられるんだよ・・・・・」

第四十二話 任務とアクシント

「…………田暮警部！？」

パトカーの中から出てきた小五郎と田暮警部を見て、高木刑事が頓狂な声を出した。

「どうしてここに？毛利さんと現場に行くんじゃなかつたんですか？」

「ああ、そのつもりだつたんだが…………」

小五郎が言った。

いつになく真剣な顔をしている。

田暮警部が話の続きを始めた。

「そこに行く途中で毛利君の携帯に電話があつてな。その電話の相手はこう言つていた『今晚ここで何かが起る』とな。」「でも、ただのいたずらって事も…………」

「まあな。だが、電話の相手は変声機か何かで声を変えている。いたずらにしては手が込んでいると思わないかね？」

「…………なるほど…………」

「それに、その電話の相手はこう言つていたらしい…………」

その顔が一層真剣になった。

「『この件には工藤新一が関わっている』とね…………」

その話を聞いていた警官たちの間を、沈黙が襲つた。

「じゃあ、工藤君は…………」

「断定はできん。だが…………」

その言葉は途中で遮られた。

「警部……」

警官隊の隊長の声が響いた。

「入り口から誰か出ます！」

ジンは気付かれないように懐に手を入れた。

痛みで震える手を駆使して薬品ビンの感触を確かめる。

赤井秀一の方を見た。

建物の下に集まるパートナーの方を見ている。

この時とばかりに、薬品ビンをこつそりと取り出す。

地面にビンを置き蓋を取った。

「・・・・・甘いな・・・・・」

不意に頭上から声が降ってきた。

同時にビンが取り上げられる。

「偶然やつて来たパートナーをミスティレクションにしようとしたんだろうが、そうは問屋が卸さないぞ・・・・・」

取り上げたビンを興味深そうに見ている。

「これが五分で効く魔法の傷薬か・・・・・」

「なぜ、それを知っている?」

ジンは、忌々しさと驚きが混ざった顔をして聞いた。

「じつには有力な証言者が一人もいるんでね・・・・・」

そう言ってから、その両方が義理の父と妹になる筈だった事に思い当たつた。

明美が殺されなければ確実にそうなつていただろう。

だが、明美が死んだ今はどうなのか。

考え方によつて、二人とも親戚であるとも言えるし、そうでないとも言える。

いまいち断定ができない。

そもそも、それ以前に、そんなことを考える権利が今の自分にある

のだろうか？

（・・・・・『捜査に私情は必要ない』か・・・・・）

「酷い言葉だな・・・・・」

「工藤君！それに蘭君！？」

入り口から出てきたのは、新一と蘭だった。

二人が近づいて来る。

「佐藤刑事・・・・・・蘭を頼みます・・・・・・」

「分かったわ」

蘭が佐藤刑事に支えられて傷の治療のため救急隊の方に向かつた。そこまで、見届けた新一はホツとしたのかパトカーに凭れ掛けた。穏やかでなかつたのが小五郎だ。

「新一！貴様！」

「待て！毛利君！」

今にも新一に殴りかかるとした小五郎を、日暮警部が抑える。その刹那、新一が崩れ落ちた。

高木刑事が慌てて駆け寄る。

そして、傷口を見た途端に顔色を変えた。

「腹部を打たれてます！重傷です！」

それを聞いて、日暮警部も慌てて駆け寄った。

「なんて事だ、工藤君はこんな体で蘭君を支えていたのか・・・・・

・

「とにかく、もう一台救急車を・・・・・」

高木刑事がそう言いかけた。

だが、言い終わる前に、誰が呼んだのか敷地内に救急車が入つて来た。

「いつたい、誰が通報を?」

救急隊員の一人に田暮警部が聞いた。

「名前も名乗らずに、ここに来いとしか言わなかつたので、よく分かりませんでした・・・・・・刑事さんの一人じゃないんですか?」

「違います。どんな声でしたか?」

「・・・・・これといって特徴はありませんでしたが、女の人の声でしたね」

「女ですか・・・・・・」

「ええ・・・・・では、私はこれで・・・・・・」

新一を乗せた救急車が走り出すところだつた。

「・・・・・佐藤刑事、新一は?」

傷の手当てを受けている時、蘭が佐藤刑事に聞いた。

「救急車で運ばれたみたいよ。詳しくは分からぬけど・・・・・・

「・・・・・わたしも病院に行きます」

蘭は今にも立とうとしたが、包帯が巻かれた足ではできるはずがなかつた。

「無理しちゃダメよ、まだ痛むはずだし・・・・・・・・

「…………でも、新一の方がもつと痛くて苦しい筈なんです。傍に居てあげたいんです……」

「…………」

佐藤刑事は少し迷っているようだつた。

一方の蘭は、机にしがみついてでも立とうとしていた。

それを見て、

「…………分かつたわ…………」

佐藤刑事が折れた。

「…………FBIの赤井秀一さんですね？」

「そうです」

「これから、事情聴取をしますが、今度こそは全てを話してくれますね？」

「…………保証しかねます。まだ、解明できていない部分があるので…………」

米花総合病院

「蘭ちゃん！」

青子と和葉の声がした。

手術室の前には、知らせを聞いたみんなが集まっていた。

「怪我はどうなん?」

「大丈夫、それより新一は・・・・・・・・

皆の顔が暗くなる。

「・・・・・・・・先生が言つには、重傷で今夜が峠だつて・・・・・・・・

「わたしのせいだ・・・・・・・・

「蘭ちゃん?」

「わたしが新一を追いかけて建物の中に入つたりしなければ・・・・

・・・

「それは違うな・・・・・・・・

低いテノールの声が響いた。

「・・・・・・・・新一のお父さん・・・・・・・・

いつの間にか、優作が来ていた。

「気に病む事はないよ、蘭君。アイツは任務を実行しただけだ。君を守るという任務をね・・・・・・・・

優作はそう言った。

「心配は無用だ。アイツは君を残して逝くような奴じやないさ・・・・

・・・それに・・・・・・・・

そこで、一旦言葉を切つた。

そして、聞き取れるか聞き取れないかと言う程小さな声で、二つ言つた。

「今回のアクシデントは私たちの責任もあるからな・・・・・・・・

「え?」

「すべてはアイツが説明してくれる・・・・・・・・一人ほど来客があるかも知れないがね・・・・・・・・

言うだけ言って、優作は帰つていった。

「・・・・・・・・なあ、平次どういう意味だと思つ?」

• • • • • • • • • • •

۱۶۰

第四十四話 生還

『それに新一は、他にもここを離れたくない理由がありそうだ』

『服部平次、工藤と同じ高校生探偵やー』

『よお、ボウズ…………何やつてんだ?こんな所で…………』

『

『私はあなた達二人のラブコメのファンなんだから』

『そう、彼よ。私の胸を貫いた彼なら、なれるかもしねい…………
・・長い間待ち望んだ銀の弾丸に^{シルバーブレット}・・・・・』

『行こうベルモット。我々の最後の使命だ』

左右を火に囲まれていた。

自分は蹲っている。

そのとき手が指し延べられた。

これが俗に言うフラッシュバックってやつか？

人間が死ぬ直前には、過去の出来事が映画のフィルムを見ているかのように、目の前を流れると言われている。今が正にその状態だつた。

今までの出来事が走馬灯のように駆け巡る。自分は死ぬのだろうか？
そして・・・・・

『新一』

愛しい幼なじみの顔が見える

やつぱり最後はお前か、蘭・・・・・

この光景は、いつのものだ・・・・・

『新一』

いや、待てよ・・・・・こんな光景は今までに見たことがない・・

「新一」

俺は本当に死ぬのか？

それどころか、蘭の声が次第にはつきりしていく。

「新一！」

「ら、ん・・・・・・」

(・・・・・・生きてる?)

よつやく、その事を自覚できた。

それを自覚した途端、全身のありとあらゆる感覚が戻って来る。真っ先に、右手を包んでいる温かい感触に気付いた。

(何だろ？・・・・・)

そう思つて右手を見る。(・・・・・・小さな幸せつてのは、このことかもな・・・・・・)

自分の右手を包んでいるもの。

それは蘭の両手だった。

「ちょっと、新一、大丈夫なの？」

ベッドから起き上がった新一を見て蘭が言った。

「大丈夫・・・・・にしても、しぶといね俺も・・・・・」

新一は包帯越しに腹を摩つた。

この調子だと大丈夫そうだ。

なぜなら、傷の痛みより、蘭の手が離れた事を気にしていたからだ。

「それより、足は大丈夫なのか？」

新一が蘭に聞いた。

だが、返事はなかつた。

返事の代わりに聞こえてきたのは、小さな嗚咽の声だった。

「蘭！」

新一は慌てて田を上げる。

「どうしたんだよ？」

新一が聞く。

「寂しかったんだから・・・・・・」

蘭は目拭いながら言った。

「新一が居なくて寂しくて・・・もう会えないんじゃないかと思うと、すごく怖くて・・・組織に乗り込む前にした会話が最後かと思うと、田の前が真っ暗になつて・・・・・・じままで心配させたら気が済むのよ・・・・・・」

蘭は体を振るわせ、じままでを一息に言つた。

だが、流れる涙は悲しみの涙ではない。

それは、安心と嬉しさから流れる涙だった。

この事は、少なからず新一を落ち着かせた様だった。

「蘭」

そう呼びかけ、ベッドの縁を軽く叩いた。

「じまに座れよ」

蘭は、まだしゃべり上げながらも、それに従い、ベッドの縁に腰掛けた。

「・・・・・・・ち、ちょっと新一・・・」

腰を下ろした次の瞬間だった。

蘭は新一にせきしく抱きしめられていた。

「暫ぐ、こうさせりよ。お前が俺の事で泣く度にこうしてやりたかったんだけど、体が体だったからな・・・・・その時の分まで、今こいつをせりよ・・・・・な？」

「・・・・・・バカ・・・・・・・」

蘭は新一の肩をギュッと握った。

窓から日が差し込む。

とても穏やかな時が流れていた。

訂正、穏やかでなかつたのがただ一人。

「このお、新一の奴――！」

病室の外からリアルタイムで一部始終を聞き、今にも新一の病室に飛び込んで行きそうな人物が、廊下にただ一人。そんなのに該当する人物。言うまでもないだろう。

毛利小五郎だ。

「まあまあ、オッサン落ち着きや。久しぶりの再会なんや。水刺すんは悪いで」

「そやそや、邪魔しんとき」

小五郎を諭しながら、袖を掴み、その暴走を抑えている二人組。その二人は、なぜか、今回は仲がいい大阪組であった。

この『仲がいい』という事に関しては、平次と和葉が屋上に上がつて何かを話した事と、深く関係があるらしいが、それはに関しては、またいつか。

「うるせえ！とにかく離しやがれ！」

「あなた、いかげんにしたらどう？」

凛とした声が響いた。

その声の主がこちらに歩いてくる。

「英理！？」

やつと小五郎の足掻きが止まつた。

「蘭が誰を選ぶかについては、私達が口を挟む余儀はないし、むしろ口を挟むべき所ではないわ・・・・・無駄な足掻きは大人氣無いから止めた方が良くてよ？」

英理がさらりと言い放つた。

「何だと！」

小五郎が英理の胸ぐらを掴んだ。
だが

ヒュツ！

小気味のよい風を切る音がした。

と思った次の瞬間、小五郎が床に投げ出されていた。

英理は両手を叩はたき小五郎に向かつて冷たくこう言った。

「暫く、そうしていることね・・・・・」

そして、スタスターと歩いて行つた。

「・・・・・くそ、一本背負いなんか教えんじゃなかつたぜ・・・

・・・」

「ねえ、事件は終わったの？」

蘭が新一に聞いた。

「いや、まだみんなに真相を話してないからな・・・・・それが終わつて初めて、この事件に片が付くんだ・・・・・」

新一は時計を見た。

現在時刻は午前九時。

「蘭、みんなに伝えてくれ。『午後七時に病室に集合。そこで、全てを話す』ってな」

「午後七時？今からじゃないの？」

「ああ、キャストの都合で、ちょっとな・・・・・それから、快斗には特に念を押してくれ。何があつても来いってな

「うん、分かった。」

蘭は病室を出ていった

第四十四話 生還（後書き）

こんばんは、七夕夜想曲です。

さて、今日は一月一十六日。

二二六事件があつた日で、今年で事件からちょうど七十年だそうです。

そんな事はさておき、今後の予定について書いておきます。
更新予定ですが、勝手ながら、一ヶ月程更新をお休みさせて頂きます。

なぜかと言いますと、一週間後に期末試験が控えており、さらに試験終了直後に学校の海外短期研修プログラムに参加し、三週間程アメリカに行つてくるからです。

次回更新は四月の上旬になる予定です。
一身上の都合で申し訳ありません。

それでは、失礼します。

第四十五話 三人目の生還者

「なんでしょうか、茶木警視殿」

中森警部は茶木警視の下に呼び出しを受けていた。

昨日の失敗に関して何か言われるのではないかと内心ヒヤヒヤだ。

「ああ、他でもない怪盗キッドの事なんだが・・・・・・」

茶木警視の口からとんでもない言葉が発せられた。

携帯の着信音が響く。

かつての恋人が好きだったバーラード調の曲。

二つ折りの携帯電話を開く。

「メール？」

ジョディが尋ねる。

「誰から？」

秀一は携帯を開きディスプレイの表示を見る。

そして、フツと笑った。

「新一からだ。事件の真相を話すんだとか・・・・・・

「・・・・・彼はどこまで知ってるのかしら・・・・・・

「さあな・・・・・まあ、行ってみようじゃないか」

「

「検査を打ち切れ！」とハロですか！？」

中森^{イシダ}部が顔を真っ赤にして怒鳴っている。

怒り心頭という詠葉の真意がよくわかる。

「この状況に当たはめれば」れ以上のベストマッチはないだろ？
「奴は、私が二十年間追つている宿敵にして生き甲斐なんですよ！
ここまで必死で追つてきて、いまさら諦められると思いますか！？」
「中森君、少し落ち着きたまえ……」

「ちちうは、老成した性格を思わせる落ち着いた声だつた。
「私にだつて納得がいかんさ。だが上からの命令だ。それにただで
終わる訳じやない・・・・・」

中森警部が厳しい顔で言った。

まるで『賄賂ならお断り』と言っているかのようだ。警視の方もその雰囲気を読みとったのだろう。

こう続けた。

「君の苦労を^{オカルト}勞つての昇進はあるらしげ、賄賂などではないよ。ちゃんと事情の説明をしてくれるやうだ。我々にも納得できるようにな・・・・・・」

のどいつです？釈明をしようだなんて言つてきたその『ろくでなし』は・・・・・

「それも上から聞いたよ。君の良く知つてゐる人物だ・・・・・・
こんな形で再開するとは思わなかつたがね・・・・・・」
その名前を口にした。

「・・・・・・な！そんなばかな・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

米花総合病院一階。

診察券らしき物を指で弄んでいる男がいた。

新聞を片手で持ち長椅子に座つてゐる。

入院患者だらうか。

すると、その男に、もう一人別の男が近づいて行き、いつ言つた。

「・・・・・・ずいぶんどこ無沙汰ですね？」

長椅子の男は新聞から顔を上げた。

「・・・・・・失礼ですが、どなたでしょ？」

「お忘れですか？工藤優作です」

長椅子の男に近づいていつたもう一人の男。

それは優作だつた。「ああ、有名な小説家の・・・・・・しかし、

お見知り置きはなかつた筈ですが・・・・・・

「誤魔化さなくてもいいですよ。私から見れば、あなたは透明な仮面で顔を隠しているようなものです・・・・・・」

「・・・・・・

しばしの沈黙。

そして、長椅子の男は新聞を折り畳み脇に置いた。

診察券は持つたままだが。

「…………いやはや、参った。なぜ分かりました？」

「本気で正体を隠そと企てるのでしたら、せめて診察券を弄ぶ癖は直しておくれべきですよ？」

「…………なるほど。習慣とこゝもののはおそろしい…………」

「そう言つて男は立ち上がつた。

その男に向かつて優作は言つた。

「…………行きますか？」

男は時計を見た。

「…………そうですね。行きますか…………」

「…………」

「…………おせーぞ、快斗」

「開口一番それはないだろ？…………」

本を読みながら言つ新一に、快斗は反論した。

七時十分前。

新一の病室には、すでに平次が来ていた。

「まだ時間内だし…………いや、そんな事はどうでもいい

快斗が言つた。

「さつさと真相とやらを話せよ、三人揃つたんだから」

「まだだ。まだキャストが揃っていない」

それを聞いた快斗は、改めて病室を見渡した。

「俺と平次とお前・・・・他に誰がいるんだ。FBIのメンバーか？」

「それもある」

新一は本を脇に置いた。

「一応、電話はしたからな・・・・」

それを聞いてた平次が、窓から下を見た。

丁度、玄関に一台の車が停まつたところだった。

「・・・・おっ、そう言つた端から、お出ましみたいやで見ていた車から、ジェイムズ、ジョディ、秀一が降りてきて、病院に入つていつた。

「ほんなら、こっちが聞きたいことをまとめて先に言つといたるわ」
平次は椅子に着き、新一に向き直つた。

「聞きたい事は三つや。まずは、どうやつてあの状況から脱出したか。炎上する建物の最上階からの脱出。それも、誰にも気付かれずにや。そんな事は快斗にも無理。『脱出王フーディー』でさえ怪しいわ」

快斗はムツとしたようだが、平次は構わずに続けた。

「次は、何で誰とも連絡を取らんかつたんかや。どんな事情があつたんか知らんが、それで毛利のねーちゃん泣かしたんや。ちゃんと証明してもらうぞ」

平次はさらに続けた。

「ほんで最後は、この一連の事件の裏にある・・・・」
「謎の人物はいつたい誰なのか？」

平次の声を遮り、ドアの方から声がした。

「赤井さん！」

FBIの面々が到着したところだつた。

「それは我々も知りたいね」

新一は時計を見た。

「七時一分前……そろそろだな」

その時、ドアをノックする音が三回響いた。

「お出ましだ……どうぞ」

ドアが開いた。

一人の男が病室に入つて来る。

新一以外の全員が呆気にとられた。

その人物の恰好に。

「お前…………何者だ！？」

快斗が声を上げる。

怪盗キッドがそこに立っていた。

「私を忘れたのか、快斗？」

「えつ？…………」

聞き覚えのある声だった。

「彼が今回の事件で要となる人物。『灰原』を助け、俺達に気づかれないように動いていた陰の調査員…………」

新一が説明し、その男は目深に被つていたシルクハットをとつた。

「黒羽盜一 もんだ」

第四十六話 再会

「親父・・・・・」

「ひさしひりだな、快斗・・・・・・」

盗一はマントを翻し、スース姿になつた。

そして、マントとシルクハットを部屋の隅に放り、皆の方に向き直つた。

快斗は父親に向かつてさらに寢いかける。

「生きてたのか・・・・・・」

「ああ、奴らが何か仕掛けてくるのは分かつていたからな。難を逃れるのは容易かつた」

そう言つて、病室の折り畳み椅子に腰掛けた。

「なら、どうして今まで隠れてたんだよ!」

快斗は追求する。

盗一を代弁する形で、新一がその疑問に答えた。

「しょうがなさい。盗一さんは極秘調査官なんだ・・・・・・IC

POのね」

警視庁捜査一課

中森銀三は自分の机に着き、パイプをふかしていた。

その面持ちは、お世辞にも良いとは言えない。

「まさか、こんな結末が用意されていたとはな・・・・・・」

昼間にやつて来た男の事を思い返していたのだろう。

そう言つて、パイプを再び口にくわえ、ゆっくりと煙を吸つた。

その煙を吐き出してから、ポツリと呟いた。

「複雑だな・・・・・・」

「「めんね、青子ちゃん、荷物持たせちゃって」

「いいの。」このくらいどうつて事ないよ」

他愛もない話しをしながら、二人は新一の部屋に向かっていた。

「・・・・・・どうしたんだろ?」

「さあ?」

病室の中が騒々しい。

「・・・・・・開けるよ」

「・・・・・・うん」

そして、部屋の戸を開けた。

・

「HCPの極秘調査官!-?」

快斗が本日一回目の大声を上げた。

「親父が!-?」

快斗は顔色を変え、平次はただ驚き、秀一は興味深そうに押し黙っている。

「少し落ち着け、快斗・・・・・・盜一さんの話を聞けば・・・・・・

・

「おじさん!-?」

皆が一斉に入り口を見た。

「青子・・・・・」

田を見開いた青子が、その後ろには同じように驚愕した蘭が立っていた。

「・・・・・青子ちゃんか。久しぶりだね・・・・・」

「どうして・・・・・」

盗一の声を聞き思考が戻ってきたのだろう。

青子は混乱しているようだった。

「快斗も青子ちゃんも聞いてくれ」

新一が言った。

「盗一さんの話を聞けば、全てが解決する・・・・・残された疑

問もね

新一は『どうい』と手で合図し、弁論の席を盗一に譲った。

第四十六話 再会（後書き）

三週間振りに日本に、このサイトには一ヶ月ぶりに復帰した七夕夜想曲です。

いやー、良い経験をしてきました。

いつか、三週間のアメリカでの生活について旅行記でも書こうかと思いますが、今は置いといて。

さてと、この小説もいよいよ大詰め、最後の伏線処理となりました。ここまで付き合っていただいた読者の皆様には感謝感激、お礼の言葉もありません。
ありがとうございます。

次回からいよいよ事件の全貌が明かされます。
お楽しみに。

では、失礼します。

第四十七話 H C P O

「・・・・・本計画に賛成の方は挙手を願います」

断固とした意志を感じさせる、低い声が響いた。

おずおずと、しかし全員が手を挙げる。

「賛成多数と見なします。よつて原案は可決されました。これにて緊急作戦議会を終了いたします」

その場の緊張が一瞬にして解かれた。

ガヤガヤと部屋から出ていく他の議員を見ながら、議長はポツリと呟いた。

「・・・・・ついに、実行に移される時が来たか・・・・・

そして、たばこの火を揉み消した。

FISMで初出場、初優勝を飾った作品・・・・・「

寺井がなるほどと頷いた。

ルーティーンとはマジック全体の運びの事で、FISMとは世界規模のマジック大会のことである。

ちなみに、盗一のレパートリーの数は軽く四千を越える。

それには、カード、コインを中心とするクロースアップマジックから人体切断といったステージマジックまで含まれており、その一つ一つにおいて、完成度が非常に高い。

その為、世界一を公式に認められるのは時間の問題だと言われている。

それ程までの噂にも関わらず、盗一はショーの反省点をノートに書き記した。

そして、寺井の炒れたコーヒーに口を付けた。

その一時間後、盗一は古びた空き倉庫の前にいた。

パリの裏通りにあるもので、数日前、ショーの準備の合間に見つけたものだ。

盗一はこの場所が気に入っていた。

そこは人目につかない為、人知れずマジックの練習をするにはうってつけであり、なにより静かのがいい。

静寂は思考を冴えさせ、自分のマジックに新たなアイデアを導えてくれる。

それは技を磨いていく上で、何より大切な事だ。

だが、この日の静寂、そして、この日からの静寂は崩れた。

倉庫のドアに手を掛けたその時だつた。

盗一は中から人の声がする事に気付いた。

(・・・・・こんな時間にいつたい誰が・・・・・)

古い倉庫の為、スライドドアのドアとドアの間に隙間が出来ている。念のため、盗一はその隙間から中の様子を窺う事にした。後々考えるとその策略は成功でもあり失敗でもあった。

「上手く入手できましたよ、チーフ」

「そうか・・・・・」

中には一人の男が居た。

その一人がまともな人間では無いことは一目瞭然だ。真っ黒なコートに身を包み、帽子を田深にかぶっている。これを不審者と言わばして何と言ひだらう。

「それで、ブツは？」

「これです・・・・・」

その一人が懐に手を入れ何かを取りだした。

(・・・・・確かにあれば・・・・・)

「アジア最大にして最古のアメジスト『パープル・クラシック』で
す」

予想通りであった。

盗一は、宝石、時計などに關しても、かなり知識を持ち合わせている。

なぜなら、アクセサリー如何で、マジシャンの印象が変わってしまふ場合も少なくないからである。

例えば、何もしていな両手を見せた場合と、銀色の時計を左手にはめ、両手を見せた場合には、確實に後者の方が見栄えが良くなる。その辺のセンスを掛け備えたマジシャンが盗一であった。

しかし、その知識を頼りにするならば、その宝石は個人所有のもので、ヨーロッパの大富豪が所有しているはずだ。

(・・・・・なぜこんな所に・・・・・)

当然の疑問が頭を過ぎる。

こんな貴重な物を、持ち主が売りさばくとは到底思えない。

「・・・・・なるほど・・・・・」

宝石を受け取つた方の男はそれをしばし眺めていたが、やがて体の向きを変え宝石を高く掲げた。

(・・・・・いつたい何をしているんだ?・・・・・)

盗一の疑問をよそに、その男はしばらくその体制を保つていた。

「・・・・・ハズレの様だな・・・・・」

やがて、男は言った。

「ええ、そのようです・・・・・・・じります?」

「・・・・・元の場所に戻しておけ。あくまで穩便にな。最近奴らがうるさくなつてきている。本来ならそんな面倒なことはしないんだが、万一に備えるべきだろつ・・・・・」

(元の場所に戻すだと?)

盗一の頭に次々と疑問が増えていく。

せっかく盗んだのならば、なぜ、再度の不法侵入などという危険を

昌さねばならないのだろう。

通常ならば、裏ルートで売りさばいてしまうのが普通だ。

それに、この連中はわざから不審な行動が多くなる。

特に、なぜ『宝石を掲げたまま固まる』などという間抜けな事をするのだろう。

(それに、奴らとは誰のことだ？)

ここまで考えた時だった。

盗一は、口を手で覆われ羽交い締めにされた。

そして、そのまま裏路地まで引きずり込まれていった。

「 いつたい、何を・・・・・・」

背後の暴君に向かつて、盗一は抗議声明を上げようとしたが、途中で再び口を塞がれた。

「 ・・・・・・・・」

背後の男は一言も声を出さない。

ならば、盜一も黙つているより他ない。

すると、さつきの男達の声がした。

おやりく、倉庫から出たのだろう。

こちには来ないようで、声がだんだんと遠ざかっていく。

その声が完全に聞こえなくなつて、ようやく背後の男が口を開いた。
盜一ではなく、無線に向かつてではあつたが。

早口のフランス語だったので、何と言つてているのかは良く分からな
い。

だが、最後に無線の向こう側から聞こえた『D - a c c o r d (了
解)』という言葉だけは聞き取れた。

(何が『了解』なんだ・・・・・)

そう思いながら数分間待つていると、背後から足音が聞こえてきた。
背後で、再びフランス語で会話が成された。やがて、後から来た方
の男が盜一に話しかけた。

「黒羽盜一さんですね？」

流暢な日本語に盜一は面を上げた。

その男を見る。

外見は明らかに西洋人だ。

だが、あんな流暢な日本語の発音は根っからの欧米人には不可能だ。

「父が日本人でしてね。私自身も十才まで日本にいました」

困惑している盜一に、その男が説明した。

「申し遅れました。フランソワ・碇、ICPO特殊捜査官です」

彼との出会い。

これこそが、一世代に渡つて繰り広げられる壮絶な戦いの始まりだ

つ
た。

第四十七話 H C P O (後書き)

読者の皆様、お久しぶりです。

帰国後の膨大な宿題と格闘、それから再三の書き直し為、更新がすっかり遅れました。
すみませんでした。

お詫びの言葉もありません。

さて、その変更点ですが、次話を投稿しない事には説明できません。
なので、釈明は次回にさせていただきます。

ご迷惑をおかけしました。

では、この辺りで失礼します。

第四十八話 Code:1412

「H.C.P.O.ですって？」

盗一は言った。

「ええ、そうです……」の通り

フランソワ・碇と名乗った男は懐に手を入れ、身分証明を差し出した。

「……立ち話もなんですし……」

彼は、もう一人のH.C.P.O.調査員に合図した。

「行きましょう。本部まで、案内します」

「……」

「……いつたい奴らは何だつたんです？」

車に乗つてしまふ時、盗一が訊いた。

「盗んだ物を返す計画を立てるなんて、ただの窃盗団とは思えない
んですが……」

さすがは、一千以上のマジックを開発し、三千以上のマジックにア
レンジを加えて来ただけの事はある。

頭の回転速度は並ではない。

碇もそのことを感じ取ったのか、感嘆の声を上げた。

「ええ、その通りです。奴らは私たちが追つている組織の一員です」「碇は言った。

「謎だらけの組織でしてね・・・・・ 分かっているのは奴等の組織が世界規模である事、それとビッグジュエルと呼ばれる宝石ばかりを狙つていることです」

「ビッグジュエル・・・・・ 確か、世界でも有数な巨大宝石の総称・・・・・・」

「そうです。中々に厄介な組織でしてね。侵入と逃走の痕跡を全く残さずに、犯行を成し遂げるんです。それに、奴等を追うようになつたきっかけも、偶然なんですよ・・・・・ 二年前の『ルーブル事件』をご存知ですか?」

「ええ、知っていますよ・・・・・ ルーブル美術館の裏通りで、一人のアメリカ人が通り魔に惨殺されたあの事件・・・・・ 場所が場所でしたから、よく覚えてます」

その事件がルーブル美術館の近くで起きた事と、アメリカ大統領が説明を求めて、直接フランスを訪れたことで、日本でも話題になつていた。

確かに、未だ解決されていない筈である。

「その事件が何か?」

盗一が訊き、碇は神妙な顔をして答えた。

「表向きは確かにそうなつています。しかし、あの事件には隠された面があるんです。まずはルーブル美術館の宝石が偽物にすり替えられていたこと・・・・・・」

盗一はポーカーフェイスこそ崩さないものの、内心では驚いていた。

「それは奴等が?」

「ええ、すり替えられていたのはビッグジュエルだけだったので、間違いないでしょ。おそらく、アメリカ人男性はその現場を目撃した為に殺されたんです・・・・・ まさに、藪から棒だつた。」

「・・・・・ どうして、その事を発表しないんです・・・・・・」

盗一が言い、碇は一層険しい顔をした。

だが、その原因は先程の盗一の質問ではなさそうだ。

「機密事項の一一つ目は被害者のアメリカ人男性がレーガン大統領の遠縁に当たること・・・・・」

「！」

「三つ目は・・・・・」

碇はやや間を置いて言った。

「その現場に1カペイカ硬貨が落ちていたことです・・・・・」

「・・・・・なるほど・・・・・」

しばらくして、盗一が言った。

カペイカとはソビエトの通貨である。

嚴重なセキュリティの掛けられているルーブル美術館への侵入。

被害者は現役大統領の遠縁。

そして、現場には1カペイカ硬貨。

これらが示すところは・・・・・

「その三つを発表しようものなら、冷戦が加熱して、両国間で全面戦争が勃発しかねない・・・・・そういうことですね？」

「そうです。それに、それだけでなくフランスも^{じぱい}入りを食い兼ねない・・・・・いやはや、困ったものです・・・・・」

落ちていた1カペイカ硬貨は、犯人グループの所属する組織が、ソビエトに本拠地を築いている事を示唆している。

その組織に、遠縁とはいえ自分の肉親が殺されたのだから、アメリ

力大統領が黙つていい筈がない。
ただでさえ険悪な両国だ。

即座に戦争だろ？

加えて、通常の手段を用いてルーブル美術館に侵入する事は、まずもつて不可能だ。

これは、内部の手引きがあつた事を示している。

ルーブル美術館は国立美術館だ。

そうなると、フランス国家自体も、どうなるか分かつたものではない。

すなわち、事態を丸く收めるには組織を解体しなければならない。
すると必然的に、それを目的としたICPO特殊捜査班が結成され
た事 자체も、極秘にしなければならないことになる。

「なので、あなたは今非常に厄介な立場に立たされています」

碇が言った。

「申し訳ありませんが、あなたが取れる選択肢は二つです。FBI
の証人保護プログラムみたく、別人になつて隠れ住むか・・・・・。
もしくは・・・・・」

碇は盜一の方をチラリと見た。

「我々ICPOに入るか・・・・・どちらかです・・・・・」

沈黙が車内を支配した。

ボーカーフェイスの盜一が、何を考えているのかは分からない。
だが、彼の生き方を考えると答えは決まつている。

「・・・・・入りますよ、ICPOに。隠れていてはマジックが
できませんから・・・・・但し、出勤は不規則という条件つきで
すけどね・・・・・」

盜一は碇が渋い顔をするものと思つていたが、当の本人は微笑んで
いた。

「構いませんよ。むしろ、その方が目眩ましになるかも知れない・・・
・・・・それに・・・・・・・・・・」

碇は声を落として呟いた。

「…………ひょっとしたら、あの役職が可能かも知れない……」

　　パリ　　ICPO本部

「…………それにしても、ずいぶんと潜るんですね……」

「エレベーターの中では呆れた様に呟いた。

碇の後を付いて歩いたのだが、ここまで来るのが既に冒険だった。関係者以外立ち入り禁止のドアのセキュリティを解除し、中に入つたのだが、そこは部屋ではなく両側にドアが四つずつある短い廊下になっていた。

驚いている盗一をよそに、碇は計八つのドアの一につづき再びセキュリティを解除した。

その中を見ると、わずか一メートル先にまたドアがあり、そのセキュリティも解除すると中はエレベーターになっていた。

こんな迷路のようなセキュリティは初めて見た。

「まあ、トックシークレットですから

鍵があつさりと言つてのける。

慣れているのだろうか。

そんなことを考える内に、エレベーターの扉が開いた。

「こつちです」

盜一はただ鍵に付いて行くだけだ。

しばらく歩く。

すると、再びエレベーターの前に来た。

「特殊捜査班自体はこの階に本部を構えているんですが、あなたにはもう少し下まで行つもらいます。」

良いタイミングで、エレベーターのドアが開いた。

「・・・・・1412?」

エレベーターを降りて所には部屋が一つしかなく、そのドアにはそのままのように書かれていた。

「“Code:1412”ICPO設立当初のコードで『1412』

は『巡回検査』を意味します。そして、この部屋は新たに計画された巡回検査のために建造されたものです』

そう言ってドアを開ける。

中は真っ暗だ。

「しかし、今までこの計画は可決されませんでした。なぜなら、この計画に見合う人物が見つからなかつたからです。今回可決された計画案も『適材を見つけた後実行』という条件付きなんです」

碇がスイッチを入れたのか、電気がついた。

「これは、いつたい・・・・・・」

訳が分からぬ。

これが、盗一の率直な感想だった。

「これが、あなたの役職です」

そう言われて、盗一はもう一度それを見る。ますます訳が分からぬ。碇が説明を続ける。

「I C P O の最高機密・・・・・・

碇も盗一と同じ方向を見た。

「怪盗 1412 号です」

盗一が見たもの

それは、後に世界を騒がせる』ことになる怪盗の象徴

白衣燕尾服とマントだった。

「怪盗キッドは奴らを誘き出すために、H.C.P.Oが仕組んだ囮捜査
官だったのを・・・・・」

「・・・・・じやあ、怪盗キッドってこいつのは・・・・・

父親の回想を聞いて思い出したたのだろう。

快斗がおずおずと言つた。

「その通り・・・・・

第四十八話 Code:1412（後書き）

こんばんは、七夕夜想曲です。

進級してからというもの、桁違いに忙しくなつてしましました。
なので、これからは更新を一週間置きにしたいと思います。
申し訳在りません。

ご了承下さい。

さて、前回書いた『当初の予定』との違いですが、最初はエヴァン
ゲリオンのシンジの「」とく、盗一がいきなり怪盗キッドに任命され
るという展開を予定していたのですが、論理的な思考を求める推理
系の小説でそれはまずい、ということで変更しました。

変更が幸を徴したかどうかは、読者の皆様にお任せします。
下の評価からどんどんご意見をどうぞ。

では、また来週お目に掛かりましょう。
失礼します。

第四十九話 Be Natural

「“Be Natural”…………そつこい」とですね……
・・・
「え？」

秀一の言葉にジョディが疑問の声を上げた。

快斗が補足説明をする。

「“Be Natural”つまり“自然に”は『マジック界のプロフェッサー』と謳われたダイ・バーノンの格言ですよ」
それでも、まだ分からなららしい。

あまりに抽象的的なも問題ではあるが。

「怪盗1412号がICPOの差し金であることを組織から隠し、民衆にもそれを『ただの愉快犯』と思わせ、さらに地方警察から100%逃げる。これだけのことを『自然』と思わせないと、この囮捜査は成立しない。その為には、演技力、高い身体能力、心理学の知識、そして、それらを実践で活かすことのできる豊富な経験が必要になる。これらを掛け備えた人物。それが盗一さんだつたというわけさ」

ようやく、納得したようだ。

すると青子が口を開いた。

「でもそんなことが本当に・・・・・・

「可能だよ」

盗一が答えた。

「まず第一に、この囮捜査は直接奴らと接触するわけじゃない。それまで、何の障壁もなく犯行を繰り返していた奴らの前に壁を作つてやるだけだ。つまり私がビッグジュエルを盗むことで、奴らの計画に狂いを作り、綻びを生じさせる。その綻びから情報を集め、次第に奴らを追いつめていく。だから余裕を持ってさつき項目をクリアできる」

青子に話しあると、盗一は再び皆の方を向いた。

「これが『怪盗1412号計画』の特徴であり、他の囮捜査と異なる点です。時間は掛かるが、穩便かつ確実に事を進めることができ、世間の目も眩ましやすい。この捜査は穩便さと正確さが第一ですかね。実際、失敗する事は殆どありませんでした……たつた一回だけ、ある人物を相手にしたとき以外は……」

「誰です、それは？」

平次が訊いた。

「新一君のお父さんだ」

全員が新一の方を見た。

「それは、長くなるから後にしよう……・・・・・ 穏便に ソ連とアメリカを刺激しないように 捜査を進めることができました。しかし、後手に回る作戦の為、得られる情報は少なく、恐ろしいまでの時間が掛かりました」

「どれくらい？」

快斗が訊いた。

「通常の十倍の時間はかかるただろうな。それでも、確実に霧は晴れていた。奴らの目的『不老不死』と『パンドラ』について突き止め、極秘裏に『パンドラ』の回収にも成功した。だが、十年経つても、組織を潰すのには至らなかつた」

怪盗1412号初出没から十年。

全員がこの数字の意味に気が付いた。

「体制が整わない内に奴らが、あなたを消そうとしたんですね」

「ええ、いい加減目障りになつたんでしょう。そのため私たちは善後策を練りました。それは、奴らに、自分たちの思惑通りに事が進んでいると錯覚させること。つまり、私が『事故死』することです」

全員が息一つ漏らさずに聞き入っていた。

氷山の見えない部分。

それが明かされつつあった。

「まず最初に、私は『パンドラ』を工藤優作さんに預けました。彼

とはふとしたきつかけで知り合い、私たちの計画によく助言してくれましてね。彼は裏では協力しつつ、表では『怪盗キッド』を捕まる為に警察に協力する若手推理小説家』というポ・ズを取ってくれました。これが助かつたのは言つまでもないと思います。つまり、彼は事情を知りながらにして『パンドラ』を預けても安全な域に彼は居たのです。我々は彼にそれを預け、姿を眩ます準備を整えました。そして・・・・・

その直後、ドアからもう一つの声が聞こえてきた。

「世間から姿を眩まして、陰で捜査を続行する。盗一さんはそのポジションに移った」

その声の主は優作だつた。

「奴らを叩けるまでに情報を揃える・・・・・陰で人の役に立つポジションにね・・・・・」

「・・・・・じゃあ、俺を巻き込んだ理由は何なんだ？」
快斗は怪訝な顔をして訊いた。

「部屋に隠し部屋を作っていて、しかもそれは時が来れば開くようになっていた。裏で捜査をして奴らを潰せるなら、どうして俺を巻き込む必要がある？」

「そのことか・・・・・」

「予定外の事態がなければ、お前が組織壊滅の引き金を引くはずだつたんだ」

「え？」

怪訝な顔をしている快斗に優作が言った。

「そう。その事態はよりによつて『引き金』を引く予定の数ヶ月前に起きた・・・・・」

さらに続ける。

「組織の再統合、そしてほぼ同時期に起きた新一の幼児化・・・・・・」

・これが計画を狂わせた・・・・・」

第五十話 カセットテープ

「俺が『引き金』だつた?」

快斗は怪訝な声を上げ盗一を見た。

「どういうことだよ、親父・・・・・・」

盗一はゆっくりと快斗に向き直り、話し始めた。

「田の上のこぶだつた私が死ねば、奴らの仕事に支障をきたすものはない。つまり、以前の様にどうやって私を出し抜くかを考えずに済む分、楽に仕事ができる。そんな事を長年続けていたいたところに突然『怪盗1412号』が復活したらどうなると思つ?」

全員が言わんとしている事に気付いた。

「焦つて、何としても消そうとする・・・・・・親父達はその隙を狙つつもりだつたのか?」

「その通り、穩便に事を進めるには、その方法しかなかつた・・・・・・とは言え、計画通りにはいかなかつたがな・・・・・・」

その横から優作が口を挟んだ。

「二大組織の統合・・・・・・これが計画の歯車を狂わせた最大要因です」

後を受けて盗一が話す。

「当初の予定は『怪盗1412号』の復活によつて混乱した奴らを一気に叩く、というものでした。これほど奴らに隙を作る事ができる事件はありませんからね。だが、『怪盗1412号』の復活より前に奴らの組織が別の組織と統合・・・正確には再統合しました。これでは迂闊に手出しができません。再統合を果たした事によつて、組織がどの程度拡大したか。それが分かりませんでしたからね・・・・・・だが・・・・・・」

盗一は快斗を見た。

「同時にこちらにとつて都合が良いアクシデントも起きました・・・

・・・カセットテープが故障していたことです」

盗一が言い、快斗が即座に反応した。

「カセットテープって……あの隠し部屋のか？」

ハケ月前、初めて隠し部屋に入ったときに流れていたカセットテープ。

それは古すぎた為、何を言つているのか碌に聞けなかつた。

「あのテープにはこう吹き込まれていた……」

【久しぶりだな、快斗。わたしの本当の正体を教えよう。私は怪盗キッドなのだ。怪盗キッド、正式名称は『怪盗1412号』。詳しく話すと長くなるので簡略化して話そつ。これはICPOの凶捜官だ。この計画はもう少しで完了する。そして、その計画を成功させる最後のカギはお前だ。今から言う通りにしなさい。どれでもいい、どこかの宝石を盗むという予告状を作つて、そこにそれを送る。そして実際にそれを盗みに入る。嫌われ役を負わせてすまない。だが、私たちが追つている組織を解体に導くにはそれしかないんだ。心配はいらない。お前ほどのマジックの腕前、ミスティレクションのテクニックがあれば必ず成功する。健闘を祈るぞ……】

「ミスティレクション?」

青子が疑問の声を上げた。

快斗が答える。

「観客の注意をマジシャンの秘密動作から逸らすテクニックの総称さ。でもそれは後回しだ」

快斗は一方的に会話を打ち切り、驚きの目で父親を見据えた。

「親父は、将来どうなるかも分からぬ息子に作戦の是非を委ねたつてのか!？」

盗一は全く動じる事なく答える。

ただ短く、

「そうだ」

と。

「俺がテープの通りにしなかつたら　まあ、結果的にそれが幸を
征したわけだけど　もしそうだったらどうするつもりだったんだ
よ？」

それを聞いた盗一は薄い笑みを浮かべて言った。

「子供を信じる事ができなければ、親失格さ。お前ならやつてくれ
ると信じていた」

第五十話 カセットテープ（後書き）

誠に勝手ですが、来週の更新は期末試験の真っ只中ですのでお休みさせていただきます。

第五十一話 和訳の齟齬

「そして、もう一つのイレギュラー…………」

「盗一は新一の方を見た。

「高校生探偵工藤新一君の幼児化」

自分たちが関わっていた事件の壮大さ。

その場の全員が息一つ立てずに聞き入っていた。

少しずつ糸が解れていく。

今、話題に上っている人物に言わせれば、それが探偵の楽しみだと
言うだろ？

「これも、私たちにはメリットとデメリットをもたらしました。デ
メリットは言うまでもありません。追っている組織の危険度が増し
たことです。そして、メリットは新一君の持っている情報が工藤優
作さんを通じて、我々の手中に入ることです」

すると、新一は眉をひそめた。

そして、優作に言つ。

「おい、父さん。それは初耳だぜ」

涼しい顔で優作は答える。

「そう、目くじらを立てるな。組織の大きさについては盗一さんは
らよく聞いていたから、お前を海外に連れ出せない以上、情報提供
をして早めに組織を潰すのが得策と見たのさ」

「・・・・・なるほど。あの時に言つてたECHOの知り合いつ
てのが、盗一さんだつた訳ね・・・・・」

新一は、両親に反対して日本に残ると言つた時のことを思い出して
いた。

あの時に気づくべきだったか・・・・・

「優作さんから新一君の幼児化を聞かされた後、我々は情報を集め
る為に日本にもどり、そして、私を含む幾人かは新一君の周りの警
護をしました。その間に情報を集めることができたのは言つまでも

ありませんけどね。そういうときでした。新一君達が組織でジンとウオッカと呼ばれる人物に遭遇し、杯戸シティホテルで一悶着あつたのは

話がだんだん最近に近づいてきた。

「彼らの視点から見て何があつたかは周知のことだと思つので割愛させていただきますが、私もその現場にて、探偵バッジの電波を傍受して彼らのやり取りを聞いていました」

「博士に盜聴防止機を付けさせないといけませんね・・・・・」
新一が冗談めかして言った。

「いや、付いていない方がいいと思うよ。現に役に立つたからね・・・・・」
「そのやり取りを聞いている中でAPT-X4869のデータが入ったMOが作業員のツナギの中に入っていると言つことを聞きました」

と言つことは・・・・・

「私はそれを回収するために、ジン達が部屋から去つた後で酒蔵に侵入し、目的を達しました。後は知つての通りです。私はそのMOを富野志保 当時の灰原哀に届けました。時が来るまで口外しないようにという書き置きを添えて・・・・・」

それを聞いて蘭が驚きの声を上げた。

「でも、燃えさかる炎の中に入るなんて・・・・・」

新一が答える。

「盗一さんじやないとできなかつただろうな・・・・・」
さらに続ける。

「炎の中からの脱出を幾度と無く演じてきた盗一さんだからこそできたんだ。そうでないと、炎の中に飛び込むなんてことは、素人は百パーセント不可能だからな・・・・・」

「さて、ここであなた方FBIの登場です」

盗一は秀一ヒジョーテイの方を向いて言った。

「それからしばらくして、FBI、さらにま CIAも組織を追つて
いるという情報が入つてきました」

盗一は続ける。

「一時期は、我々の役目は必要ないのではないかという意見も出ました。我々が何もしなくてもFBIとCIAが組めば確実に奴らを追いつめるはずだからです。しかし、その内、彼らは持つておらず我々だけが持つてている情報があることが発覚します。それは組織の海外支部が存在している」とです」

秀一がそれに応じた。

「ええ、確かに我々は支部の存在を知りませんでした。それを知つたのは日本にある本部を解体に追い込んだ後ですからね・・・・・・」

「
盗一は

「そうでしたか」

と言い先を続ける。

「それを考慮したとき我々の今後の方針が決まりました。支部を先に叩いては奴らに怪しまれFBIとCIAの捜査に支障をきたす。だが、手をこまねいているのも訛然としない。ならば、支部を徹底的に洗い出し、本拠地を彼らが叩くと同時に攻めればいい。我々工CPOはそう決議しました」

「じゃあ、奴らの支部は・・・・・・」
ジョディが言った。

「三日前に壊滅。跡形もありませんよ…………」

「以上が」

盗一はやや間を取つた。

「長い年月を掛けICPOが裏で取つていた行動のすべてです……」

「…………」

これほどの大きな立ち回り。

これを誰にも悟られることなく行つていたこと。

その場の全員が呆気にとられていた。

「じゃあ新一と志保ちゃんを助けたのも親父だろ？」

快斗が言つた。

「そう考へると、疑問が全て解決する。まず変声機に関して。あの謎の人物が親父なら、変声機なんて必要ない。どんな声でも自由自在だからな。よつてスイッチが切れていた事も説明が付く。あの変声機は奴らを攪乱するための物だつた。生駒山の件に関してもまた然り。俺達の捜査の手助けになればと思つたんだろ。そんでもつて最後に新一を助けたのも親父以外に考えられない。あんな高い所から救出なんてハンググライダーでもないと不可能だからな」

盗一は感心したようだつた。

「ほう、新一君達のおかげで推理力が上がつたようだな。その通りだ」

「へへ、FBIに CIAどちらにICPO…………」

快斗は驚きにため息をついた。

新一もそれに同意するかのように口を開いた。

「とた。
..
..
..
..
..
..
あん?
」

何気なく聞いていたが、最後の部分が引っかかったのか平次が口を開いた。

「米花総合病院やと?」

新一が説明する。

「『灰原』が入院していたとき元太達が見舞いに来たんだけど、その時に元太が外人とぶつかってこう言われたんだとさ。『お元気ですか』ってな」

平次がカリカリして言つた。

「これはフランス語が関係するんだ。フランス語で『大丈夫ですか』

使われることの方が多いんだ。つまりその人は日本に来たばかりで訳を一通りしか覚えてなかつたのさ。それで思つたんだよ。組織を追つている俺達の周りに、日本に来て間もないフランス人が居るつて事は、ひょつとしたらこの事件にはＩＣＰＯが関わつてるんじゃないか、つてね」

「…………なぬ…………な…………」

だが、優作が口を挟む。

「よくできた、と言いたいところだが、もしあと卑べ氣付くとかで
きたはずだぞ、新一。」

一
え
?
」

優作は懐から例の変声機を取りだした。

「父さんかも」てたのか？」

たが、それには答えず、それを裏に向ける。

「N0.931615だ。」

優作は変声機の製造ナンバーを指して言った。

—

「気付いたようだな・・・・・・」

新一は頷いて言う。

「9、3、16、15で囲切つて考える。そして、それに対応するアルファベットを当てはめる・・・・・だろ?」

9
3
1
6
1
5

それぞれに対応するアルファベットを当てはめる

浮かび上がる文字は・・・・・

I C P O

第五十一話 聞いの後【壹】

翌日 阿笠邸

「博士、コーヒー炒れてちょうどいい・・・・・」

そう言うが早いか、志保はソファーに沈み込んだ。

「進み具合はどうなんじゃ？」

そう訊きながらカップを取り出し、薄めに調節したコーヒーを炒めてやる。

角砂糖は三つ。

通常なら多いかもしだれないが、疲れた体には丁度良いだろう。

「とりあえず一段落つてここかしら。でも、先は長いわ・・・・・」

「期待してあるよ『志保君』」

志保が現在取り組んでいるのは、APT-Xシリーズの平和利用だ。中々に骨の折れる作業らしく、現に志保の顔には疲れの色が見てとれた。

それを追い払うかのようにカップに口をつける。

その時、インターホンが鳴った。

「はて？ 誰かな・・・・・・」

博士は玄関に向かったが、すぐに戻つて来た。

一人の男を連れて。

「志保君、君にお客さんじゃ」

入つて来たのは赤井秀一だった。

「君には謝らなければならない」

促されて席に着くや否や言った。

「お姉さんを守つてやれなくて、本当にすまなかつた・・・・」
そして、深々と頭を下げる。

志保は言つた。

「いいのよ、過ぎた事たるもの・・・・それにお姉ちゃんの仇は
とつてくれたんだし・・・・」

それでも、彼は頭を下げたままだつた。

「・・・・頭を上げて・・・・にい 義兄さん・・・・」

そう呼ばれた男は驚きのあまり顔を上げた。

さらに、志保は言つ。

「お姉ちゃんの恋人だもの。そう呼ぶのが自然でしょ？確かにいろ
いろあつたけど、それは変わらないわ。だから・・・・」

志保は手を差し出した。

「これからは兄妹として生きていきましょう。これからもよろしく、
にい 義兄さん」

二人は数年振りの真の笑顔と共に、互いの手を握り合つた。

「・・・・新一？」

病室のドアを開け蘭が入つて來た。

「何してるの？」

食事用のプレートをベッドの柵に取り付け、当の本人は上半身を起
こしていた。

その上には封筒が三つ、そして同じ数だけの便箋が置いてあつた。

「ああ、これね・・・・」

そう言って、その内の一つを蘭に渡す。

蘭は怪訝な顔をしてその文面に目を通していたが、読み終える頃に

は微笑んでいた。「そつか…………あの子達には何も話してないもんね…………」

「ああ、悪いことしたな…………でも、今全てを話すわけにもいかない。複雑すぎるからな…………」

「そうね…………十年後か…………」

蘭は便箋をもとに戻した。

「まあ、じつこうやり方もありなんじゃない?」

そして、新一に詰め寄る

「でも『誰かさん』はわたしにも未だにすべてを話してくれないのよねえ…………」

「あ、いや、それはだな…………」「分かってるわよ、ビリせ、こんな場所じゃ恰好がつかない、とでも思つてるんじゃないでしょ?意地つ張りなんだから…………」

「仰せの通りで…………」

「まあ、期待してるわよ…………」
そう言つて、蘭は暫く考へるような仕草をしていたが、やがて新一の頬にキスをした。

「…………まあ、今の段階ではまいりままでよね…………」

真っ赤になつている新一を尻目に

「部活があるからまた後でね」と付け足して部屋を出ていった。

(せひ、じつするか…………)

部屋に残された探偵が困惑していたのは誰でもない。

第五十二話 聞いの後【続】

「…………せじと…………」

長い話しの後、盗一は自分の息子に向き直った。

「父さんは母さんとフランスで過^じすつもりだ。日本国籍は抹消されてい^{るから}な…………お前はどうする？」

快斗は大して考えるまでもなく、即答した。

「決まつてんだろ、日本に残る。マジックの本場アメリカなら悩むとこ^{だけ}ど、フランスじゃあね…………」

と言いながらも、青子の方をちらりと盗み見る。

だが、盗一はその一連の動作を見逃さなかつた。

そして、薄く笑みを浮かべた後

「…………まあ、そういう事にしておいてやう…………」

と、息子に大打撃を与えた。

羞恥心と怒りで真っ赤に染まりながらも、快斗が応戦を試みる。が、あまりの感情の高ぶりに脈絡のない単語を数個連発する事しかできなかつた。

「青子ちゃん。『これから先』快斗のことを頼むぞ」とじめを刺した。

「・・・・・ほんと、親の不在をいい事に、一人は昨晩から朝に
掛けてぴったりとくつついて、離れることがなかつたとさ・・・・・

「おせえ！」

平次の言葉を遮つて、快斗が叫んだ。

「せやけど、大した

『あいつ』……………」

「おで怒るんなら、図星やな。『我熱い』」

……これ以上一言でも発してみる、平次。すぐさま『消

「おまえの心が、どうしてこんなに悲しきものにならう？」

通常なら必然的に後者の意味だが、マジシャンである快斗なら前者も可能だ。

談！

快斗がスナップ・フィンガーのポーズをしたのを見て、平次は慌てて言つた。

本当に遅れではかなわない。

「そつちじんせ、どうなんだよ？」

何のこゝかナシ

天然かわざとか おそらく前者だろう 平次は訊き返した。

とほけるな お前の和葉ちゃんに対する態度を見れば一目瞭然だ。前までは和葉ちゃんに何か頼まれる度に嫌そうな顔してたけど、今は、河が言つれる「ホイセ」とばかう遊ぶんやねえか。

通常ならば顔を赤くするなり、言葉に詰まるなりする所だが、この

鈍感男は平然と次のように言った。

「なんや、気付いとつたんか。確かに和葉と付き合ひよるで……」

「お前に見抜かれるとは思わんかったけどな……」

「宝石の鑑定を一瞬で済ます俺の目を甘くみるなよ……ん
で、いつ告白したんだ？」

復讐^{レッケイ}が完全に空振りに終わり、快斗が氣の抜けた声で訊いた。

「お前の親父さんに会う前やな。病院の屋上でストレートに
「……お前な、学校の屋上ならまだしも、病院の屋上って
なんだよ……よくOKしてもらえたな……」

「悪いんか？」

「当たり前だ！」

その時部屋のドアが開いた。

忘れていたがここは快斗の部屋である。

「快斗、和葉ちゃんと買い物に行くから付いて来て」

「平次、そうゆうことやから付いて来て」

青子と和葉が顔を覗かせた。

快斗が代表して、平次と共に通の疑問を口にする。

「なんで？」

女性陣二人は謀つたかのようなタイミングで答える。

「「荷物持ち！」」

翌日、平次と快斗は足腰が立なかつたとか何とか……

第五十四話 聞いの後【参】

一週間後・・・・・

「『二大組織に対する三大機関』『為政者の研究から派生す一大組織』『二世代に渡る捜査と陰謀』その他諸々・・・・・」
新一の病室だった。

快斗が持つてきた新聞の見出しを端から口にしている。

新聞には、壊滅した組織の特集が組まれており、各紙の半分以上をその記事が占めていた。

「ほんでも、何で今まで記事にならんかったんだや。警視庁が握りつぶしたんかと思つたわ」と、平次が言った。

「ICPOがアメリカ政府に事の次第を話して、ロシアとアメリカが和解するのを待つてたんだってよ。いきなりアメリカ政府の耳に入りでもして、冷戦が加熱したら元も子もないからな」
そう、新一が答えた。

隣には当然だが蘭がいる。

「第三次世界大戦の防止つちゅうわけか。ICPOは目的を達したわけやな」

「ああ、これで事件は本当に終わつたんだ・・・・・」
そう言って新一は伸びをしてた。

そこに快斗が不意打ちを掛ける。

「お前の事も出てるぜ、新一。『陰で動いていた平成のホームズ』だとさ」

「・・・・・なんて書いてある?」

「『ここ半年、消息を絶つていた『平成のホームズ』こと工藤新一君(17)が、その間今回の事件の主犯と思われる組織を追つていったことが昨日発覚した。警視庁によると、工藤君は組織の一員に毒薬を飲まされ体が幼児化し、身を隠す必要に迫られたとのこと。し

かし、それにも関わらずFBI等と協力して捜査を続け、傷を負いながらも逃亡していた最後の構成員を逮捕に追い込むなど、田覚まい活躍をした模様である。警視庁日暮警部らは彼に警視総監賞を申請している。弱冠17才の名探偵。今後の活躍を期待したい。』
だつてよ。良かつたじゃねえか、新一！』

だが、新一はあまりうれしくないよう見えた。

「じゃあな、また来るぜ」

快斗と平次は部屋を出ていった。

「『また来る』って・・・・・ひょっとして、新一、あの一人
に知られてないの？」

「まあな」

「どうしてよ？」

「今日ぐらい邪魔されずにお前といたかったんだよ・・・・・退
院したその日ぐらいなな・・・・・」

そして、病院を出る準備に取りかかった。
つまり今日は退院の日なのだ。

荷造りをしながら、蘭に話しかける。

「つてなわけで、今晚空いてるか？」

「え？・・・・・うん、空いてるけど」

「決まりだ。飯でも食いにこつけ・・・・・今夜八時に・・・・

・・・」

フランス マルセイユ

あるバーに一人の男が入ってきた。

「…………いらっしゃいませ………… 工藤優作さん」

店のマスターが言った。

「…………ばれましたか…………」

策を見抜かれた優作は変装を解いた。

「さすがは、盗一さんだ。なぜ分かりました？」

「ははは、私を騙そうと思つなら胸ポケットの万年筆は隠すべきですよ」

店のマスター、盗一は言った。

つまり「こは盗一が経営しているマジックバーである。

「つむ、抜かりましたな…………」

「私も同じように正体を見破られましたからね」

盗一は、長さ七センチ、幅一センチ程の四角い棒を取りだした。表には6と書かれている。

それを裏返した。

そこには9と書かれている。

「足すといぐらですか？」

「15」

棒を一撫でする。

すると6と書いてあつた所に15へと変化した。

裏も同様、9が15になつていて。

「この動作をカードでしている所を、見咎められ、正体を見破られた…………何たることか…………」

病院で優作が盗一の変装を見破ったのは「うごう」とだ。

「・・・・・それで、何か問題でも起つましたか？遠路遙々日本からいらっしゃるとまことに」

「いえいえ、日本の新聞を持つきただけですよ」

盗一はグラスを磨いていた手を止めた。

「それは興味深い・・・・・」

盗一はそれを手に取った。

「ようやく終わりましたね・・・・・新一君の宿我まだりですか？」

「すっかり良くなりましたよ、今日退院です」

「それは良かった・・・・・」

優作は出されたコーヒーを一口啜った。

「多分今頃は、蘭君と食事でもしてゐるんじゃないですかねえ・・・」

「・・・」

壁の掛け時計が正午を知らせた。

HΠローグ

米花センタービル 展望レストラン

ここには、世界的大怪盗の名を冠したレストランがある。見るからに高級で、とても学生の入る場所とは思えない。

だが、窓際の一番いい席に座っているカッフルは高校生だ。さらに、男の方は店名に相反する探偵と言う肩書きを持つ男である。しかし、黙つていればそんなことが分かるはずもなく、結果として、この場と雰囲気に最もお似合いなのは彼らだった。

工藤新一と毛利蘭。

彼らは店内にいる後数組のカッフルの中でも一際輝いていた。それもその筈、今夜は特別な夜になるはずだから。

「さてと・・・・・」

席に着くや否や、新一が口を開いた。

「最初に言わなきゃならない事がある・・・・・『ただいま』」「え？」

蘭は怪訝な顔をして、首を傾げている。

「前にここで『コナン』が『待つてくれ』って言つただろ？だからだよ・・・・・『ただいま』それから、待つてくれて『ありがとう』・・・・・・・

蘭は驚いたようだ。

だが、それも束の間、すぐに微笑んでこう言つた。

「相変わらず氣障なんだから・・・・・『おかげり』・・・・・

その後、一人は他愛もない話をしながら、食事を楽しんだ。

コナン時代の裏話、新一が不在の間の高校のこと、盗一を始めとするHCPの働きかけで留年を免れたこと、それでも特別補習があるらしいことなど、など。

新一は、ここに呼び出した本来の目的を忘れるほどに話し込んだ。だが、忘れるわけにはいかない。

デザートを食べ終わり、ついにその時が来た。

「蘭……」

そう言って、ラッピングされた小さな包みを手渡す。

「……何？」

「開けてみて」

ゆっくりと包みを解く。

やがて、小さな箱が現れた。

それをも開ける。

「これって……」

新一が頷き、そして言った。

「好きだ、蘭……」

「・・・・・バカ・・・・・」

しばらくしてから、蘭が言った。

言葉を発しながら泣いていた。

「今まで待たせたら気が済むのよ・・・・・すつと待つてたんだから、いつか新一がそう言ってくれるのを・・・・・」

蘭はためざめと泣き続けた。

だが、それは今までのようない不安、寂しさから来る物でも、安堵から来るものでも、ましてやそれらが入り交じった物でもない。

純粹な喜び。

これ以上ない幸福から来る物だった。

「わたしも大好き、新一・・・・・それからね・・・・・」
いつたい何だろうと身を乗り出している新一の目の前で、蘭はもうらつたばかりの指輪を左手の薬指にはめた。

「・・・・・もう一つ、新しい約束・・・・・」

新一は驚いた様子だつたが、すぐに微笑んでこいつ言った。

「なんで、いつもお見通しなんだろうな・・・・・」

ポケットからもう一つ箱を取り出す。

「実はそれペアリングなんだ・・・・・」

箱を開け、自分も左手薬指にはめる。

「もちろん、喜んで約束するさ・・・・・」

「夢みたい・・・・・」

帰り道、蘭はポソリと呟いた。

二人は夜風に当たりながら徒歩で家路に着いていた。

「夢みたい・・・・・・」

もう一度呟く。

今度は左手を眺めながら。

「夢じやないさ・・・・・・」

新一が呟つ。

「じゃあ、証拠を見せて探偵さん?」

そう言いながら、蘭が顔を新一に近づけた。

目を閉じている。

それだけで探偵は悟ったようだ。

「愛してる、蘭・・・・・・・・・・・・」

二人の唇が重なった。

世界に一つ愛が増えた日の夜

その恋人達の遙か上には

金色の丸い月が出でていた。

奇術師の予言 【完】

Hピローグ（後書き）

こんばんわ、七夕夜想曲です。

更新が飛んだ上にいきなり完結してすみません。

『闘いの後【参】』と『Hピローグ』は続きのような感じですので
このように一度に更新しました。

『なぜ?』と思つてゐる方に・・・・・

説明しましょう。

第五十四話の終わりで、パリ時刻正午となつています。
ここから時差を計算すると日本時刻は午後八時。
つまり、新一と蘭が食事を始めた時刻となるのです。
お分かり頂けたしょうか。

さて、本編は完結ですが、この後に後書きを書いつとります。
忙しいものでいつになるか分かりませんが、今月いっぱいまでには
書いつと 思ひます。

ではその時にお会いしょう。

失礼します。

あとがき

あとがき

【初心忘れるべからず】

この言葉の意味は周知の通り『ある物事を始めた時の純粋な気持ちを忘れるな』ということである。何か新しいことを始めてしばらく経つと、その大元は何だったのか・・・・・時に分からなくなるときがある。この言葉はそれを危惧したものであろう。だが、何年前だつただろうか、この言葉には別の意味があるという文章を読んだ。

その別の意味とは『初歩の醜悪な芸を忘れるな』といふことである。

ただ闇雲にやつても仕方がない。時々立ち止まって、自分がどれだけ成長をしたかを確かめなければならない。それらの過程の中で比較となる物が『初歩の芸』である。故に忘れるな。これがもう一つの意味である。

今回の作品を改めて見直してみると、『初歩の芸の醜悪さ』がよく分かる。そこを分析し、反省し、次に生かすこと。これは、処女作を書き終えた作者が第一にしなければならないことだらう。今は終わりであると同時に始まりでもあるのだ。

『いじままでお付き合い頂いたすべての読者の皆様、的確な助言をしていただきた先生方に心から御礼を申し上げます』

さて、後書きのH・セイは1919まで、以後は堅苦しく言ひ回しは抜きにしましよ。

感想、評価をしてくださった読者様、もしくは先生方、改めてお礼申し上げます。感想がどれだけ私を励まし、また評価がどれだけ参考になつた事か。この感謝の気持ちを言葉で言い表すことは不可能です。我ながら芸の無い言葉ですが、ありがとうございました。

話は打つて変わりまして、ここで本文の補足を

『バイスクル（Bicycle）』

U・S・プレイング社より発売中のトランプ。世界中のマジシャンが愛用している。

『クロースアップマジック』

こういえば分かりにくいが『テーブルマジック』とほぼ同意義。テーブルを囲んで手元で見せるマジックの総称。日本では前田智洋氏が大成し、『クロースアップマジシャン』と呼ばれている。

『岐阜のマジシャン』

D・沢こと沢浩氏のこと。日本屈指のマジッククリエーター。下記のダイ・ヴァーノンに絶賛された。またMr・マリックの師匠である。著者が最も尊敬するマジシャンの一人。

『ヨハン・ネポマク・ホフジンザー（Johan Nepomak Hoffmesser）』

現代カードマジックの基礎を築いた人物。本文で述べた通り、時代背景により活動当時は注目されなかつた。しかし、彼の功績は偉大で、その技術は今もマジックの中に深く根付いている。

『ハリー・フーディニー（Harry Houdini）』
脱出を得意とするアメリカの代表的なマジシャン。それ故に『脱出王』の異名を持つ。日本では余り有名ではないが、アメリカでは『マジシャンと言えばフーディニー』といつても過言ではない。その為、洋画の中でマジックをする人がいると『フーディニーのようだ』と喩えられる。だが、日本語字幕や吹き替えでは『マジシャンのようだ』と訳される。

『石田天海』

日本の代表的なマジシャン。彼の開発した『天海パーム』とこうテクニックは世界中のマジシャンに衝撃を与えた。

『ダイ・ヴァーノン（Dai Vernon）』

二十世紀を代表するマジシャンの一人。『マジックの神様』や『プロフェッサー』などと呼ばれる。彼がアレンジしたマジックは『ヴァーノンタッチ』と呼ばれ、独特の雰囲気を帯びる。『Be Natural（自然である）』や『Be Yourself（貴方自身である）』等、格言も多い。

『dai vernon』を“youtube”で検索すると彼が演じた『カップアンドボール』というマジックの演技を見ることができます。

最後に、今は亡き歌手、村下孝蔵氏に感謝の意を述べます。ハンドルネームをアルバムタイトルから頂いたばかりか、作品を書くに際し、未だ経験せぬ恋愛に関してどれだけのインスピーリングを歌詞中より得たことか。誠にありがとうございました。

七月十六日 七夕夜想曲

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5849c/>

奇術師の予言

2010年10月10日14時54分発行